
我は虎、満月に詠うもの

まっちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我は虎、満月に詠うもの

【Nコード】

N9946L

【作者名】

まっちい

【あらすじ】

藤堂陸、有田大信、五十嵐千里の三人は化物退治を生業とする山月村の出身の中学生である。三人は指導員である朱鷺野実に引率されて連続殺人事件の舞台となった片田舎の町へ訪れる。目的は事件の犯人である化け物の退治。だが、当初、一日で片が付くと思われた化け物退治は、陸の失態により、町中へ逃してしまう最悪の事態へと発展する。少年達はこの難局を打破し、無事に化け物を退治することが出来るのか。

ブローグ 弥生末日 夜 『始まりは雨』（前書き）

数年前、とあるライトノベル大賞に応募した作品です。私生活が忙しく、ずっと放置したままだったのですが、このまま埋もれさせていくより、衆目に晒して様々な方から感想を聞きたいと思い、投稿することにしました。稚拙な内容ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ 弥生末日 夜 『始まりは雨』

それは暗いどこかで蠢いていた。陰に身を隠し息を潜ませ休んでいた。

マダタリヌ、コノミヲオコスマデマダタリヌ
ニンゲンヘノウラミヲハラスマデマダタリヌ
ダガヤツラハコウカツダ。ダカラコチラモシンチョウニウゴカネ
バナラヌ

空を見上げると雲の隙間から顔を覗かせる月が目に入る。

ツキヲミルタビニオモイダス
アノトキノコウケイモイマトナツテハユメカウツツカマボロシカ
ダガエイエンニワスレハシナイダロウ

それは微かに獣の臭いをさせながら、ゆっくり気配を消していった。

空も山も空気も全てが漆黒に染め上げられた早春の夜の風景。聞こえるのは、時折辺りに響く鳥の鋭い鳴き声と用水路を流れる水のせせらぎだけである。

「今日も遅くなっちゃった」

しとしとと小雨が降り、曇り空で月明かりさえ見えない暗がりの中、ビニール傘をさした一人の女性がそんなことを呟きながら家路へと急いでいる。

年の頃は二十歳代前半といったところか。年度末とあつて最近彼女は仕事が忙しく、連日残業続きであった。しかも、帰宅するには人気のない田舎道を通らねばならず、なるべくなら明るい内に退社したかったのだが、現状ではそうも言つてられない。彼女は夏のボーナスが入ったらすぐに自動車を購入しようと、堅く心に誓ってい

た。

女性は先を進みながらも、時折後ろを振り返っては、やたらと辺りを気にしている。誰もいない闇夜の中を歩いているのだ、用心するのも無理はない。

市街地から離れたこの辺りの風景は遠くに家々の灯りを映すだけで、周りには水田と用水路、雑木林しかない。街灯のない道路は自動車も殆ど通らず、夜をいつそう濃いものにしていた。先の見えないう闇は女性の心を言い様のない不安の色に染め上げる。

「早く家に着きたい」恐怖心を具現した言葉を呟くと、女性は歩くスピードを更に上げる。

ざらり

闇の中に一条の光が煌めいた。そんな気がした。

同時に女性の背筋に突如悪寒が走る。

それは本能で感じたもの。近代から文明の恩恵に浸かりきった人間が遙か昔に忘れてきた野生のカンというものが警鐘を鳴らしたのだ。

何かが自分を狙っている。だが通り魔や変質者ではない。人ではない何かがこちらを見ている。

理由などはない、ただそう感じたのだ。早くここから逃げなくては、家に帰らなければ。心は焦るばかりだが、体は思うように動いてはくれない。アラートのような耳鳴りが頭の中にけたたましく鳴り響く。

「命が危ない！」

こんな感覚は彼女にとって生まれて初めての経験だった。

言うこと聞かない足を無理矢理動かして先へ進む。持っていた傘を放り投げ、水たまりで靴の中が濡れるのも構わず、無我夢中で走っていく。

ここからはやくはやくはやくはやく……。

一瞬、ほんの一瞬、何かの気配を感じて緊張がピークに達する。気を失いそうになりながらも何とか意識を保とうしていたが、そこ

までだった。

フッ

風切る音が耳もとを掠め、女性の記憶はそこで途切れた。永遠に。

明後日、その女性の写真が新聞の三面記事を飾っていた。

二十歳代の女性が通勤現場から帰宅する途中行方不明に。そして彼女のものと思われる引き裂かれた服と大量の血痕が、通勤路からそれ程離れていない雑木林の中で発見される。そんな内容だった。

世知辛い言い方をすれば、それは毎年二、三件は見かける、ワイドショーを一時騒がす事件の一つにすぎなかった。いずれは世間から忘れ去られる運命であった事件。

だが、それは全ての始まりにすぎなかった。

皋月中旬 金曜日 昼 『緑の町に舞い降りて』

軽い溜息も似た声で締めくくりの言葉が形の良い口から発せられる。
「と、言うことだ」

一通り話し終えた後、スーツを着た青年が手にしたレポート用紙を手前に放り投げて話を区切る。投げられた紙束は青年の足下に落ち、彼の目の前に座っていた小柄な少年が慌ててそれを拾い上げる。青年の足下に屈んだ少年の茶色い頭がもそもそ動いている。

「大事な資料を放り投げるなんて危ないなあ。風に舞って散らばったらどうするのさ」

文句を言いながら少年はレポート用紙を青年に渡す。

彼らが座っているボックス席の窓からは爽やかな風が吹き込んでいた。そして窓から見える景色は流れており、ガタンゴトンと規則的な音と振動が周りを包んでいる。ここは電車の中である。平日の昼間とあって乗客も少なく、この車両にも彼ら以外には数える程度しか乗っていない。

「別に気にすることはない。どうせ同じものはお前らに配っているわけだし、それに内容は全て頭に入っている。渡された資料の内容は一字一句頭にたたき込むのが俺達の基本だ。文句を言っている暇があつたら、とつと自分の分を読んでろ」

（本当は膝の上に落とそうとして、目測を誤ったくせに）

青年のあまりの物の言い様に少年は二の句も言えない状態だったが、すぐに気を取り直して自分へ渡された紙束に目を通し始める。

その様子を眺めながら青年はスーツのポケットから煙草を取り出し火を付けようとしたが、すぐ隣から喫煙を諫める声が上がる。

「電車の中ではなるべく煙草を吸わない方がいいですよ。この車両は禁煙車両じゃないですけど、吸わないに越したことはないです。せめて駅に着くまで我慢して下さい、朱鷺野さん」

朱鷺野と呼ばれた青年は苦々しげに煙草を箱に戻すと、ポケット

にしまい直し、隣にいる切れ長の目をした背の高い少年へ呆れ半分の文句を言いはじめる。

「千里、お前ホントに真面目だなあ」

「誉めてくれて、ありがとうございます」

皮肉の通じない千里に、諦めて肩をすくめる朱鷺野。そのやり取りを見て斜め前から小馬鹿にしたような笑い声が上がった。

朱鷺野が笑い声の主に視線を向けると、そこには気の強そうな顔付きの少年が足を組んでふんぞり返っていた。彼の隣、窓際の席には先ほどの小柄な茶髪頭の少年が鬱陶しそうにしている。隣がふんぞり返っているお陰で席が狭くなっているのが大層不満らしい。だが、そんな彼の心中を大して気にするでもなく、件の笑い声の主は口を開く。

「いやあ、電車の中でコントが見られるなんて思わなかったぜ。なあ、陸」

意地の悪い笑顔で窮屈そうにしている隣の茶髪頭へ同意を求める。「んなことよりも、ふんぞり返るのやめてくれっての。こっちの場所が取られて座りにくくてしょうがないんだよ、この馬鹿大信！」

文句を言う茶髪頭の陸に馬鹿と言われて気分を害したのか、大信と呼ばれた態度のでかい少年は大声で隣に噛みつきはじめた。

「うつせえ！ てめえはちっこいんだから、このぐらいのスペースでちょうど良いんだよ。ピーチクうるせえんだ、黙ってる。このマメ！ ひよこ！」

マメ、ひよここと貶されて見る見る陸の顔が真っ赤になる。そして何か言い返そうとした瞬間、周りを震撼させるような怒声が彼らの前方から発せられた。

「うるさい、ガキども。ギャーギャー騒ぐな！」

車両内が一瞬沈黙に包まれる。隣では真剣に資料とにらめっこしていた千里が驚いた表情で朱鷺野の方へ顔を向けている。

周囲の状況を見てさすがにばつが悪くなったのか、朱鷺野は軽く咳払いをすると何事もなかったように外の景色へ視線をそらした。

恥ずかしかったらしく彼の耳は真っ赤である。

朱鷺野は軽く溜息をつく、今一緒にいる三人の少年達を窓ガラスに映った姿で確認を始める。

まず目の前に座って必死の形相で資料を読んでいる少年について黙考する。

蜂蜜色の髪の毛に同じ色の瞳。肌の色も他の二人に比べると白く西洋人の雰囲気があるが、顔の作りは完璧に日本人だ。

（藤堂陸。何事にも前向きな姿勢は評価できるのだが、どうも勢いが先走って空回りしすぎるくらいがあるな。後は概ね問題なし。少々気の弱い性格は憂慮する点でもあるが、笑顔を絶やさない良い意味でのお子様だ）

次に陸の隣、通路側の席へ目をやると、やる気なさそうに大欠伸をしている奴がいた。

癖のある黒髪にきつい眼差しを持った外見は、見る人に好戦的な印象を与える。

（こいつは我が強すぎる。何時でも何処でも誰にでも自分を通そうとして引きやしねえ。それですぐ喧嘩になる。一応、愛嬌があつて相性のいい人間とはことん仲良くなるのだが、どうも相手を選ぶ有田大信、こいつの言動は要注意だな）

「おい、人前で鼻をほじるんじゃない。お前は幼稚園児か」

鼻の穴に人差し指を入れ始めた大信に、朱鷺野はポケットからティッシュを取りだし投げてよこす。

そして自分のすぐ隣に視線を移すと、そこには短めに刈られた焦茶色の髪が映った。その髪の持ち主は無表情で資料に目を通していい。

（五十嵐千里、真面目で無口で頑固、絵に描いたような堅物。まあ、この三人の中では一番性格が出来ているのは確だし、優等生にあり

がちな脆さが出なきゃそう心配はないだろう。しかし、こいつのバックがなあ……ある意味もつとも扱いにくい奴だ)

全員、十四歳のガキンちょ。子供以上大人未満の一番扱いづらい年頃である。

「何でも問題児ばつか集まったのかな」

自分の物思いが一通り終了すると朱鷺野は小声で一言こう呟いた。
「何か言いましたか？」

隣にいる千里が怪訝そうな顔で朱鷺野に訪ねる。

「いや、何でもない。それよりお前ら、大体資料に目を通し終わった頃だと思うが先ほど俺が説明した今回の依頼内容を、確認の為に繰り返してみろ。まずは陸、お前からだ」

「え、俺から？」

泡をくつた表情で陸が狼狽える。

「お前らが内容をどれだけ把握しているか、その確認のためだ。早くしろ」

慌てている陸を気にもとめず発言を促す朱鷺野。そんな状況をおかしそうに眺めている大信と無表情に見ている千里。この両者の姿は実に対照的である。

「は、はい。え」と、今回の依頼は今向かっている町で起きている連続殺人事件に関してで、ここ一月半の内に三人の女性が帰宅途中何物かによって襲われ殺されています。この事件の奇妙なところは被害者が身に着けていた衣服や鞆など身の回りの品と同じく被害者らのものと思われる大量の血痕しか残されておらず、体の一部分たりとも見つかつてはおりません。遺族としては殺されたとは思いたくないんだろうけど、まあおそらく無事ではないだろうね」

内容が内容だけに陰鬱な気分になったのだろうか、息を深く吐いて陸は一旦言葉を止めた。窓から入ってくる風が彼の茶色い前髪を軽く揺らしていた。そして陸は気を取り直し発言を再開する。

「遺留品は全て雑木林など普段人が立ち入らない場所で見つかって

います。服は刃物で切り裂かれたようにズタズタになっており、現金やクレジットカードなど金目のものには一切手をつけられてないところから、金品目当ての犯行とは考えられてません。それに人を殺した場合、大体において死体というものは身元がばれないように身に着けた品も含めて全て処分してしまうか、逆に死体をそのままほったらかしにするかのどちらかなのに、今回のケースはそのどちらにもあてはまってはいません。今現在も警察による捜査が行われていますが、未だ犯人に結ぶ手がかりは見つかっていません」

今の俺、ニュース番組のアナウンサーみたいで格好いい。などという感想を胸に抱きながら、陸は言葉を止め、朱鷺野の顔を伺う。

「まあ、いいだろう。次は大信、お前の番だ」

はいよ、と気のない返事をして大信が陸の後を受けて話をはじめた。緊張から解放されたのか陸はホッとした表情で大信の言葉に耳を傾ける。

「これまでの事件に共通しているのは、予想される犯行時刻が夜間であること。しかも天候が曇りか雨、つまり三人の女性が襲われた時間は月明かりすらない真っ暗だったってことになるな。あと、そいつらが利用している道つてのは街灯もなく殆ど車も通らない所が存在している。まあ、おそらく真っ暗な道を歩いている最中襲われ、違う場所へ連れて行かれて殺られたって事じゃないか。いやあ、全く用心深いねえ」

何者に向けたのか、感想を一言付け加え大信は自分の足下に置いたペットボトルのお茶を右手で取り上げるとキャップを抜き一気に飲み干しはじめた。

「ぶはゝ、どうも真面目な発言を続けると喉が渴いてしょうがねえや。おっと、まだ途中だったけな」

空っぽになったペットボトルを陸の膝の上に乗せて、話を続ける大信。ムツとした表情になった陸のことなどお構いなしだ。

「殺されたのは力の弱い女性ばかり。しかも犯行を行うに人気のない真っ暗闇の場所と時間帯を狙っている。ここから推測すると犯人

はかなり狡賢く慎重な奴だな。そして、人間じゃねえ」

だから俺達が呼ばれたんだと、陸が小声で付け加える。

「うっせなあ、んなこたあ分かってんだよ。えっと、ここに面白い証言が上がってる。事件が起こっている町に住む藤堂さん（仮名）のお話だ」

「ちよつと待て。なんで仮名に俺の名前を使うんだよ！」

自分の名前を無断借用されたことに抗議の声を上げる陸だが、正面に座っている朱鷺野の表情が険しさを増したことに気づき、そのまま押し黙ってしまう。

してやっつたりの表情を顔に浮かべ大信はそのまま話しを続ける。

「サービス残業で帰るのが遅くなった会社員の藤堂さん（仮名）が、夜の道を自動車で走っていると、何か大きな黒い影が前方の車道に現れたのを見た。危ないと思い慌ててブレーキペダルを踏んだんだが、その時藤堂さん（仮名）は見てしまったんだねえ。ヘッドライトに照らされた巨大な化物の姿を」

ここで一旦言葉を区切り、真剣に聞いている一同を見渡す。

「体長は大体二メートル。目は大きく金色に光り、口は大きく裂けそこから鋸のような歯が覗いていた。そして何やら大きな物体をくわえていたように見えたそう。まるで猫科の大型肉食動物を連想させるそれは、一瞬立ち止まったがもの凄い跳躍力ですぐにその場から離れ瞬く間に夜の闇の中へ消えていった。まあ内容が内容なんです話を聞いた人は疲れて寝ぼけてたんじゃいかと言っただれも信じようとはしなかったし、時間が経つにつれ藤堂さん（仮名）も自分の見間違いと納得するようになった。ただ、その化け物を見た日ってのが、三件目の事件が起きたのと同じ日だったのさ」

ここまで言い終えた大信はもういいだろうという表情で朱鷺野の顔を見た。

そんな大信の表情を読みとったか朱鷺野は続けてまとめの説明をするように隣の千里に目配せをする。その合図に軽く頷いて千里は口を開き説明を始めた。それは教科書を読む学生のような起伏のな

い喋り方で、もしかしたら多少緊張しているかもしれない。

「先ほど出た証言とは別に、犯人が人間ではない証拠としてこのような物が見つかっています」

そう言つて小さな透明のビニール袋を取り出す。中には動物のものと思われる体毛が入っており、長くて柔らかく白いものや暗灰色のもの等が入り交じっている。

「この毛は事件現場とされる被害者の遺留品などが発見された場所にありました。それとこれも見て下さい」

千里は数枚のポラロイド写真を見せる。そこには引き裂かれた服、地を染めている大量の血痕、そして土を剔った線が平行に何本も引かれた地面が写っていた。まるで爪で引っ掻いた痕にも見える。

「この写真は事件現場を写したものです。引き裂かれた服、爪で剔られたような地面、正体不明な動物の毛。これらの物的証拠を照らし合わせると、先ほどの証言もあながち目の錯覚ではない、真実を語ったものと断定できます。もう一つ付け加えると、捜査の為に警察犬を使用したところ、現場の臭いを嗅がせた途端、怯えた様子で一步も動こうとしなかったそうです」

正体不明の毛に関しては、近くを散歩中の犬から落ちたものではないかと言つのが警察の見解であり、興味すら示さなかった。当たり前の話だ。犯人が化物だという一般常識を越えた見解は普通の人間である警察には想像すらない馬鹿げたことで、明らかに管轄外の話である。動物園を抜け出した猛獣の犯行だと言つた方がまだ説得力があつた。

だが彼らは違つていた。彼らの常識では妖怪や化物の類は普通にいて当たり前の存在であり、化物が人を襲うという話にも何ら驚く必要はない。

「夜行性で用心深く、いざ行動を起こすときは迅速且つ大胆。大きな目と裂けた口を持つ大型の肉食動物のような外見。そして人知を越える運動能力、爪痕と体毛。他の動物が萎縮する臭い。これらの事から推測すると犯人の正体は……」

「化け猫、だな」

締め言葉の言葉を奪うように横から大信が口を挟む。その後を受けて千里が注釈を付ける。

「化け猫。日本に古くから伝わる妖怪の一種で、二十年以上生きた飼い猫がなると言われています。尻尾が二つに分かれている姿から猫股とも呼称され、怪談話として昔から講談や映画などの題材によく取り上げられました。江戸時代、佐賀藩の大名鍋島家で起きた化け猫騒ぎは『鍋島の猫騒動』として特に有名です」

そして、静かに書類から目を離し、一同を軽く見渡した。

「以上、調査員から報告された資料による依頼の概要です」

淡々とした口調で話を終わる千里の表情からは、先ほど大信に口を挟まれたことを不快に思っている節は見あたらない。逆に蘊蓄を披露できて満足している様子すらある。

「お前らが大体理解しているようで一安心だ」

と言いながら全く安心していている気配すら見せない朱鷺野の目は険しいものだった。

「今回の目的は人間を襲う化け猫の退治だ。実習中のお前らにとってはこれが初めての实战となる。今までの稽古で積み上げたものを出し切ればそれ程難しい事でもないが、実際のところ舞台上がってみないと正直わからん」

学生服姿の自分達を鋭い表情で見つめる朱鷺野の姿に自然と背筋を伸ばす三人。

「いいか、俺達は今から狩りをする。獲物は例の化け猫だ。そして、これだけは肝に命じておけ」

途中で話を止めて朱鷺野は三人の様子を見る。陸も千里も、先程まで不真面目な態度を取っていた大信も、皆一様に真剣な表情をしていた。

「獲物には決して情けをかけるな。躊躇なく息の根を止める。情けを掛けた瞬間、狩るものと狩られるものの立場が逆転しないとも言えないからな」

続けられた言葉に三人は一斉に頷く。そんな彼らの反応を確認して朱鷺野がようやく満足そうな顔をしたとき、停車駅が近づいたことを知らせるアナウンスが車両内に響く。

自分たち降りるの駅がすぐだと確認した一行は、一斉に立ち上がり網棚から各々の荷物を降ろしだした。スポーツバックと竹刀袋、それが彼らの荷物であり、第三者からは剣道部の学生とその顧問に見える。だが、もし先ほどの彼らの会話を一部始終聞いた者がいたとしたら、その格好すら怪しいものに写っていたであろう。

「あ、そうだ」

開くドアの方向に顔を向けたまま、後ろにいる三人に朱鷺野は声をかける。

「どうしたんだよ、実ちゃん」

その言葉に大信がお気楽な調子で尋ねる。

「駅に着いたらまずは一服させてくれ。さつきから吸いたくてたまらんのでな。それと実ちゃんではなく朱鷺野さんと呼ぶように。従兄弟同士でもその辺りは徹底しろ、いいな」

へいへい、と気のない返事で大信が答えると、三人の少年は自分たちに背を向けているこの青年について小声で話し始めるのだった。

「なあ。実ちゃん、また生えぎわが上がってきたんじゃないの。便所へ行きたんびに鏡の前でにらめっこしてるんだぜ。まだ二十三歳なのに可哀想だよなあ」

「にやはは、言えてる。必死で前髪下ろしてるんだもん。まあ、今のところは誤魔化しも通用してるみたいだけど、何時まで持つか。勿体ないよなあ、目鼻立ちも通っていて結構二枚目だし実力もあるのに。『色の白いのは七難隠す』って言うけど、おでこの広いのは良いとこ全部隠しちゃうね。だから彼女も出来ないんだ、ひやはは……やばっ！」

自分の発言について大声で笑いそうになり、陸は慌てて手で口を覆った。そんな、相手が気づかないのを良いことに散々扱き下ろして

る二人へ千里が横から口を挟む。

「おい、あんまり言うなよ。気づいたらどうするんだ。それに『朱鷺野さん』だろ」

しかし乗りに乗っている、すちゃらかコンビの会話は止まることを知らず、絶好調で話し続ける。

「まあ、実ちゃんが俺達の指導員って閑職に干されてるのも、口の悪さが原因だよな。それに慇懃無礼も板に付いてて、相手が誰であろうと態度を変えやあしねえ。だからお偉いさんに睨まれるんだ。ありゃ、死んでも治らねえな」

それはお前も同じだろう、と喉から出かかった様子の千里だったが、反対に大信から話しかけられて口を噤んでしまう。

「なあ、お前んとこの家じゃ実ちゃんの評判、どうなんだよ。やっぱり悪い？」

「さあ、知らないな。父さんはかなり気に入っているみたいだけど」聞かれて、何故か不機嫌そうに眉を寄せた千里はぶつきらばうに答える。

「へえ、そうなんだ。だったら前線に出してくれるように、千里のお父さんから働きかけて貰えればいいのに。朱鷺野さん、歳も若いし働き盛りなんだからバンバン任務こなせるんだろ」

「そう簡単に行かないのが大人の事情ってやつさ。ただ、実ちゃんの場合、自業自得だけど……」

陸の意見に注釈を述べた大信は、意地の悪い笑いを浮かべて朱鷺野の背中に視線を向ける。同じく他の二人もそれに倣った。

（何でこんな人が自分達の指導員についたのかな）

胸の中で三人が同じ台詞を呟く。

そんな思いを知ってか知らずか、電車が止まり扉が開くと同時に朱鷺野はホームへ飛び出す。続いて千里、大信が電車から降り、最後に陸がホームに出た。

陸の片手には先程大信に押しつけられた空のペットボトルが握られており、それを捨てるゴミ箱を探して辺りを見渡すと、五メートル

ルほど離れた場所に目的のものを発見することが出来た。

「よし！」

狙いを付けると、陸は手に持っていたペットボトルを放り投げる。放物線を描いてゴミ箱に入ると思われた容器はすんでのところで鉄製の縁に当たってしまい、勢いよく飛び跳ねるとホームの壁にぶつかり、そのまま軽い音を立て地面に落っこちた。

「下手くそ。俺だったら一発で入れてるぜ」

離れた所で見えていた大信の野次に腹を立てながらも慌ててペットボトルを拾いに行く陸。そこでふと壁に貼ってあったポスターに目が行く。内容は行方不明になっている女の子の情報を求めるものであった。要約するとこうだ。

『和田洋子。小学二年生。行方不明当時の年齢は七歳。学校から帰宅した後行方不明に。当日家に帰った形跡までは残っていたものの、その後の消息は分からず』

そこには女の子と行方不明当日に着ていたものと同じ服の写真が大きく載っている。

「行方不明になってちょうど一年ぐらいか。物騒な事件が続いてるよな、この町。まっ、一年前じゃ例の化け猫は関係ないな」

などと感想を漏らし振り返ると他の三人はとっくに姿を消していた。

「なんだよ、待ってくれてたっていいじゃないか。罰当たるモンじゃないし」

急いでペットボトルをゴミ箱へ捨てると階段を駆け下り、改札をくぐる。外に煙草をくわえた朱鷺野と遠くを見つめている千里、大信の姿を見つけ、走って正面口を出るとなだらかな山並と緑に囲まれた町の風景が目飛び込んできた。

五月の爽やかな風が陸の色白な顔を優しく撫でる。そして風に運ばれてきた新緑の香りと共にそれとは違う微かな、ほんの微かな臭

いが鼻を突いた。それはつい最近嗅いだことのある臭いだ。

「気づいたか、陸」

千里が静かに問いかけた。

「ああ、この臭い。資料にあったあの毛の臭いと一緒にだ」

「奴は間違いなくこの町にいる。いくらその身を隠そうと、風に運ばれてきた臭いで居場所は分かる。俺達がここに来たことは奴にとつては不幸だな」

風上の方角を見据えながら千里は言う。

同じく風上の方角を睨み付けながら大信が言葉を続けた。表情はいつになく真剣だ。

「こんな微かな臭い、俺達じゃなきゃ分からねえよ。何てったって俺達は……」

三人の鋭い視線が若草の息吹で萌える山に突き刺さる。髪をなびかせて佇む彼らの姿は食物連鎖の頂点に立つ肉食動物の風格があった。

山月村という名の村がある。地理上では愛知と長野の県境、山深いところに位置しているが、地図にそのような村は記載されていない。もちろんカーナビにも反応しない。表面上は存在するはずのない村であった。だからと言って昔物語に出てくる隠れ里みたいに村そのものが隠されているわけではなく、何の変哲もない田舎の集落であり、偶然通りがかったも気にも止められない小さな村である。そんな山月村についてある噂が囁かれていた。

この村の住人は化物退治を生業としているのだと。

「まあ、それだけじゃないんですけどね」

黒い革張りのソファに腰掛けた青年は目の前に座る銀縁眼鏡をかけた六十代ぐらいの男性に声をかける。

「それだけでないとは、他に何かあるのですか」

正面に座っている青年を値踏みするかのように眺めながら初老の

男性は質問をした。だが、落ち着いた雰囲気割に相手を威圧する迫力を持った青年の目つきが気になって、目をまともに合わせることはできないでいる。

「具体的には企業秘密なんですが、ぶっちゃけて言いますと依頼さえ受ければ何だってする、って事です。町長さん」

そう言って青年、朱鷺野実はずいぶん上に乗っかってある湯飲みに手を伸ばすと、ゆっくりお茶を飲み込んだ。口に含んだお茶が熱かったのか僅かに顔を歪ませる。

『何でもする』

その言葉の意味に漠然とした恐怖を感じた町長は、緊張のためか無意識の内に膝の上へ置いた手をズボンの布ごと強く握りしめていた。掌が汗で湿って熱くなる。

ここは事件の現場となっている町の町長室。駅からさほど離れていない町役場の最上階に位置している。そして朱鷺野と会話している初老の男性はこの町の町長であり、今回彼らに事件解決を頼んだ依頼主でもあった。

「それにしても、よく我々の存在を知っていましたね」

朱鷺野の疑問に町長は素直に答える。

「あ、ああ、それは警察に昔からの馴染みがいまして、そこからあなたの方の情報を教えて貰ったんですよ」

死体の見つからない連続殺人事件に、正体不明な化け物の噂。表面上は平静を装っている町の住人も内心、不安と恐怖を抱いている。もしかしたら今度は自分が新聞の三面記事を飾る番ではないのかと。だが、そんなことはお構いなしにマスコミは無責任な推測交えて今回の事件を面白可笑しく報道し、住人の恐怖心と部外者の好奇心を煽り立てている。

そんな状況に辟易していた町長は自分を心配して訪ねてきた友人について愚痴をこぼしてしまった。これでは町のイメージが悪くなる一方だと。それを聞いた友人は少し躊躇いつつもここに連絡を取っ

てみると教えてくれたのだ。

「なるほど、それでこちらに連絡した訳ですか。我々の存在を警察はすでに承知してますからね。警察との太いパイプもありますし」
それにしても、自分たちが動けば警察は用なしとなるのにその友人はよく教えたものだ、心の中で朱鷺野は感心する。

（この事件、警察もお手上げ寸前だったってことか。犯人を人間と前提して動いているのだから、それも無理はないな）

などと熟考している朱鷺野に不安そうな声で町長が話しかけてきた。

「あの、ところで本当に彼らにもこの事件を任せるのですか。些かその、年が若すぎるのではないかと。見たところ十代そこそこの年齢のようですが」

山月村から客人が訪ねてきたと知らされて、どんな人間が来たのかと期待半分不安半分で出迎えたのだが、現れたのは紺色のスーツに身を固めた二十歳代の青年と学生服姿のどう見ても中学生ぐらいにしか見えない三人の少年だった。

黒服に身を包んだ屈強な人物が来るかと思ってみれば、目の前にいるのは何処にでもいそうな若造ばかり四人。特に一番小柄な少年は、同年代の自分の孫よりも頼りなく見えてしまう。町長の不安は募るばかりである。

「虎の子を仔猫と間違えてはいけません。今現在、この町内で彼らより強い存在は自分を除けば誰もいないですよ」

そんな気配を察知した朱鷺野がフォローを入れたものの町長の顔に安堵の色は浮かばない。それも致し方ないだろうと横目で話題となつてゐる三人を見れば、

「な、な、さつきお茶を運んできてくれた人、すつげえ美人だったよな。もう一回こつちへ来てくれないかな」。お話ししたい」

などと脳天気な発言をしながら、お茶汲みの女性が消えていったドアへ落ち着きなく視線を向ける大信に

「……あ、そう」

隣に座っている千里は生返事で答える。どうやら壁に掛けてある歴代町長の写真や町の風景画に興味津々といった様子である。

陸に至っては真剣に町長の話を聞いているように見えるが、先ほどから視点を中空に定めたまま微動だにしていない。目は開けているもののどうやら頭の中は完全に眠っているみたいだ。時々、うつらうつら船を漕いでいる。

「お前ら、少しは緊張感を持て！」

大声ではないが鋭い叱責の声で真摯な態度にあらためる三人。

そんな彼らの様子を頭を痛め、ここは目の前にいるご老体を安心させるためにデモンストレーションをやるしかないかと考えて、朱鷲野は大信に声をかけた。

「どうやら町長さんはお前達の実力が分からなくて御不安の様子。

そこでお前が得意の大道芸を披露して少しはその不安を取り除いてやれ」

「大道芸たあ、ひでえな」

と言いつつも口の端を上げ、不敵な笑みを浮かべた大信は脇に置いてある自分の荷物から竹刀袋を手にとると、紐をほどき中身を出す。出てきた物を見て町長の顔が驚きの表情に変わる。中から出てきた物は黒光りする鞘に収まった打刀であった。刃渡りは六十か七十センチぐらいあるう代物だ。

「日本刀！ これは本物ですか」

「ええ、もちろん本物ですよ。自分達の得物です。これで化物を相手にするのですがモノがモノだけにいつもはこうやって竹刀袋に入れてカモフラージュしてます。あ、この事はどうか他言無用で」

お願いしますよ、と言いなから目には見えないプレッシャーをかけて相手を頷かせると、朱鷲野は萎縮している町長を立たせソファ一横の広まった場所へ移動させる。そして中身が空っぽになった湯飲みを手に取り、懷から煙草のケースを取り出すとその内の一本を町長にくわえさせ火をつけた。

「こちらは準備オツケーだ。そつちは？」

ソファーとテーブルを挟んで向かい側に立った大信は、いつでもどうぞと気楽に返事を返した。ちょうど部屋の両端でお互いが向かい合っている格好だ。三メートルぐらい離れているだろうか。他の二人は別段何をするわけでもなくソファーに座ったまま、この様子を眺めている。

何をする気かとビクビクしている町長の肩を叩き、「まずはご覧あれ」と朱鷺野は声をかけて、大信の方へ頷き合図を送った。むこうも承知したように頷き返す。

それを確認して手の中にある湯飲みを町長と大信の間の空間へ放り投げる。

直後、町長は何が起きたのか理解できなかった。湯飲みが投げられた瞬間、鯉口を切る音を聞いたが後は目の前に鋭い風が吹いたかと思うと、煙草の先に灯された火は消えていた。刀身を鞘に収める音で我に返ると、テーブルの上には真ん中から綺麗に両断された湯飲みが落ちている。

「一体、何が……」

「居合いだよ。超高速のね」

鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている町長に座っていた陸が自慢げに解説を始める。

「つまり、投げられた瞬間に刀を抜いて湯飲みが煙草の火と対角線上同じ高さに来たところで斬ったわけ。あと離れた場所にあるモノを斬るのは『伸腕』と呼ばれる技だよ。刀身を通して気を放つんだけど、大信の場合止まってるのを狙うのがせいぜいだ……け……へ、へつくしょん！」

突然、会話の途中で小さくしゃみを一発。つられて隣に座っていた千里も小さくしゃみを連発する。見れば大信も鼻をグズつかせて、しきりに手でこすっていた。

「さて、これで少しは安心して貰えたでしょうか。なんなら他にも

まだお見せすることが出来ますが」

未だ呆然としている町長は朱鷺野に声をかけられて我に返り、慌てて首を横に振った。

「いえいえ、十分です。あなた方の腕前は確かに拝見させて頂きました」

一旦言葉を区切ると額に滲んだ汗をハンカチで拭いて、朱鷺野と三人の少年達に体を向き直し深々と頭を下げる。

「では今回の事件のこと、よろしくお願いいたします」

突然のお辞儀に恐縮しつつ四人も一斉に頭を下げた。

一通り話が終わり一行が町長室から退出した後、部屋の主は安堵のあまり腰を抜かしてソファへへたり込んだ。そして過日の友人との会話を思い出す。

『実際に見たわけではないので眉唾ものだが、この村の住人についても一つ噂がある』

その後続く言葉を聞いたとき、何だそりやと叫んでつい吹き出してしまったが、今となっては信じる以外なかった。

『どうやら、その住人は人間ではないらしい』

確かにあの居合いは人間技ではなかった。少なくともあんな芸当が出来る人間を自分は知らない。しかもろくに年端もいかない少年が、だ。

信じるしかないだろう。目の前にたたずむ真つ二つに割れた湯飲みを見つめながら、彼は人が踏み入れてはならない領域へ一歩足を伸ばしてしまったのではないか、という思いに囚われていた。

町役場の一階にあるロビー。そこに設置されている掲示板の前で、一人の老婆が目の中のポスターを真剣な眼差しで見つめていた。

その様子を遠巻きに眺めている話好きのおばちゃん達が、老婆へ聞こえないように小声で話しこんでいる。

「和田のお婆ちゃんも可哀想に。可愛がっていたお孫さんだったの

にねえ」

「あれから丸一年。手がかりすら見つかっていないそうよ」

「今回の事件といい、警察も何やってんだか。うちの少ない収入から取った税金で食っているのに全く役に立ちやしない。ああ、今月も大変だわ」

だんだん話題が横道に逸れていき、お互い亭主の悪口に花を咲かせている一同。その間も老婆は微動だにせず、ポスターを凝視し続けていた。そこへ眼鏡をかけた少女が老婆に近づいて声をかける。

「ごめん、待たせちゃって」

外見から判断すると歳は十代半ば頃、高校生か中学生と言ったところか。肩辺りまで伸ばした後ろ髪はゴム紐で束ねられ、整った顔立ちと合わせて清潔な印象を見る者に与えてくれる。

そして老婆の隣に並んで立ち、同じく掲示板に貼ってあるポスターを微量の悲壮感がこもった表情で眺めた。二人が見ているポスターは駅のホームで陸が見かけたのと同じ物である。

「ちか子、お父さんから頼まれた用件は済んだのかい」

澄んだ声を発した老婆の顔は薄化粧を施し、身なりも上品でキチツとしてるところから、裕福な家の出身であることが窺われる。

「うん。だけど風邪をひいて学校を休んだ娘に使いを頼むなんて非道い父親だよな」

苦笑しながらもそれ程気にした様子もなく、ちか子は答えた。

昨日、学校から帰宅後に風邪をひいて熱を出したのだが、今日の朝には平熱に戻っていた。一応大事をとって学校を休んだものの、やることもなく暇を持て余していた。そこへ仕事場にいる父親から電話でお使いを頼まれ、祖母と共に散歩がてら町役場へやってきたのだ。

「洋子ちゃんが行方不明になってもう一年か」

暗い声で呟く。ポスターに載っている写真の少女はちか子の従姉妹、老婆の孫にあたる。洋子の両親は共働きで、学校から帰ってくる時間には家にいないことが多い。その為、放課後は近所にある

ちか子の家に寄ってから外へ遊びに行くのを洋子は日課としていた。行方不明になったあの日まで。

「あの日、私がずっと家にいたらこんな事にはならなかったかもしれないのに」

ちか子は今でも悔やんでいた。

あの日、学校から帰って来ると家には洋子一人だけだった。

「あれ、洋子ちゃん。お母さんとお祖母ちゃんは？」

「おばさんは買い物に行ったよ。お祖母ちゃんもちよつと出かけてくるって」

さてはお祖母ちゃん、今頃喫茶店でお仲間と話に花を咲かせてる頃だな。と思いつつ、自分も友達との約束があるのですぐに出かけなければいけない。

「ごめん、私もすぐに出かけなきゃいけないんだけど、お留守番頼めるかな」

「ウン、いいよ。いつてらっしゃい」

居間で黒い毛皮の猫と遊びながら、正確には猫で遊びながら洋子は元気の良い返事を返す。

洋子に耳をつつかれて鬱陶しそうな顔をしている猫は名前をサスケといい、半年前に傷だらけで倒れているところを洋子が拾って家に連れてきたのだ。幸い命に別状はなく、今ではすっかり体力も回復し元気な姿を見せている。ただ、一旦外に出ると数日は帰ってこない放浪癖の強い猫でもあるが。

「この絵の猫も可愛いねえ」

サスケで遊ぶのに飽きたのか、洋子は床の間に移動しそこに飾つてある古びた掛け軸を興味深そうに眺めていた。掛け軸は上部に和歌が書かれ、その下に描かれた一匹の猫が静かに佇む構図となっている。

「私達のご先祖様が描いたんだって」

そう説明すると洋子は感心してしきりにうんうん頷く。そんな洋

子の仕草を微笑ましく見つめていたが、ふと壁の時計に目をやると約束の時間まであと少ししかない。

「じゃ、行って来るね。もう少ししたらお母さんが帰ってくると思うから」

慌てて玄関から飛び出すちか子の耳に、はぐいと答える洋子の声が聞こえた。

それが最後に聞いた洋子の声だった。

思い出す度に胸が痛くなる。

（もし、あの時、私が家に残っていたらこんな事にはならなかったのに）

しかし、それはあくまで仮定の話に過ぎず、洋子が行方不明になった事実を変えることはできない。それでもちか子は、洋子を残して出かけた自分をいつも責めていた。

結局、警察による必死の捜査活動にも関わらず何の手がかりも見つかってこない。責任を感じてちか子も街頭で情報を求めるビラ配りに参加したが、その甲斐もなく一年が過ぎてしまった。

「もう、帰ろうか」

未だ食い入るようにポスターを見つめている祖母をちか子は促すと、二人はその場を後にした。自動ドアをくぐり外に出ると、町役場に入る前は晴天だった空が薄い雲に覆われていた。天気予報では午後から曇り、夜になって雨が降るという予想らしい。

「私の心の雲はいつになったら晴れるんだろう」

もしかしたら永遠に晴れないかもしれない。そんな思いが頭の中をよぎり悲しい気持ちで溢れてしまう。今、間違いなく彼女は彼女の中で一番不幸な悲劇のヒロインだった。

*

*

エレベーターが一階で止まりドアが開く。と同時に

「ぶへっつくしょん！」

大きなくしゃみが辺りにこだまする。

「あゝ、くそつ。あのジジイ、コロンの匂いがきつすぎるだつつの。匂いも変だし。お陰でくしゃみが止まねえや。畜生！」

くしゃみの主である大信が、町長の趣味の悪さに大声で文句をつけていた。

「俺、匂いがきつすぎて気分が悪いや」

ふらふらの足取りで歩いている陸に千里が心配そうな表情で背中を押してやる。そんな千里もくしゃみの連発で鼻が真っ赤になり辛そうにしていた。

不甲斐ない様子の三人に朱鷺野から檄が飛ぶ。

「街は様々な臭いに溢れている。それに慣れるため、嗅覚を自分で調節するのも訓練の内だ。化け猫を相手にするまでには治しておけよ」

「その割には朱鷺野さんも鼻がぐずついてない？」

一般の人間とは比較にならない嗅覚を持つ彼らにとって、臭いは時として非常に厄介な代物となる。あまりにも強烈な臭いは鼻の粘膜を刺激して、滝のような鼻水と絶え間なくくしゃみを止められなくしてくれるのだ。

「うるさい。それより狩りまでまだ時間がある。その間を利用して関連の場所を下見に行くぞ」

陸の突っ込みに朱鷺野はバツが悪かったのか話の内容を変えようとする。そこで千里が発言を求めて手を挙げた。

「あの、お腹がすいたのでどこかで食べていきませんか？」

言われて時間を確認すると時刻は一時を回っていた。思い返せばまだ昼食を済ませていないし、朱鷺野自身も腹がへっていた。

「そうだな、お前ら何が食べたい？」

「ハンバーガー！」

「ラーメン」

「お姉ちゃん」

最後に発言した馬鹿野郎の腹へボディーブローを一発かますと、駅前中華料理屋があったことを思い出し、朱鷺野は外に向かって歩いていく。

他の二人も慌てて朱鷺野を追いかけ、後には真っ青な顔で腹を抱えてうずくまっている大信だけが残されていた。

「くっそ、ちょっとしたジョークなのにマジで殴りやがって」

まだ痛む腹をさすりながら大信は町役場から出ると、自分を置いていった薄情者達の後を追いかける。自然と遙か前を歩く女性二人連れの姿が目に入った。どうやら二人の年齢から推測すると孫とその祖母であろう。

「どうしたんだ、大信」

心配になって迎えに来た千里が声をかけると、にやけた顔を背の高い友人に向け、二人連れの若い方を指差して言った。

「あの女の子、すっげえ可愛いと見たぜ」

「後ろ姿しか見えないのに、良く顔のことまで分かるモンだ」

「俺のカンがそう告げてんだよ。ありゃ、ぜってえ可愛いって。何なら賭けてもいいぜ。そうだな可愛くなかったら、禪一丁で町の中走ってやらあ」

「いや、そんな賭は遠慮しておく。第一、男の裸なんて見たくもないし」

珍妙な提案にあきれながら、後の二人が待っていると大信を急がせる千里。どんどん距離が離れていく女の子に未練があるものの、先ほどから鳴いている腹の虫からの要求には勝てず大信は千里と共にその場を立ち去った。

駅の近くに位置する中華料理屋。それ程大きくはない店内に元気づける声が響き渡る。

「チャーシュー麺、おかわり！」

「おれは唐揚げをもう二皿、あと天津飯ってやつ」

「……炒飯大盛りで」

カウンター席に列んで座っている三人は、先ほどからいい具合に注文をしては片っ端から来た料理を平らげている。脇に堆く積み重ねた皿の枚数は彼らの食欲が尋常ではないことを物語っていた。

その隣では朱鷺野が眼前で繰り広げられる凄惨な光景を硬直したまま眺めていた。時折財布を取り出して手持ちの金額を確かめているが、財布を覗く度に顔色が青くなっていく様は悲哀を通り越してどこか笑えてしまう。

「おまえらあ、遠慮という言葉を知らんのか」

「注文した以上、出された料理は全部食べないといけませんから」
悲痛な朱鷺野の訴えに至極真面目な表情で千里が答える。この二人のどこか噛み合わないやり取りは大信が評したみたいに、どこかコントっぽい。

（確かに自分たちは人よりよく食べることは知っているし、そこにいる三人が育ち盛りで食べ盛りなのも分かっている。だが、この半端じゃない食欲はなんだ）

これ以上の悪夢は見たくないと言わんばかりに朱鷺野は棚の上に設置してあるテレビの画面に目を向けると、ちょうどワイドショーがこの町の連続殺人事件について取りざたしていた。

「早く犯人が捕まってくれないかねえ。物騒でかなわんよ。第一、和田さんとこの洋子ちゃんだってまだ見つかってないのに」

吐き捨てるような店主の言葉に陸が反応する。

「それって一年前の誘拐事件のこと？ 確か駅にポスターが貼ってあったけど」

「ああ、そうさ。和田さんとは先祖が庄屋で代々金持ちの家なんで、最初は身代金目的の誘拐かと思われたんだが、解決していないところを見るとどうやら違うらしいな。まあ、俺が思うに今回の殺人事件の犯人が……」

自分の話を聞いてくれる人間がいてよっぽど嬉しかったのか、絶好調で事件の推理を始める店主。しかし、聞き手側である陸は話半

分で流している。

（どうせ殺人事件の犯人は俺達が退治するんだし。知らないってのは幸せだね）

店主を小馬鹿にするような文句を胸中で呟き、陸は次の料理を注文する。大信、千里もそれに続くが、さすがにこれ以上は我慢ならないと朱鷺野が怒鳴り声をあげた。

「いい加減にしろ！ 腹八分目という言葉を知らんのか！」

「『『『知りません』』』」

三人はまだまだ食い足りないらしい。

皋月中旬 金曜日 夜 『ソルジャーボーイズ』

美しい女性がこちらを覗き込んでいる。

「あら、まるでお公家様みたいな顔立ちをしているのね。もしかしたらあなた、光の君の生まれ変わりかしら」

こぼれるような優しい笑顔が濁った自分の心を澄んだものに変えてくれる。

（ああ、この人は我の大切な人。我を陥れた憎き人。そしてもう二度とは会えない愛おしい人）

目を開けるとそこにはいつもと同じ闇が広がっていた。夢を見ていたのか。自らの現実を確かめるように天を見上げると、破れたトタン屋根から今宵の空が見て取れた。

曇り空。おそらく暫くすれば雨も降るだろう。隙間から吹いてくる湿った風がその事を伝えてくれる。

（狩りを行うにはちょうど良い頃合いだ、さてどうしようか）

ふと外に人の気配を感じてすぐに自らの気配を消す。

（どうやら餌が向こうからやってきてくれたみたいだ。複数いるが問題ない。今の自分なら人の二、三人すぐに仕留められる。辺りを包む闇も我の味方だ）

だが、その時はまだ気づいていなかった。己の立場が狩るものから狩られるものに入れ替わっていたことを。

不意にこちらへ向かって何かが迫ってくると感じた瞬間、壁を突き破る大きな破壊音が耳をつんざく。

一体何が起きたのだ？

時間は前後する。

「へっへっ、臭いがプンプンしやがるぜ。奴はこの先にいる間違いない」

山の中腹へと続くなだらかな坂道を三つの人影が通っていく。辺

りは夜の闇に包まれ木々の隙間からは町の明かりが見え隠れしており、それはまるで雲間から顔を覗かせる星空を彷彿させた。道の先には建物らしい影が見える。

「あれは確か製材所だったところだ。二年ぐらい前に不況の煽りを喰らって倒産。作業場だった建物は放置されたままらしい。場所が場所だけに人も滅多に訪れないし、身を隠すにはもってこいの場所だな」

三つの影、大信、千里、陸は臭いをたどってここまでやって来た。駅を降りたときに感じた微かな臭い。その臭いを運んできた風は今いる方角から吹いてきたのだ。

「実ちゃんの下でジジイと一緒に待機か。楽でいいね」

獲物を仕留めた後、それを確認する為に町長はやってきたのだが、不測の事態に備え朱鷺野が側に着いている。もちろん、狩りに支障をきたすので風呂に入ってコロンは落として貰ってきた。今頃は自動車の中で自分たちの報告を待っているだろう。

「どうしたんだ、陸？」

先ほどから一言も発していない陸の様子を心配して千里が声をかけるが、代わりに大信が口を開いた。

「大方、びびってんだろ。へっ、情けねえなあ、それでも男かよ。持ってる刀は飾りモンかあ、銘入りの名刀『若紫』の名が泣くぜ。根性入れる！」

「う、うるせえ。びびってなんかいないさ。ただ緊張しているだけだ」

うわずっている声で言われても説得力ないなと思いつつ、緊張をほぐすように千里は歳の割に小さな陸の肩へ手を置いて、優しく声をかける。

「初めての实战で緊張するのはしょうがないさ。俺だってそうだからと言ってミスすることは許されない。大丈夫、稽古通りやれば問題ない」

化け物狩りを生業にしているとは言え、すぐ前線に出て戦うこと

が出来るわけではない。幼い頃から訓練に訓練を重ね、一定の成果が出たところで実習と称し簡単な依頼を受けて実戦を経験させる。自動車免許に例えるなら彼らは仮免を貰ったばかりで、これから初めて路上教習を受けるといったところだ。

「ありがとう。何とか頑張ってみるよ」

「ああん、何とかじゃダメなんだって」の。てめえみたいなちっこいのは人の倍の倍の倍の倍の……それくらい頑張らないといけねえんだよ」

大信の辛らつな言葉に、陸は途端に機嫌を悪くする。

（何でこいつはいつもこうなんだよ）

グツと堪え口には出さず胸の中で吐き捨てた。

「さて、奴の寝床はすぐそこだがこれからどうする？」

二人の気まずいやり取りを見て見ない振りをし、千里が訊ねる。

目の前には空き地が広がっており、奥には所々穴の空いた製材所の建物が窺えた。壊れたフォークリフトが放置され、物悲しくも異様な雰囲気漂う。辺りに聞こえるのは風に揺れる木と草の音のみである。

「もちろん、あちらから出てきてもらうぜ」

大信が付近に落ちていた子供の頭大ぐらいある岩を手で掴んだ。獲物の居所は臭いの流れから概ね見当はついていて、腕を大きく振りかぶると建物の中程を狙い岩を思いっきり投げつけた。

到底、人間業とは思えない腕力により発射された岩は、大砲から打ち出された弾を彷彿させる勢いで空を切り、建物へ着弾した。壁をぶち破る轟音が辺りに響く。

漆黒の夜空に轟く激しい破壊音は化け猫狩りの始まりを告げる合図でもあった。

最初、何が起きたのか分からなかったが、自分の身に危険が近づいている事は理解できた。数人の足音がこちらに向かってくる。

（人間風情がいい度胸だ。ならばこちらも迎え撃って、悪戯半分に

ちよつかいをかけた事をあの世で後悔させてやろうではないか）
先ほどの衝撃から回避した身を起こすと、見事な跳躍力で表に出る。

（しかし、人間はあれ程足の速い生き物であつたか。聞こえた足音から判断するとかかなりの速さだ）

頭に浮かんだ疑問を打ち消し、相手と向かい合う。外には、こちらへ向かつてくる年若い人間が三人ほど見て取れた。

「出て来たな。大信、陸、正面は任せた。俺は獲物の背後を取る！」

「おうよ」

「了解」

千里の号令で後の二人もすぐに動く。暗闇の中でも彼らの動きは全く支障がない。

『五感で全てを感じる』

それは稽古の度に何度も言い聞かされた。

「空気の流れを肌で感じ、風切る音を耳で聴き、微かな臭いを鼻で嗅いで、遠くの影を目で捉える。さすればどんな状況下であろうと動きを制限されることはない！」

教えられた言葉を口に出しながら三人が前進すると、予想通り建物の中から弾き出された大きな影が姿を表した。

あれが今回の獲物に間違いない。

先頭を切って走る大信は、柄に手をかけ鞘から刀身を抜き出すと片手で構える。

「一番刀もらいつ！ あらよつと」

左からの薙払いで相手の首を狙う。白刃が弧を描いて大木のような太い首に迫るが、素早いフットワークで上手くかわされる。

向き合うことで大信は、初めて獲物の姿を見ることが出来た。

爛々と輝く大きな目、鋭い牙を持った口からは猫独特の威嚇音を放っている。巨大な体は白地に灰色の斑。爪は鋭く、引っ搔かれたら大怪我するのは間違いない。

まさしく化け猫。

「ハロ、猫ちゃん。恨みはないんだけど依頼なんで観念してくださいね」

「貴様、我を愚弄する気力！」

化け猫が素早く右前足の爪で切りかかるが、大信は刀を振りそれを弾いた。金属を打ち合わせた鋭い音が辺りに響き、打ち合った瞬間火花が飛び散る。

「何だ、こいつ人間の言葉話しやがる」

「我を何だと思っておル。貴様らより遙かに長い時を生きテおるのだゾ」

化け猫は正面に向かい低い軌道で跳躍すると、前足を振りかぶり大信の頭目がけて鋭い爪を振り下ろす。

咄嗟に大信は後ろへ下がるが完全には避けきれず、こめかみ付近から赤い血が飛び散った。しかし傷を負った本人に怯む様子は感じられない。それどころかうっすらと唇に笑みを浮かべている。

その太々しさは化け猫のカンに触った様に口を歪めたが、続く光景を見て太々しい笑いの意味を知ることとなった。

「ちっ、痛えな。ま、こんなの俺にとっちゃ屁でもねえけどよ」

さっきまで流れていた血が止まり、パツクリと開いていた傷がまるでチャックで閉めるかのごとく塞がっていく。そして血の跡はまだ残っているものの傷は完全に治っていた。時間にすれば十秒もかかっていないだろう。

信じられない光景を目の当たりにして、化け猫の動きが一瞬鈍った。

「おらあ！」

その僅かな隙を見逃さず、陸が左から走り込んで突きを放つ。

不意の攻撃に化け猫はバックステップでかわそうとするが、予想以上に陸の突きは鋭かった。

切っ先が右前足の付け根を剔り激痛が走る。白い毛が飛ばされ宙に舞う。

おかしい。一体こいつらは何なのか、警戒しながらも化け猫は、冷静に相手を分析してみる。

（奴らは間違いなく普通の人間ではない。おそらく人間であることすら疑わしいだろう。この夜の闇の中、まるで昼間のごとく動いているではないか。それに手に持っている刀。日本刀はかなりの重量があるはずなのに、片手で軽々振り回している。しかもその斬撃たるはかなりのものだ。足の速さも我と匹敵するだろう）

出した結論は、簡単だった。

奴らは人間ではない。

「はっ！」

背後から気配を感じ慌てて化け猫は横に飛び退く。

しかし間に合わず今度は左太股を斬られて衝撃が走る。すぐさま振り返ると後ろに回った背の高いもう一人の少年、千里が刀を中段に構えてこちらへ向き直っていた。

「意外と素早い。だが」

素早く上着のポケットに手を入れると、千里は長方形の紙を一枚取りだした。紙の表面には墨で文字と模様が描かれている。

「陰陽用いて雷を成さん。発！」

呪文らしき言葉と共に紙を空に投げると、それは空中で青白く輝き稲妻となつて標的の体を貫いた。雷に撃たれた化け猫の体がビクンと痙攣し、毛皮の所々から焼けこげた煙と独特な臭いを発している。しかし傷は負わせたもののあまり効いた様子はなく、化け猫は顔を顰めながらも憎々しげな表情で千里を睨み付けている。演出が派手な割に、あまり効果はなかったみたいだ。

「俺の『轟雷符』もまだまだか」

「何やってんだよ、千里。一発で仕留めろ。つたく、早く狩りを終わらせてこんな猫臭いところ、とつととおさらばしようぜ」

その言葉に化け猫は目を見張る。

（臭いだと？　もしかして奴らは臭いをたどって私の居場所探し当てたのか。それにさっきの奇妙な術。何なんだ、こいつらは）

「貴様ら、何物ダ！」

化け猫の至極当然な問いかけに大信が嬉しそうに反応する。

「教えて欲しいや当ててみな。まあ、可哀想だからヒントをあげてやらあ。十二支の三番目、英語でタイガーでーす」

（答えそのままヒントになってないし）

聞いた千里が心の中でつつこみを入れる。それにしても、と千里は思う。

この有田大信という少年は化け猫退治を完全に楽しんでいる。少し間違えばその身が危ないというのに、何の怯む様子もなく自ら率先して相手に向かっていく。おそらく自分がやられるとは毛頭も考えていないのだろう。

大信と化け猫のやり取りは続いていく。

「十二支の三番目……寅、虎だと言っの力！」

「ピンポンピンポン大当たり〜！　賞品は地獄旅行、片道御一人様もとい御一匹様かな」

軽口を叩きながら大信が風を従え、砂塵を巻き上げ、暴風の如き勢いで突っ込んでいく。しかしスピードは速いが一直線の軌道。動きは読まれやすい。

突っ込んできたところを爪で叩き倒そうと、タイミングを合わせて化け猫は前足を繰り出した。狙いを定めて立てた爪が鋭く光る。

だが、その瞬間大信の姿が二つに分かれた。

「なんだと！」

またもや信じられない光景を目の当たりにして、化け猫は我が目を疑ったに違いない。

振り降ろした前足は空しく宙を斬り、替わって左右両側から衝撃がくる。右側の大信が化け猫の脇腹に、左側の大信が首元へ剔り込むように拳を叩きつけた。

岩のような化け猫の巨体が、大きく吹き飛ばされ地面に叩きつけられると、骨の折れる音が聞こえた。どうやらあばらが折れたらしい。

「正確に言えば俺達は虎人なんだけど」

してやつたりの表情で、大信が答えた。

虎人、人の姿をした虎。そのルーツは海を越えて遙か中国大陆に求める。今から八百年以上も昔、大陸から日本へ渡ってきた。

その時代、大陸では漢民族の宋王朝が女真族の英雄完顔阿骨打のうち立てた金王朝によって滅亡し、生き残った宋の王族が南へ逃れて宋王朝を再建した。いわゆる南宋である。悲運の名将岳飛が活躍したのもこの頃である。

宋・金の激突により天下は大いに乱れ、人々は否応なく戦火の渦に巻き込まれていった。だが、戦の炎に巻き込まれたのは人間だけではなかった。

彼ら虎人の先祖はちょうど金、南宋の国境付近に集落を構えていたので、戦乱の煽りをもろに被ってしまった。やむを得ず国家間の争いによる混乱から逃れるため一族郎党を率い故郷を捨てて、未知なる国、黄金の島と噂されていた日本に楽土を求めやって来たのだ。その頃の日本は源頼朝が鎌倉に幕府を開いた時期である。そして日本へ渡った虎人達が最初に居を構えた場所が、現在彼らの住んでいる山月村にあたる。

その後、日本へ渡ってきてから手に入れた太刀と剣術に、自分達が大陸から持ってきた気功と符術を取り入れた独自の戦闘法を編みだし、それを用いて時の権力者から小さな村の一農民に至るまで様々な相手から多種多様の依頼を受けてきたのだ。

生きる糧として。

砂まみれになりながらも化け猫は痛みを堪えすぐに立ち上がるが、今度は脇腹を斬られ思わず苦悶の声を上げる。見れば先程妙な術を

使った少年が再び刀を構え、休む間もなく次の斬撃を繰り出してきた。千里である。

「クツ、調子にノルな」

ギリギリで巨体を翻し、迫る白刃を何とかかわす。

対する千里は二発目をかわされたものの、相変わらざる無表情な顔に翳りはなかった。

（相手は深手を負い満足に動けないだろう。だが油断してはならない。追いつめられたものは時として意外な力を出す。窮鼠猫を噛む、いやこの場合窮猫虎を噛むか）

千里は心の中でそう自分に言い聞かせると再び刀を構え直した。

「やったね」。俺の『分け身』上手いこといったじゃねえか。しかし、どうもイカンなあ。剣よりも拳が先にでちまう」

大信が使った『分け身』は、気によつて実体を持ったもう一人の自分を作り出すという完全な分離攻撃であり、かなり難度の高い技である。しかも、突進した時に剣を使わず、己の拳で化け猫の巨体を吹き飛ばしたのだ。

「大した馬鹿力だな」

感心半分、呆れ半分で千里が感想を洩らす。

高レベルの剣技を実戦で決めて満足したのか、ご機嫌そうに鼻歌を歌ながら大信は化け猫を逃さないように間を取る。陸も移動して完全に獲物を囲んだ状態へ追いつめた。

「さて、猫ちゃん。覚悟はできたかな？」

「猫、猫言っナ。我にハ又佐という名ガある。憶えテおけ、ガキ共」だが、いくら氣勢を張ったところで絶体絶命の状況に変わりはない。

どこかに突破口はないか。又佐はジツと辺りを見回すとある一つの事に気が付いた。

三人の中で一番背の低い少年の様子がやけにおぼつかない。よく観察すると足が小刻みに震えており、顔には緊張の色が窺える。そして、その少年の立ち位置は山裾へと続く道の方だ。思い返せば

他の二人に比べて、その少年は手数も少なかった。

（どうやら我が天命は完全に尽きていないらしい。どうせここでくたばるくらいならば、一か八かに賭けてみるか）

化け猫又は生涯最大の博打を打って出ることにした。賭の相手は背の低い少年、藤堂陸である。

戦場に身を置きながら、陸の心は戦闘の高揚と全く正反対のところに位置していた。

（何時になったら狩りは終わるんだ。頼むから早く終わってくれ）
心の中を占めているのは恐怖のみ。

情けないことに戦闘が始まった当初、陸は化け猫の凶暴な姿を間近に見て腰を抜かしそうになってしまった。今も足が震えて止まらない。

（しつかりしろ、藤堂陸。あれほど頑張ったんじゃないか。ここで覚悟を決めなくてどうする）

気絶するまで稽古を重ね、手の皮がすり切れるまで木刀を振った。そうした努力を思い出し自らの心を奮い立たせる。ふと、頬に冷たいものを感じた。

ひとつ、ふたつ、上空から雨粒が落ちてくる。やがて数を増やし全てを濡らしはじめた。三人の髪も学生服も、化け猫の体も髭も。雨音だけが静かに音楽を奏でる中、意を決したように化け猫、又佐が動く。

その先には陸がいた。

「来る！」

覚悟して陸は刀を構える。だが、体が動かない。

轟くような咆哮を上げ、目の前全てのものを打ち倒す形相で突進してくる又佐の気迫に飲まれてしまったのだ。

（あれ、動かない。動けよ、俺の体）

動揺する陸を後目に、又佐は勢いをつけて疾走し彼の脇を通り過

ぎる。そして、そのままスピードを落とさず、瞬く間に坂道を駆け下りていった。

まさかの出来事に残る二人は呆気にとられるしかなかった。数秒経って怒声が鳴り響く。

「馬鹿野郎！ 何やってんだよ、この臆病モン！」

「やばいぞ、大信。奴の向かった方向には町がある。それに雨も降ってきたし臭いが流される。このまま逃すと厄介なことになるぞ」

「おい、追跡用の『飛燕符』は？」

「今、持っている符は戦闘用のしかない。必要ないと思って持ってた。甘かったな……」

さすがにいつもは無表情な千里の顔にも焦りの表情が浮かぶ。

山中へと続く道の入り口付近で朱鷺野は三人の帰りを待っていた。脇には町長が車に乗って待機している。おそらく彼も化け物退治の報告を今か今かと待ちわびているだろう。

「とうとう降ってきたか。傘を持ってくれば良かった。それにしてもあいつら、やけに時間食ってるな。初めての実戦だから仕方ないか」

携帯電話で時刻を確認すると八時半を過ぎていた。おそらく、もうそろそろ降りてくる時間だ。視線を携帯から離すと水たまりを弾く音と共に何かが下りてくるのが目に入った。

やっと終わったかと、朱鷺野は声をかけようとしたがどうも気配が一つしか感じられない。それに大きさも違う、やけに大きいのだ。
(まさかあれは……)

確認する間もなく、それは公道を走る自動車と変わらないスピードで駆け抜け、朱鷺野の目の前を通り過ぎていき、闇の中へ姿を消していった。少しして、同じぐらいの速さで大信と千里が駆け下りてくる。

「どうした、一体何が起きた！」

「それは後からやってくる、臆病モンの馬鹿野郎に聞いてくれ！」

そう言い残すと、大信は千里と共に闇の中へ飛び込んでいった。その方角は先ほど目の前を通り過ぎた正体不明の物体が消えたといった方向である。

朱鷺野には目の前を通り過ぎた物体が何であるか、おおよそ見当が付いた。そして現場で何が起こったのかも。おそらく最悪の事態が起きたのだろう。

降りしきる雨の中、小さな人影がこちらへやってくる。その足取りは重く、肩を落とし、見ているこっちが気の毒な程悲壮感漂う顔をしていた。今にも泣き出しそうだ。

「陸、お前……」

「すみません、すみません、すみません……」

ただひたすら謝る陸を自分のところへ招き、慰めるように肩を抱く。

（叱るのは後でいい。問題は驚いた顔で車から飛び出してきたあの老人に事の顛末をどうやって説明するか、だ）

朱鷺野は恨めしそうに天を仰ぐ。

「泣きたいのはこっちだ」

まだ冷たい五月の雨が、辺り一帯を静かに包み込んでいた。

結局、化け猫又佐の姿は見失ってしまった。与えた怪我の具合からそう遠くには行けないので町のどこかにいるのは確かなのだが、決め手となる臭いは降りしきる雨で流れてしまい、これ以上の追跡を困難なものに変えてしまった。

「で、町長には何と言っておきました？」

濡れた体もそのままに一同は今後の話し合いに入る。今居る場所は駅からすぐ近くにあるビジネスホテルの一室。この部屋は朱鷺野と千里の部屋で隣が陸と大信の部屋になる。

「逃したものの、深手を負っているのですぐに捕まると納得させておいた」

朱鷺野のことだ、おそらく問答無用で納得させたのだろう。千里

にはそう思えてならず、町長への同情を禁じ得なかった。

「それにしてもどっかの誰かさんのお陰でさ、えれえ迷惑だよな。ホントに」

憤懣隠せない大信の声が部屋に響く。彼の言う、どっかの誰かさんは、ずっと俯いたまま顔を上げようとしない。

「聞いてますか？ 藤堂陸くん。あんたのことですよ」

ベットの上に腰掛けている陸の側に立ち、大信は無理矢理顔を掴んで上げさせる。正面を向いた瞳は涙で溢れており、すぐにもこぼれ落ちそうだ。

「大信、いい加減にしろ！」

見かねた千里が声を荒げて制止する。

「おーおー、陸には優しいねえ。もしかして、お前らおホモ達い？ それとも名家の御曹司として器量のでかいところでも見せておこうって魂胆か？」

その言葉に堪忍袋の緒が切れたのか千里は大信の胸ぐらに掴みかかった。

「いいね、その目。五十嵐家のボンボンとは思えねえ殺氣のこもった目をしてる」

「有田の父なし子が何を言う」

お互い相手の触れて欲しくはない家庭の事情を口にして、一触即発のムード。それを回避させたのは朱鷺野の鉄拳だった。

たまらず両脇のベットへ吹き飛ぶ二人。

「牙も生えそろっていないガキ共が一人前にいきり立ってんじゃねえ。鬱陶しい。おい、藤堂陸」

フルネームで呼ばれて陸は身を固くする。

「相手にびびって逃げ道を譲ったなんて山月村じゃ前代未聞だな。どうやら俺は虎と猫の子を見間違えたらしい。切磋琢磨して鍛え抜いたお前の剣技は素晴らしいものだ。だが、それを生かす心の鍛錬はまだまだたっただけか」

陸はただ何も言わず黙って聞いている。

「臆病なことが悪いとは言わない。それが命を守ることに繋がるからな。だが、戦いの場で覚悟のない者は必要ない。陸、お前に足りなかったのは戦場に出る覚悟だ。その結果が今日のこれだな」

「……はい」

消えそうな声で返事が返ってきた。

「まあ、これ以上とやかく言っても仕方がない。自分の部屋に戻ってシャワーを浴びてこい。そして明日に向けて心を切り替える。夜が明けたらすぐに行動を起こす。いいな、その二人も」

殴られた頬を押さえながら返事をする千里と大信。

先ほどの朱鷺野による鉄拳制裁は普通の人間が喰らったらひとたまりもない。恐らく頭が破裂し壁に真っ赤な模様を作ることとなっただろう。それ程までに虎人の腕力は凄まじい。逆に頬が赤く腫れた程度ですんだのは、偏に虎人のもつ頑強さのお陰だと言えた。

「……失礼します」

小さくお辞儀をして自分の部屋へ戻る陸。

「あゝあ、辛気臭くて嫌になっちまう」

閉じる扉を見送ると大信は上着、ズボンと脱いで禪一枚になった。

「ちよつくら、シャワー借りるぜ」

「お前、自分の部屋のを使えばいいじゃないか」

「言つたろ。辛気臭いのは嫌だって。それにどうせ泣くんなら一人にさせておいた方がいい。あいつも泣いてるところを他人に聞かれたくないだろ」

大信なりの陸への心遣いだと分かり、千里は静かに微笑む。

「だったら最初から優しくしてやればいいのに。不器用な奴」

ユニットバスの蛇口をひねると冷たい水が体へ降り注ぐ。やがてだんだん温度が上がりお湯となって辺りを湯気で包み込んでいった。だが陸は立ったまま微動だにしない。ただ額を壁につけているだけだ。

「よりによって何で動けなかったんだろっ」

蜂蜜色の髪から雫がぽたぽたと落ちていく。この髪、この目、この肌。

ただ皆と違うだけで散々虐められてきた。『あいのこ』と影で言われているのも知っている。だからそいつらを見返すため人一倍、いや二倍三倍それ以上努力してきたのだ。

陸の父はアメリカ人で母が山月の出身である。あまり村から出る機会が少ない山月の女がどうやって知り合ったのか知らないが、二人は出会って、恋に落ち、そして結婚した。

虎人は女腹でしか産まれてこない。いくら男の虎人が頑張ったところで、相手が人間の女性である限り産まれてくる子は全て人間だ。反対に相手が誰であろうと女の虎人が産む子はすべて虎人、『虎』である。

陸も『虎』として生を受けた。文字通り毛色の変った虎として。「だから頑張ってきたじゃないか。見返すため、認められるために。なのに、なのに！」

お湯とは違う熱いものが頬を伝って流れ落ちた。そして嗚咽の聲が洩れる。

それはまるで夜に響く遠吠えのような声だった。

『何処を走ってきたのか、何処へ走っているのか。全く憶えていないし全く分かってもない。追っ手から逃れる為に、遠くただひたすら遠くを目指していたのは確かだ。認めたくないが我は逃げたのだ。あの虎の小僧どもから』

化け猫又佐は自分がどうやってこの場所まで来たのか定かではなかった。ただ、降りしきる雨の中、あのしつこい小僧共を撒くので精一杯だったことは憶えている。草むらをかき分け、田んぼを横切り、途中、何度も転びそうになりながら逃走した。今は茂みの中に身を潜ませ辺りを窺っている。付近に気配を感じないところから、どうやら撒くことには成功したらしい。

しかし、今の自分は何と哀れな姿であろうか。又佐は思う。

先ほどの戦闘で受けた傷が肉体を剥り、痛みが神経を蝕んでいた。特に左側面、首から脇腹にかけて酷く痛む。所々、葉っぱや木の枝が絡みついており、泥水と血が己の白い毛皮に多くのシミを作っていた。そして、小型乗用車ほどの大きさだった又佐の体はそこら辺にいる野良猫のレベルまで小さくなっていたのだ。

正確に言えば、それまでの巨体を維持する力が尽きてしまい、猫本来の姿に戻ったのである。皮肉なことにそのお陰で追撃者から逃れられたのだが。

（しかし、ここは何処だ）

茂みから顔を出し様子を窺う。

今の又佐には傷を癒し力を取り戻すための食い物と身を休ませる場所が必要だった。それらを求めて顔を上げると又佐の目にカーテンで閉じられた窓とそこから洩れる光が映る。どうやら、どこか家の庭へ入り込んでしまったらしい。

（とにかく前へ、あの光の中へ）

しかし又佐の意識は途中で途切れてしまった。

最後の1ページを読み終えて静かに本を閉じる。時計を見ればもう十時を過ぎていた。

和田ちか子はかけている眼鏡を外すと鼻の根本を押さえた。

図書館から借りてきた本が明日返却だったのに気づいて、先ほどまで一心不乱に本を読んでいたので、さすがに目が疲れたらしい。借りてきた本は『源氏物語』の中巻。続きが気になるので明日返しに行くついでに下巻も借りてこよう、とちか子は小さな決心をする。気分転換にカーテンを開けると、二階から見える外の風景は雨で曇っていた。夜の雨は山も田んぼも近所の家も全て幻想的なものに変えてくれる。

「よく降る雨だなあ」

一言感想を呟いて視線を自宅の庭に向けると何か動いているのが

見えた。

疑問に思い部屋の扉を開けると、そのまま階段を駆け下りていく。傘を差して庭に出るとそこには一匹の猫が倒れていた。死んでいるかと思われたがよく見ると胸が上下に動いていたのでホッと胸をなで下ろして猫の側へ近づいていく。

「どうしよう。何とかしなくちゃ」

暫く考え込んでいたが意を決すると猫を抱きかかえ自分の部屋へ向かった。本来なら動物病院へ連れていきたいところだが、生憎何処にあるのか分からなかったので、ここは自分で何とかするしかない。

「とりあえずタオルで濡れた体を拭かないと」

ちか子はすぐさま思いつくだけの行動を開始した。

夜の空に月が浮かんでいる。中秋の名月。それをあの人が物憂げな表情で眺めていた。

一言鳴き声をあげると、いつもの優しい笑顔でこちらを向いて軽く頭を撫でてくれた。そしてまた物憂げな顔に戻って独り言のように自分へ話しかける。

「もうじき家に婿様が来るの。私の旦那様になるのよ」

その言葉を聞いて体中に稲妻が走り、心臓が大きく鳴り響く。いずれこんな日が訪れるとは分かっていたが、やはり実際に訪れるとどうしようもない絶望感が心を支配する。

「とうさまの言いつけだから仕方ないけど、本当は私、この縁談乗り気ではないの。やっぱり自分から好きになった人と一緒になりたかった。『源氏物語』の紫の上ように」

その独白を聞き、ある決心した。それは不退転の決意。

この人を自分のものにする。

「あ、目を開けた」

聞き慣れない、だがどこかで聞いたような声で又佐は気がついた。

どうやら暫く意識を失っていたらしい。我に振り返りここは一体何処なのかと顔を上げると、こちらを見ている少女の姿が目に入った。その顔を見て又佐の動きが止まる。

一方、ちか子は助けた猫の目が開いたのを確認して安堵の溜息をつく。

「死ななくて本当に良かった」

とりあえず傷薬を塗り、ガーゼをあてて包帯を巻くといった簡単な応急処置ではたして大丈夫なのか心配だったが、猫の意識が戻ったことで安心した。

「ねえ、あなたお腹空いてない？」

そう言つと、ちか子は皿に入つた牛乳とキャットフードを、又佐が横たわっている、段ボール箱に古くなったバスタオルを敷き詰めて作つた簡易の寢床の側へ置いた。

「このキャットフード、余り物だけどどうぞ」

しかし、又佐はちか子の顔を凝視したまま微動だにしない。

そんな又佐の顔をちか子もじつと見つめる。暫くの間、お互い見つめ合つたまましていると、ちか子がハツと気づいて声をかけた。

「あら、あなたとてもハンサムな顔をしているのね。まるで貴族、猫の貴族みたい。もしかしたら光源氏の生まれ変わりかしら。と、言つても光源氏は物語の登場人物であつて、実在してないんだけどね」

ふふふ、と笑いながらウインクをする。

だが、逆に又佐の瞳は更に見開かれることとなった。

又佐は自身が化け物故、神仏などはまったく信じていなかった。それに元々畜生である。信仰心など欠片もない。しかし、今この時になって初めて仏の存在を信じてしまいそうになった。

この目の前にいる少女は、何故あの人と同じ姿なのだ。

この目の前にいる少女は、何故あの人と同じ言葉を発したのだ。

あの人は遙か昔の人。今この世に存在するはずがない。

しかし、だがしかし。

輪廻転生。

それを実証する証拠は目の前にいる。

因果は巡る水車ごとく、再びあの人を我に引き合わせてくれたのか。

「うーん、まだ物が食べられる程回復していないのかな。しょうがない、餌はここに置いてくから元気になったら食べてね。じゃあ、遅いから電気消すよ。」

こちらを凝視している又佐を後にして、ちか子は部屋の電気を消すと、掛けていた眼鏡を机の上へ置いてベッドの中へもぐりこんだ。最後に又佐に向かって「おやすみ」と就寝の挨拶をすると夢の世界へ入っていった。

しかし、その間も又佐は石のように動かなかった。いや、動けなかったと言っべきか。

ただジッとちか子が寝ているベッドに顔を向けたままだった。

皋月中旬 土曜日 午前 『君と出会った街角』

山の端へ沈んでいく夕日が、全ての景色を橙色に染めている。その中で、何人かの子供に囲まれている自分がいた。

「何だよお前の髪の毛、変な色」

「やめろよ」放せてば！」

誰かに髪を思いつきり引っ張られ、あまりの痛さに、その手を払う。引っ張られて頭皮が痛かったが、それ以上に心が痛かった。

すると今度は背中を強く叩かれ、思わずバランスを崩し前のめりに倒れてしまう。

「見るよ、こいつの目も肌も。俺達と全然違うぜ。『普通』じゃない。変な奴う！」

後ろへ顔を向けると、違う誰かが自分を見下ろしていた。そして、すかさず蹴りを入れてくる。それに呼応するかの如く、周りから足が伸びてきて同じように容赦なく蹴ってくる。

「やめろ、やめろ、やめろってば。俺は変じゃない、変じゃないよ！」

叫んで抵抗を示すが、蹴りの嵐は全く止むことはなかった。逆に勢いは更に増し、頭に、体に、腰に、傷と痣をつけてくる。

「臆病者」

「戦場から逃げたくせに」

「お前なんか『虎』じゃない」

蹴りと共に今度は言葉の暴力が浴びせられ、心を深く剔り始めた。「違う、俺は臆病者なんかじゃない！」

たまりかねて体を起こすと、周りを金色に輝く鋭い眼が囲んでいた。

それは化け猫の目。

自分が退治しようとした化け猫の目。

自分が取り逃がしてしまった化け猫の目。

「我に恐怖して体ガ動かなかつたのだろウ。それを臆病者ト言わず何と言ウ」

「所詮、お前八虎ではなく子猫だったのだ」

「受け入れる、己の弱キ心を。認めてしまエ、自分が弱いものダト」

「臆病者に月八微笑まなイ。お前は永遠に闇の中を彷徨つておればイイ」

「やめろお……やめてくれえええ！」

自らの叫び声で陸は目を覚ます。そして慌ててベットから起きあがると、自分の隣を確認した。そこには幸せそうな顔をした大信が、大いびきをかいて熟睡している。

寝言とはいえ大声を上げてしまい大信を起こしてしまったか心配したのだが、どうやら杞憂に終わったようだ。

軽く安堵の溜息をつき、ベッドの横に置いてある時計で時刻を確認すると、もうすぐ六時。

「しまった、朝稽古開始の時間だ」

軽く声を上げ陸は慌てて身支度をしようとするが、ふと思い出し動きを止める。

「そうだ、ここは村の『学校』じゃないんだ。依頼で別の場所へ来てたんだ……」

その言葉がキーワードとなつて、昨晚の失態が脳裏に浮かぶ。

（俺は自分の弱さに負けて、化け猫を逃がしてしまった）

あまりの悔しさと情けなさで恥ずかしさに、体中が痺れるような感覚に襲われて、思わず下半身に掛かっている布団のシーツをギュツと握りしめる。そのまま暫く微動だにしなかったが、何か決心したかのように顔を上げると、部屋のドアへ目をやった。そして、陸は大信を起こさないようにそつとベットから降りて、ハンガーに掛けてあつた自分の学生服に着替えはじめた。

ズボンに足を通すと少し冷たい。昨日の雨で濡れた服はまだ完全に乾いていないようだ。山月の男は下着として褌を着用するのが習

わしなので、陸もご多分に洩れず禪を着けている。少し濡れているズボンの感触が臀部に直接きて、かなり気持ち悪い。それでも我慢して手早く着替えると、壁に立てかけていた自分の得物を取って静かに外へ出る。懐には数枚の符も入れた。

「早く、あいつを捜し出さなきゃ。取り逃がしたのは、俺の責任だ。何としても自分で捜して、退治してみせる。絶対！」

確固たる決意を示すと、陸は朝靄で煙る町の中へ姿を消していった。

巨大なテーブルの上には、世界中から取り寄せられた多種多様の料理が、所狭しと列んでいる。

ステーキ、パスタ、お寿司、餃子各種。

内容は、少しお金を出せば誰でも食べられる品揃えで、最高級料理と言うにはほど遠いものの、大信にはそれで十分だった。

村の『学校』にいるときは絶対口にするこの出来ない料理。

テレビの中で他人が食しているのしか見たことのない料理。

それが今、目の前に。もう、ご飯に味噌汁、納豆、焼き魚は食い飽きました。

両脇にはバニーガール姿の綺麗なお姉さんが揃い、料理を食べさせてくれる。

テーブルを見渡しどれから食べようか迷っていると、左側の白いウサギのお姉さんが、箸で餃子を自分の口に運んでくれた。大信は口を大きく開きそれを出迎える。

「いただきます……」

「起きろ、いつまで寝ている！」

全てをぶち壊す怒鳴り声とドアを連打する音で、大信は目を覚ます。目の前に見えるのは美味しい料理ではなく、部屋の白い壁。

悲しい現実が思春期の少年を打ちのめす。

「せっかく餃子が食べられると思ったのに。へいへい、今開けますよ。」

寝起きの重い体を引きずってドアを開けると、怒り顔の朱鷺野と
気まずそうにしている千里が立っていた。

「おはよう、実ちゃん」

「おはようじゃねえ。それに実ちゃんじゃなく朱鷺野さんだろ」

「ったく、どっちも一緒じゃん。へいへい、朱鷺野さん。それで何
用ですか」

未だ完全に目が覚め切ってない様子の大信。その格好は、着てい
る寝間着を肩までずり落とし、口には涎の後をしっかりつけていて、
何とも情けない。

余りにも、みつともない従兄弟の様子に頭を痛めたのか、こめか
みの辺りを指で押さえて、朱鷺野は携帯を取り出すと、大信の顔面
に押しつけた。

「今、何時か分かってるのか、七時過ぎてんだぞ。昨日言ったよな、
夜が明けたらすぐに行動するって。全く、下の食堂で待っていたの
に全然降りてこやしねえ。来てみれば案の定寝てやがるし。『学校』
から解放されて気が緩んでないか！ もっと引き締める！」

最後の辺りはもう怒鳴ると言っているほどの大声になっていた。

周りを気にしてか、千里がまあまあと朱鷺野をなだめる。

彼らの言う『学校』とは無論普通の学校ではない。

虎人として産まれた子供達は、小学校へ入学できる年齢になると
親元から引き離され、男女別々の施設に入れられる。

そこでは剣術、体術、符術などの戦闘術から、普通の学校で習う
一般教養、過酷な状況下を生き抜くためのサバイバル術まで様々な
教科を叩き込まれる。

休みなど殆どなく、盆と正月に親元へ帰れるぐらいで、毎日朝早
くから夜遅くまで稽古に明け暮れる日々であった。

それが彼らの『学校』である。

千里は部屋の中を見渡して、あることに気づき、大信へ質問した。

「あれ、陸はどうしている？」

言われて隣のベットを確認する大信。そこには、陸の姿はなかった。掛けてあった学生服も得物が入った竹刀袋も見あたらない。

「ちっ！ あいつ、先に出ていったか。先走りしやがって」

舌打ちと共に大信が吐き捨てる。未だ目覚めきつてない様子だが、完全に顔は呆れていた。

「昨日は、化け猫相手に後れを取って逃がしてしまい、その責任感から今度はスタンドプレーか。気持ちは分らないでもないが、こういう時こそ連携が必要ではないのか」

髪の毛を掻きむしりながら、ぶつくさ口の中で文句をたれている朱鷺野。

そこへ千里が、やや遠慮がちに声をかける。

「陸のことは、どうします？」

「放っておけ。どうせ化け猫捜しに、町中を駆けずり回っている頃だろう。やることは、こちらと同じだし、何かあれば連絡を入れてくるはずだ。どちらにしろ、今日中に獲物は狩らないといけないしな」

陸は気の小さいところがある故に、一人で化け猫に向かっていくような無謀な行動には出ないと、朱鷺野は踏んでいた。

「実戦経験が殆どない陸が、手負いとはいえ化け猫を一人で相手するには、まだ荷が重すぎる。それは本人も分かっているはずだ。化け猫を発見したら、すぐにこちらへ連絡を入れてくるだろう」

そして、二人の少年に向かって言う。

「俺達も行動を開始しよう。大信、早く着替えて飯を食ってこい。今日は忙しくなるからな。エネルギーだけは、しっかり補充しておけよ」

朱鷺野にそう言われると、何故か大信はくると背を向けて、ベットへ潜り込んでいく。

「何をしてるのかな、有田大信くん」

理解不能な大信の行動に、朱鷺野は妙に優しい口調で問いかけた。

声は優しいが、口の端が少し釣り上がって、こめかみに血管が浮いている。爆発寸前だ。

「え、だって飯を食ってこいって言ったじゃん。だからさ、さっき食いかけだった餃子をバニーさんに食べさせて貰うために、もう一回夢の中へ行こうかと……」

血管のプチ切れる音が聞こえたかもしれない。

こうなると怒りで顔を真っ赤に染める朱鷺野を、止めることは出来なかった。

布団を頭から被った大信目掛けて、右ストレートを一発、二発、三発……。

殴られる度に、ヒキガエルを潰したような呻き声が、布団の中から洩れてくる。

『馬鹿は死ななきゃ治らない』

そんな言葉は本当にあるんだと、千里は目の前で確認することが出来て、とても複雑な気分だった。

孫と祖母の何気ない朝の挨拶。それでいつもの一日が始まる。

「おはよう、お祖母ちゃん」

「おはよう、ちか子」

食卓にはトースト、ベーコンエッグ、サラダ、コーンスープが並べられており、ちか子は椅子に座って自分の分を食べはじめた。祖母は洋食が口に合わないらしく、ご飯に味噌汁、焼き魚といった和食で済ましている。

「どうだい、体の具合は」

昨日、風邪で学校を休んだことを心配してか、孫に優しく尋ねる。「大丈夫だって。結局、昨日だって朝には熱が引いて、行こうと思えば学校には行けたのに。念には念をつて、お母さんが休ませたんだから」

祖母と会話をしながら、ちか子はふと思った。

（それにしても、最近熱を出して倒れることが度々あるなあ）

月に一、二度、しかも自分だけではなく、父や母も熱を出すことがあった。だが病院では、ただの風邪と診断され、確かに薬を飲めば、すぐに熱は引いた。しかも昨日みたいに一日寝れば、快方に向かうことも多く、命に関わるものでもないのに、それ程心配はしていない。しかし、氣にならないと言えば嘘になる。

「ちか子、どうしたんだい？」

急に箸を止めて考え込んでいるちか子の姿を不思議に思ったのか、祖母が声をかけてきた。

名前を呼ばれて我に帰ったちか子が、心配させじと笑顔を作って祖母に答える。

「うつん、何でもないよ。あ、そうだ。昨晚ね、庭先で猫が怪我をして倒れていたの。部屋に連れて行って応急手当したら目を覚ましたんだけど、このまま家に置いてもいいよね？」

その会話を聞いて、今まで台所で後片づけをしていた中年女性、ちか子の母親が、渋い顔をで不満を口にした。

「家にはサスケがいるのに、また猫を拾ってきてどうするの」

「いいじゃない、もう一匹ぐらい。それに大けがしてたんだよ、そのままにしておくなんて可哀想よ。どうせ、サスケなんて最近滅多に家に戻ってこないじゃない」

「それに元は野良猫だろ。心配しなくても、怪我が治ったら勝手に出ていくさ」

ちか子の猛反撃に、それを支援する祖母の口添え。

この連係攻撃に、ちか子の母親はさすがに手を挙げて降参するしかなかった。確かに、怪我をしている猫を無理矢理追い出すのも後味が悪いし、それに、そこまで無慈悲ではない。

「しょうがない、怪我が治るまでよ」

そうは言っても、おそらくこのまま飼うことになるだろう。諦め半分でちか子の訴えを了承する。

「ありがとう、お母さん」

椅子から飛び上がったちか子は礼をする。よほど嬉しかったよう

だ。

「礼はいいから、早くご飯を片づけちゃって。主婦の朝は忙しいんだから」

はい、と元良く返事をするちか子は、目の前にまだ残っているトーストを口に運びながら、頭の中で今日の予定を立て始めた。(一度部屋に戻って、猫の様子を見る。それから、昨日数学の宿題が出たって友達がプリントを持ってきてくれたから、それを片づけないと。それにノートも借りたし、これで昨日学校へ行けなかった分を取り戻さなくちゃ。あ、源氏物語も図書館へ返しなくちゃいけないんだ。続きも気になるんだよな。そうだ、図書館へ行つて、ついでにそこで勉強をすればいいんだ。本も返せるし、宿題もできるし、一石二鳥。我ながら頭いい)

思いついたら即実行とばかりに、朝食を早急に済ませると、小走りで自分の部屋へ向かっていった。

「ちか子、ごちそうさま、は？」

「代わりに言つといて」

もう、しょうがない、と言いつつ母親はテーブルの上を片づけはじめる。しかし、その口調はとても優しく、ちか子が出ていったドアを見つめる瞳は、健やかに育つ娘を愛おしく想う母親の慈愛に満ちていた。食事を追え一服している祖母も、同じようにドアを見つめている。

「本当にそっくり……」

「あら、お義母さん。何か言いました？」

つい発した独り言を聞かれてバツが悪かったのか、何処か曖昧な笑顔で、祖母は答えた。

「……い、いや、ねえ。ちか子の姿、私の若い時にそっくりだと思っただよ。あのぐらいの時分、私にもあっただよねえ。もう、大分前の話だけど」

本当に昔の話。あの時のことは、決して忘れない。

老婆の瞳に一瞬、ほんの一瞬、強烈な感情が煌めいたのを、誰も知る由はなかった。

藤堂陸は、この時ほど自分を馬鹿だと思ったことはなかった。

見失った化け猫を捜そうと息巻いて飛び出したは良いが、どこから捜しているものか皆目見当が付かない。取りあえず、昨日戦鬪を繰り広げた製材所跡へ行ってみたが、案の定いるはずもなかった。

「化け猫追跡のため『飛燕符』を持ってきたのはいいんだけど……」
肝心の追跡する対象を見つけなければ、しょうがない。タダの紙切れである。

一応、この『飛燕符』には、既に知っている場所や人間のいる所へ案内するナビゲート機能を持っているが、化け猫の大まかな姿形は憶えているものの、細かいところとなると今では記憶もおぼろげで、それを使って見つけたすのは相当難しい。自分の足で捜した方が確かだ。

「符術か、もっと真剣に習えばよかったなあ」

陸は今更ながら、自分の未熟さと努力不足を痛感していた。

彼らの先祖が大陸から持ってきたものに『符術』がある。

長方形の紙、いわゆるお札に墨で難しい漢字とよく分からない模様を書き込む。

それが符である。

符は書き込んだ文字や模様によって様々な効果を発揮し、使用者は符に気を送り込むことで、その効果を発動させることができる。

稲妻を落したり、見えない壁を作り出したり、水中で長時間呼吸が出来たり等、様々な超常の力を使用者に与えてくれる。

しかし、気を用いて超常の力を生み出す故に非常にデリケートであり、符の能力は、その制作者や実際に使用する者の力量に大きく左右されてしまう。

三人で言えば、大信は符術とは徹底的に相性が悪った。符を使う度に暴発させ、もうどうしようもないレベルである。

反対に千里は符術と相性が良く、まだその能力を十分引き出しているとは言い難いものの、それでも、どんな符も一通り扱うことができた。

陸は可もなく不可もなく、ぼちぼち。

大信と千里。

まだ未熟とは言え、二人の実力は同年代の中でも、特に群を抜いている。

片や、天賦の才で、あらゆる局面に柔軟な対応を見せる剣技の持ち主、大信。

片や、剣術、符術共に高いレベルで習熟し、攻防どちらにおいても隙のないオールラウンドプレイヤー、千里。

二人の存在は、同じ年やそれより年下の者に、一種の憧憬の念を与えている。

よくよく考えると、そんな二人と行動を共にしてること自体、陸には信じられなかった。

自分はただ少しでも強くなりたい一心で、がむしやりに努力し頑張っていただけなのに、気が付けば二人に続く実力者と見なされるようになっていた。

陸の剣技は大信に比べると精彩に欠け、符術は千里に比べると不安定な代物であるが。

(それでも評価されるのは素直に嬉しかった。なのに……)

再び、昨日の悪夢が思い出され、陸の心に不安と絶望の雨雲が広がる。

「あゝもう、やめやめ。どうも悪い方悪い方へ考え込んでうなあ。汚名挽回するために朝早くから動いてるんじゃないか。しっかりしろ、藤堂陸！」

『汚名挽回』ではなく、正しくは『汚名返上』もしくは『名誉挽回』なのだが、今の陸にはどうでもいいことだった。

両頬を叩いて気合いを入れると、気持ちを落ち着かせる為に辺りの景色へ目をやる。今は化け猫との戦闘があつた製材所を離れて、そこから町中へ向かう道のりを辿っている最中だ。

昨日の夜に降り出した雨は、夜明け前には止み、雨雲は朝東風に流されて、代わりに五月晴れの鮮やかな青が天を覆っていた。

水田に張られた水が蒼穹の空を映し、時折、太陽の光を反射して、その存在をアピールする。歩いている道ばたや、所々見かける雑木林、一帯を大きく囲む山並みは新緑が支配し、これから夏に向けて大きく葉を伸ばす新鮮な命の活力に満ち満ちていた。

「うーん、こうやって歩いていると、ここら辺も自然が多く残っているなあ。駅を降りたときは、都会っぽい感じだったんだけど、そうでもないか」

今いる町は、確かに都会ではない。人工の建物より自然の産物が景色の大半を占めており、ハッキリ言って片田舎の町である。だが、山の奥深いところに位置する、彼らの住んでいる村に比べれば、よっぽど都市化が進んでいると言えるよう。

「あれ、確かあそこは」

そのまま町に向かって歩いてみると、広がる田園風景の中に、こもりと生えている雑木林へ目がいった。

そこは山裾と、その先に広がる水田との中程に位置しており、陸が昨日電車の中で読んだ資料によれば、化け猫によって最初に殺された女性の痕跡が見つかった場所であった。

一応、昨日の昼食後に現場の下見で廻ったところだった。だが、初めて食べる料理を前にして、つい調子に乗っていつも以上に食べしまい、そのお陰で気持ち悪くなっていた最中の事だったので、具体的な内容はよく憶えていない。

もしかしたら、化け猫が潜んでいるかもしれない。

そんな僅かな望みを賭けて、陸は雑木林の中へ足を踏み入れている。

った。

事件の起きた直後は、警察による厳しい規制がなされていたこの場所も、それから時間が経った今では何事もなかったように静まりかえっている。

陸が足を踏みしめる度に、地面に落ちた木の枝が割れて小さな音を立てる。

「化け猫さ〜ん、いらっしやいますか〜」

申し訳なさそうな小さな声で陸はお伺いを立てるが、無論それに答える気配はなかった。

辺りを注意深く見渡しながら、更に奥へ足を進めていくと、木立を抜けて広場へ出る。広場と言ってもそれ程大きくはなく、奥には小さなお堂が建っていた。村の鎮守の神様と言ったところだが、随分古びており、観音開きの扉は堅く閉ざされている。歴史を感じさせる柱や屋根は、苔むして所々色褪せ朽ち果てていた。

お堂の状態や、木の枝や落ち葉が散乱した広場の様子から、あまり人が来ていないのは明白で、化け猫による殺人事件がなければ、見向きもされない場所だったはずだ。

周りは雑木林に囲まれて薄暗く、真上に見える青空が更に木々のシルエットを更に濃く見せる。境内はシンと静まりかえって、時折囀る鳥の鳴き声が、やけに響いて薄気味悪い。

こんな所じゃ普段人が来ないのも当たり前だと思い、陸は一通り探索してから後にしようと決めて、行動を開始する。

「しかし、気味悪いよ。早く終わらせよう」

と呟いた後、イカンイカンと首を振り、表情を真面目なものに変えた。

（ここに化け猫が、潜んでいない可能性はない。それに自分の落ち度は、自分で何とかしなくてはいけない。だから、気を抜いちゃいけないんだ）

そう心に強く念じると、お堂へ向けて慎重に歩いていく。

目、鼻、耳、肌、使える全ての器官を動員して、化け猫の痕跡を

捜すが、何も感じられない。それでも警戒を解かずに、お堂の側へ行くと、その脇に木でできた何かの残骸があるのに気づいた。

昨日ここに来たときは、殺人現場である雑木林内に集中して、お堂のある一帯は、殆ど素通りしたと言ってもいい。だから、お堂の存在など気にも止めなかったし、ましてや目の前の残骸に気づかなかったのも当たり前である。

「これ、何だろう」

残骸に興味を示した陸は、近くに寄って注意深く観察し始める。

「もしかして、これって祠だったんじゃないか」

確かに残骸をよく観察すると、破壊された屋根や柱らしい物があり、かなり小さいものの、どことなく隣に建つお堂の形状と似ていた。壊されてから大分経っているようで、残骸自体も朽ち果てており、祠が建っていた場所は、地面が荒らされグシャグシャになっていた。おそらく誰かが悪戯半分で壊してしまったのだろう。

「罰当たりな奴がいるモンだ。おそらく大信みたいな奴だな」

意地悪で気の強い友人の顔が思い浮かんだが、同時に微かな疑問が陸の心に残る。

（でも、この祠には、いったい何が祀られていたんだろう）

暫く探索した後、どうやら、ここには化け猫は潜んでいないと判断した陸は、境内を抜けてその場を後にした。

もと来た道に戻ると、太陽は前より高くなっている。

「そう言えば朝飯を食べてなかったっけ」

思い出した途端腹の虫が大きく一声鳴いた。

威勢の良い大声が、辺りに響く。

「へ〜くしょん！」

「何だ風邪か？ それとも町長さんが着けていたコロンがまだ鼻に残っていたのか？」

歩きながら突然大きなくしゃみを一発放った大信に、千里が無表情な顔で言葉をかける。

無表情と言っても、千里自身は本心から心配しているのだが、顔に上手く表情を出せないのも、その感情は相手に伝わりにくい。それは本人の悩みの種でもあった。

一方の大信は、千里の鉄面皮を十分承知しているので、気にした様子はない。

「いや、多分誰かが俺のことを噂してるんだと思うぜ。例えば、昨日町役場前で見かけた背の君とか」

「それは、お前が一方的に見かけたただけであって、向こうはお前の事なんてこれっぽっちも知らないぞ。それにいつの間に、背の君なんて名付けたんだ。やけに時代がかった言い回しだな。もう少しましなモノは、なかったのか？」

「例えば？」

大信の質問に、暫し立ち止まり思案に入る千里。

そんな千里を放置して、大信は先に行く。

彼らは宿泊地である駅前ビジネスホテルを後にして、商店街の通りを歩いていった。どの店も開店直後の準備に大わらわの状態である種の活気で沸いている。店先には軽トラやワゴン車が止まって、慌ただしく荷を下ろしており、パン屋からは焼きたてパンの香ばしい香りが流れてきて、大信の鼻をくすぐり、思わず舌なめずりをしてしまう。

そして、置いてけぼりにされた千里が追いついてきた。

「おいてくなよ」

抗議の声を上げる千里に、

「考え込むと動きが止まるお前が悪い」

と大信は軽く言い放つ。

悪態をつかれて千里は、多少気分を悪くしたのかムツと黙り込むが、相変わらず顔は無表情で変化がない。

そんな彼の様子を、大信は悪戯っ子ぽく楽しそうに眺めながら、千里との関係について過去の記憶を紐解いていた。

（俺とこいつ、お互いいつもライバル関係にあったよなあ……）

千里は『山月五家』と称される山月村の五つの名家において、第三位に位置する五十嵐宗家の嫡男である。

対して大信は父親が不在で誰だか分からない、いわゆる私生児として生を受けた。

出自から正反対の二人は、『学校』に入れられた時から、お互いを強烈に意識していた。

特に、剣術の稽古で大信、千里、二人の組み合わせになると、凄まじい攻防戦が繰り広げられる。

お互い習ったばかりの剣技を繰り出し、持っている得物が練習用の木刀でありながら、真剣を構えたような迫力で、休むことなく打ち合いを続けてしまう。

過去に一度、強烈な打ち合いで二人の持っている木刀が真っ二つに折れてしまう事態となり、それでも両者とも引かず、素手で殴り合いを始め、最後には取っ組み合いの喧嘩にまで発展し、陸が無理矢理引き剥がして終わらせた事があった。

それ程までに二人のライバル心は、苛烈なモノであると言える。

だが、相性は悪いわけではなく、むしろ逆に親友同士と言っているほど親密な関係だ。

時折、昨晚のビジネスホテルでの一件のように、我の強い大信が突っかかって衝突する事もあるが、暫くすると何事もなかったかの如く笑顔で会話を交わしている。

大信、千里それに陸を加えた三人は、平時からいつも行動を共にしており、仲が良かった。

攻撃的で負のイメージが強い大信も、名門出身を意識されるのが嫌な千里も、髪や目の色が違うことで虐められていた陸も、三人が一緒に行動することで平穏と安心感を手にすることができ、外部からの雑音に気を取られることもなくなった。口には出さないが、お互いがお互いを大切な存在だと認識しているのだ。

大信の笑顔が、微妙に優しいものへ変化する。

千里や陸と出会えて自分はどれだけ救われたのだろうかと思うと、自然に心が暖くなるのだ。

だからと言って、からかうのを止める気は毛頭ないのだが。

一方、言い負かされた千里は、反撃したい気持ちを心に押さえこんで、今後の行動について大信と話し合う。

「それより、どうやって化け猫を捜す？ 規模の小さな町だとは言え、町中に逃げ込まれた以上、そう簡単には見つけれないだろう」「そこら辺でくたばってくれてりゃ、楽なだけだよお」

楽観的な大信の言葉。しかし、あくまで希望を込めた意見であり、実際、自分たちが化け猫に負わせた傷の具合を考えると、重傷まで持っていたものの、その怪我で化け猫が命を落としたとは、到底思えなかった。

「まあ、確かに。だが、恐らく奴は生きている。そして、この町のどこかに潜んで傷を癒しながら捲土重来の機会を窺っているだろう。それに、このまま放置しておけば、この町の印象が更に悪くなる可能性もある」

「つまり、化け猫がまた人を襲うってことかい。ああいう類の化物は喰らうことで力を貯める傾向にあるからな。又佐って言ったつけ、あのクソ化け猫の今の状況は、まさに羊の群の中に置かれた狼と一緒に、喰いたい放題ってわけだな」

「これまでの慎重な行動と怪我の具合を考えると、いきなり人を襲うような真似はしまい。まずは残飯を漁り、鼠を捕食し、そして徐々に大きなものへ獲物を変えて、最後に人間を……」

言いかけて、千里は右手を広げ、かぶりつくようなジェスチャーを示す。そして、言葉が続ける。

「それに、化け猫は変化が出来る化け物だ。違うものに姿を変えて、こちらの追跡から逃れようとしているだろう。考えられるのは化け猫になる前、本来の姿である普通の猫に成り済ましている可能性が、最も高い。それに女、老婆に変化する場合もある。鍋島の猫騒動の

時も、お豊の方という女性に化けていたし……」

千里の蘊蓄を含んだ説明に対し、感心したように聞き入っている大信。

「……お前。これは全て『学校』の授業で習った話なんだが、もしかして全然聴いてなかったのか」

思い返せば、剣術の稽古など体を動かす訓練は熱心に取り組んでいたが、一般教養や、狩りの相手である化け物の予備知識といった机の上で学ぶ授業では、安らかな寝息を立てている大信の姿を毎回見ていた憶えが、千里にはあった。

「だってよお、俺は実戦で力を発揮するタイプだぜ。んな細かいものに、かまってられつかよ。要は目の前にいる獲物をぶった斬ればいいんだろ」

「細かいことではなく、相手の特性を知るのは基本中の基本なんだが……」

と千里は愚痴りつつも、大信だからしょうがないかと、諦め半分の溜息をついた。

「やっぱ、手当たり次第、風漬しに捜すしかねえかあ。こうなると昨日の夜の雨が恨めしくなるぜ。血とか臭いの残りそうな証拠を全部流してくれたからなあ。ちくしょうめ」

口元を歪めると、大信は近くにあった電柱に拳で殴りつけて八つ当たりする。

衝撃で電柱は微かに揺れ、電線にとまっていたカラスが迷惑そうに一声鳴いて飛び立ち、少し離れた電線に再び止まる。

「面倒だが仕方がない。幸い今は天気も良いし、注意深く探索すれば、化け猫の痕跡ぐらいは見つかるはずだ。それに風も吹いているから、奴の臭いを運んでくれるだろう。とにかく最善を尽くそう」
（良いとこの坊ちゃんらしい正しく真っ直ぐな意見なこと）

大信は千里のくそ真面目な意見を、半ば呆れ気分で聞いていた。そして、お坊ちゃん、という言葉から思い出したのか、疑問を口にする。

「あのさあ、ちょうど良い機会だから聞くけど、何でお前って実家の話になると不機嫌な態度を取るわけ。自分の家が、そんなに嫌いなんか」

突然、化け猫とは関係ない質問をされて千里は面を喰らったが、暫く黙って考え込んでいる。あまり取り上げて欲しくない話題らしく、なかなか喋ろうとはしない。

だが、覚悟を決めたのか、ようやく重い口を開き始めた。

「いいか、これはお前だから話すんだぞ。別に俺は実家と仲が悪いわけでもない。家族が嫌いだとか、そんなことも思っていない。逆に五十嵐という家名を誇りにしてるし、両親も尊敬に値する人間だ。ただ……」

「ただ？」

「……周りに寄ってくる人間が嫌いなんだ。昔から少しでも甘い汁を吸おうと、子供の俺にまで媚びへつらう連中が寄ってくるんだが、そのくせ陰では悪口を並び立て、正直何を考えているか分かったモンじゃない。それに、特権意識に凝り固まった他の四家の奴らも嫌いだ。実力もないのに、名門出身を鼻に掛けて威張り散らしている」そんな外側だけで中身のない存在にはなりたくないからこそ、剣術や符術の難しい技を次々と習得し、また技術面だけでなく精神面でも立派になろうと日々精進を重ねてきた。

千里が持つ飽くなき向上心を、大信は知っている。大信だけでなく陸や周りの人間も承知している。だが、媚びる連中にしろ、尊大な名家の連中にしろ、人それぞれ事情があるし、故に諸々の事情を汲み清濁飲み込んでこそ大人だと言える。それが出来ない千里はまだ子供なのだ。

「お前もまだまだガキだね。俺と同じで、安心した」

豪快に笑いながら、大信は友人の背を何度もバシバシ叩く。

対して千里は、言わなきゃ良かったと後悔し、気恥ずかしさから頬を赤く染め仏頂面になる。

そんな二人の前方から、セーラー服姿の女の子三人組が歩いてく

る。

近所の中学生らしき三人は、手にテニスラケットを持っているところから、学校のクラブ活動にでも行くのであるうか、仲良くお喋りしながら二人の横を通り過ぎていった。すれ違う瞬間、彼らを一瞥すると何事か囁きあい、通り過ぎた後、黄色い声をあげる。

「な、な、な、もしかして俺ってもてるんかな」

期待に目を輝かせながら大信は千里に同意を求めるが、

「いや、あれだろ」

通り過ぎた女子中学生達とは反対側にある本屋を指さす。本屋の店頭には、人気男性アイドルの大きなポスターが張ってあった。

淡い期待を裏切られて大信は、面白くなさそうに道に落ちている小石を蹴飛ばす。

ふてくされた大信の姿を、無表情ながらも何とか笑いを堪えて見ていた千里は、ふと気づいたことがあった。

（自分達は、世間の物事を全くと言って良いほど知らない……）

同年代の人達が何を話題にしているのか、好きなアイドルや流行の音楽、ファッション、美味しいお菓子、面白い漫画やゲーム。

知識として世間一般の常識はわきまえているが、後は剣術、符術と言った、普通の中学生とはかけ離れた物事しか知らないし、身につけていない。『学校』の寮に置いてあるテレビから憶えた知識で、多少の流行廃りは頭にあるものの、自分達は世間一般からは、確実に浮いた存在なのだと思い知る。

「だから実習は必要なのか」

実習は、ただ実戦を重ねて剣の腕を鍛えるだけではない。世間の中で活動し、揉まれることによって経験を積んで、様々な一般知識を叩き込んでいくのも大切なのだ。

「どうした、千里？」

また立ち止まって考え込んでいる相方に、大信は声をかける。

「いや何でもない。それより早速行動しよう」

実習に出た自分たちの置かれた立場、自分たちの命題を再確認し

た千里は、横にいる精悍な顔付きの親友を促すと、小走りに駆けていった。

「ところでさっきの話だけど、マドンナってのはどうだ？」

「……おまえもセンス古いよ」

その頃、立場上三人の保護者である朱鷺野は、駅近くの喫茶店でコーヒーを飲んでいた。別に化け猫搜索を少年達に任せっきりにしてサボっている訳ではなく、用事があつて、とある人物と待ち合わせをしていたのだ。

店に入って何本目の煙草を吸い終わった時、店の扉が開いて乾いたベルの音が鳴り響く。

いらつしゃいませ、と店の従業員に迎えられた客は、申し訳なさそうな顔で朱鷺野がいる席に近づき、対面の椅子に腰を下ろした。

そして、店員にコーヒーを注文すると、朱鷺野へ顔を向けて軽く頭を下げる。

「遅れてすみません、朱鷺野さん」

蜂蜜色の髪の毛に同じ色の瞳。背は高く体つきもガッチリしており、グレーのスーツを見事に着こなしていた。顔の彫りは深く、どう見ても日本人ではない。欧米人である。右手には鞆を持ち、大きな風呂敷包みを脇に抱えている。

「いえ、別に気にしなくてもいいですよ。それよりこちらこそ呼び出したりしてすみません、マックイーンさん」

「これも私の仕事ですから。それで、今回は息子をご迷惑をお掛けしたみたいで……。本当に申し訳ない」

椅子に腰掛けると、もう一度頭を下げた。

流暢な日本語を話す彼の名前はウォレス・マックイーン。

受けた依頼について事前に調べ上げて調査書を作成したり、依頼人と金銭面での交渉などを行ったりする、山月村所属の調査員であり、藤堂陸の実の父親でもある。

「ははは、初めての实战で、いきなりやらしてくれましたよ。で

も、今はその汚名を晴らそうとして、そこら一帯を駆けずり回っている頃です。相変わらず必死で頑張っていますよ、彼は。何なら会って行けますか？」

「それは遠慮しておきますよ。陸は私を憎んでいますから。あの子は、私が妻と別れたことをまだ許してはくれています。仕事にかまけて、自分達を捨てていったと思っていますから。会っても顔を逸らして、目を合わせてはくれないでしょう」

ウオレスは寂しそうに口を閉ざす。

山月の女と出会い結婚したウオレスは、村へ入り調査員となった。しかし、調査員の仕事は日本全国を東奔西走せねばならず、多忙を極めていた。自然、妻と顔を合わす時間もなくなり、結果として夫婦間の溝が深まって、離婚という結末を迎えてしまった。

「妻は、私のいない寂しさを陸に愛情を注ぐことで慰めてました。溺愛と言っても過言ではないでしょう。その所為か、過保護に育てられた陸はどうも外部からの重圧に弱くなってしまつて。正直、『学校』に入れて妻から引き離れたのは、良かったと思ってます……」

幼い陸を『学校』に入れたその日、母親が追いつがり半狂乱になつて泣き喚いた話を朱鷺野は知っている。村では有名な話だ。

（なかなかヘヴィーな話だな）

重くなつた空気を取り除くため、朱鷺野は話の本題に移る。

「で、今後の日程についてなんですけど、本来なら昨日で狩りは終了し、今朝には次の目的地へ向かうはずだったんですが、結果、一日ずれてしまつて……」

「それなら心配は無用です。昨日の夜に連絡を受けてから、すぐに変更した日程表を制作しました。いや、その、大変でした……。他のグループと依頼を入れ替えたり、村に問い合わせして新規の依頼を入れたり。何より、息子の醜態を村へ報告するのが辛かつた」

「私も、上から電話で散々嫌みを言われましたね。幸い五十嵐家が押さえ役にまわってくれたお陰で、それ以上のことはありませんでしたが、任務途中で引き上げて来いと言われやしないか、内心冷や

汗ものでしたよ。それこそ、指導員として当に屈辱ですから」

受け取った日程表に目を通してながら、朱鷺野は思わず苦笑いをする。お互い大変なのだ、中間管理職は。

「それで、今日中には何とか決着はつけそうですか。息子のこともありますが、それ以前に、この事件の担当調査員として気になりますのでね。依頼人との今後のやり取りにも響きますし」

運ばれてきたコーヒーに口をつけて、ウォレスは朱鷺野に尋ねる。「正直なところ分らないですね。しかし、町の中へ逃げ込んだ猫一匹見つけられないのなら、それこそ『虎』として失格。すぐに実習を切り上げ、村へ帰って猛特訓ですよ。これから先もつと難関な依頼をこなさなければいけないのに、この程度でもたついては困りますから。予定外の事態とは言え、あいつらには良い経験ですね。今回の件は」

厳しい意見だが、もつとな言い分である。

朱鷺野は、陸達について危惧しているところがあった。

同年代の『虎』達の中で、確かに彼ら三人は実力上位の存在である。だがそれは『学校』内で受けた訓練による格付けであって、その順位は実習を重ねることで簡単に入れ替わってしまう。育ち盛りであるこの年頃の少年少女は、数回の実戦を経験しただけで、大きく成長する場合がある。実際、『学校』では目立たなかった人物が、実戦を体験して上位の者を追い抜いてしまった例は、よく耳にする。陸達三人は、追いかけられる立場にいる。だからこそ、他の者に追い越されない為にも、様々な経験を積ませて、今以上の実力をつけて欲しいと、朱鷺野は願うのであった。

（上に何の思惑があつて、爪弾き者の俺にあの三人を任せたか知らないが、預けられた以上、とことん鍛え上げていくつもりだ。問題児揃いとは言え、逸材であるのには変わりない。その能力を伸ばさずじまいとあっちゃあ、俺の沽券に関わる問題だ）

朱鷺野はコーヒーのおかわりを注文すると、話題を変え、今後の日程についてウォレスと細かい打ち合わせを開始した。

喫茶店の窓から見える景色は、午前中の爽やかな日差しに包まれて、水彩画のように潤いのある色彩で彩られていた。

捜査を始めてから数時間、太陽は空の上高く昇っているが、反対に陸の心は深く沈んでいた。

町中の路地を力無く歩く後ろ姿は、どことなく煤け見える。化け猫の姿どころか足跡さえ見つかからない状況に、陸の心の中は焦りと失望が同居して目の前は真っ暗、何をどうしていいのかサッパリ分からない。肩に掛けた竹刀袋の中から、歩く度に得物がカチャカチャ音を立て、重みで紐が肩に食い込んで痛い。それに朝から何も食べていないのも響いた。

「早く化け猫を捜しなきゃ……でも腹減った。昨日の今は、初めて中華料理をたらふく食っていたのになあ」

思い返すだけで、涎が口の中一杯になる。お金は全て朱鷺野が管理しており、陸達三人は一銭も持ち合わせていない。せめて百円でもあれば、コンビニでパンかおにぎりの一つは買うことが出来て、多少は飢えから凌げるのだが。

虚ろな目でふらふら歩いていると、いきなり腹に激痛が走った。

（よく思えば、昨日の夜からトイレに行ってなかったような……）

陸の顔色が見る見る青くなる。

「こ、これはマジでやばい……」

痛む腹を押さえながら辺りを見渡す。

「どこか便所はないか。いや、便所じゃなくても、どこか人目につかないところ」

一刻を争う緊急事態である。すると、少し離れた場所に茶色い箱形の建物が見えた。芝生の緑と駐車場のアスファルトの黒で囲まれたその建物は、外壁が煉瓦づくりでできており、入り口の自動ドアの上に銀色の文字で大きく『図書館』と書かれていた。

「図書館……。あそこなら便所がある！」

猛スピードで駆け込みたい心境だが、彼の猛スピードは走る自動

車を優に追い越してしまう。山月村ならともかく、一般人のテリトリーであるこの町で、人通りの多いこの時間帯で、それをやるのは流石に拙い。陸は軽く深呼吸をして心を落ち着かせると、一般人に合わせた速さで駆けていった。

目指すは図書館内の男子便所。

学校を休んでしまった事による授業の遅れを取り戻す為に、ちか子は図書館で勉強に励んでいた。

「ちよつと疲れたかな。ジュースでも飲んで一休みしてこよう」

真面目な性格であるちか子は、万事に置いて最善を尽くすタイプである。中学三年生となり、来年の冬に高校受験も控えている身としては、多少の遅れとは言え気になるものだ。

（やっぱり、図書館で勉強することにして正解だったなあ。家にいたら、テレビとか漫画とか誘惑してくる物が多いけど、その点、図書館なら静かで勉強にも集中できる。ついでに本も借りていけるしね）

腕を伸ばして背伸びをすると、ジュースを買うために、図書館の入り口近くに設置してあった自動販売機へ向かう。

閲覧室から出て、階段を下りながら、ちか子は昨日拾ってきた猫のことを思い出す。

出かける前に部屋の隅に置かれた箱の中を覗き込むと、猫は丸まって寝ており、時折、耳や足をピクピク震わせて、何かに反応している様子だった。猫も、人間と同じように夢を見ると言う話を聞いたことがある。この猫は一体どんな夢を見ているのであろうか。箱の脇に置いていた餌は、なくなっていた。餌を全て平らげる程、猫の体力が回復したのだと確認できて、ちか子はホッと胸を撫でおろした。

「そつえば、猫に名前を付けてなきゃね。どんな名前がいいかしら」

あーでもない、こーでもないと、拾ってきた猫に付ける名前を思

い浮かべながら、屋外へ通じる図書館の自動ドアをくぐろうとする。そんな彼女の目の前に、必死の形相で駆けてくる、学生服に身を包んだ少年の姿があった。

（もしかして、このままだとぶつかる？）

陸が図書館の自動ドアから出てきた少女に気づいたときは、もう遅かった。

かわそうにも、スピードに乗った体は制御が効かず、しかも余裕もない。今の陸に出来ることは、相手の女の子を怪我させないよう、自分の体を盾代わりにすることしかなかった。

「危ない！ジャンプして避けて！絶対無理だろうけど」

「え、きゃあああああ」

陸の無茶な要求に反応できるはずもなく、ちか子は突進してくる陸と盛大にぶつかった。

ぶつかって倒れた瞬間、思わず目をつぶったちか子だったが、その後に来るはずの床との激突による衝撃はこなかった。代わりに何か柔らかいものがお尻の下にあった。

「あいた、ごめん大丈夫？」

ちか子の下には、床から庇うように、うつ伏せに倒れていた陸が、顔をしかめて痛そうにしている。

「きゃっ、こちらこそごめんなさい」

慌てて陸の上から退くと、自らの手を差し出して起きあがらせる。起きあがった陸は、服に付いた誇りを叩き、ちか子に向かって深々と頭を下げた。

「ごめん、本当にごめん。急いでいたもんだから、ちゃんと前を見てなくて。大丈夫？ 怪我はない？」

「いえ、大丈夫ですよ。こちらこそ御免なさい。ぼっと思え事をして、気づくのに遅れてしまっ。どうか、頭を上げて下さい」

ちか子は、照れくさそうに頭を上げた少年の顔をじっくりと見る。蜂蜜色の髪を真ん中で分け、大きな目には髪の色と同じ色の瞳が

浮かんでいる。色白で、背はちか子よりも少し低く、華奢な印象を与えた。そして、どこか人を惹きつける魅力を感じていた。
（この子、ハーフだね。初めて見た。でもうちの学校には、いな子だ。別の学校の生徒かしら。あ、照れてる顔が可愛いなあ）
同じクラスの男子とは違う雰囲気を持った陸に、彼女は興味津々で目を離せないでいた。

一方の陸も、普段同世代の女の子とふれあう機会が全くなかったので、ちか子を目の前にして完全に舞い上がっていた。

（うわ）女の子とこんな間近で話すなんて、久しぶりだな。束ねた黒髪が綺麗だし、眼鏡に白のブラウス、薄い緑のスカートがすごく似合ってる。顔立ちも整っていて、清楚な感じがいいなあ。ふあ、女の子とはこういう生き物なんだ。村の逞しい女子とは大違い）
お互い緊張して、次の言葉が出ないまま向き合っていたが、不意に陸がよろめいて片膝を床につけてしまった。

ちか子が驚いて駆け寄り、俯いた陸の顔を覗き込むと、その顔色は真っ青で今にも倒れそうである。

「だ、大丈夫ですか。もしかして、さっき打ち所が悪かったとか。きゅ……救急車呼びましょうか？」

「い……いや、そんな大げさなモノじゃないから。それより、どうか休める場所はないかな？」

さすがに腹が減って立ちくらみがしたとは、恥ずかしくて言えない。それに、朝からずっと歩きっぱなしだった疲れもあるだろうと、取りあえず体を休ませることが出来る場所を、陸は訊ねた。

心配そうな素振りを見せるちか子は、陸の手を繋ぐと、図書館内にある飲食コーナーへ連れていった。

ちか子の柔らかい手の温もりが陸の掌に伝わる。

その柔らかな暖かさに、思わず陸は赤面してしまうが、見れば誘導しているちか子の耳も真っ赤だった。向こうも照れているのだ。

雑誌が置いてあるスペースを通り抜けると、ガラス張りの壁に囲

まれた広いスペースがあった。そこでは、ソファーに座って買ってきたジュースを飲んだり、煙草を吸ったりと、人々が思い思いにくつろいでいる。

目の前の空いているソファーに陸を座らせると、寄り添うようにちか子も隣に腰を下ろす。

柔らかいソファーにもたれかかり、陸は安堵の溜息をつく。考えていた以上に体力を消耗していたらしく、ぐったりと動けないでいた。

「ありがとう、こんなとこまで面倒見てもらっちゃって……」

「いえ、いいんですよ。困ったときはお互い様です。それより気分はどうです？」

「ん、ちよつと持ち直したみたい」

ははは、と明るい笑顔を見せる陸。それは相手を心配させないために作った笑顔だ。

陸はよく笑うが、その笑顔の大半はご機嫌を取ったり、気を配ったりと、他人の為の笑顔であって、自分の為の笑顔ではない。

媚びる笑顔、取り繕った笑顔、

だから、陸は自分の笑顔が大嫌いだった。

そんな自分の感情を素直にさらけ出せる相手は、肉親を除けば、大信と千里だけ。

だが、いつも一緒にいる二人は、今この場所にはいない、見知らぬ土地に自分一人だけいるのだ。不安になった陸の心の中に冷たい風が吹く。

「あの、どうかしました？」

「え、何でもないよ」

自分の考えに浸っていた陸は、ちか子に声をかけられ現実に戻した。

「そうですか。いえ、顔は笑ってるのに目はやけに寂しそうだったから。あ、気を悪くしたら謝ります」

ドキッとした。

まるで心の中を覗かれたような、ちか子の発言。

（もしかしたら、この子は自分の本心を読みとったのかもしれない。初めて会ったのに、凄い子だ）

感心した陸はジッとちか子の顔を見つめていた。

その刹那、陸の心の奥底で何かが目覚め雄叫びをあげる。

それは遙か昔から受け継いできた虎人の血、野生の本能。普段は理性で押さえつけているものだった。

（何で、こんな所で目を覚ます。『詩』も詠っていないのに）

体中から冷たい汗が吹き出し、震えが止まらない。このままでは危ない、と理性が警鐘を鳴らすが、野生の雄叫びが、それをかき消す。

肩に手を置かれて、そちらの方を振り向くと、心配そうなちか子の顔が窺えた。

心の中で『虎』が陸に囁く。

『綺麗な娘だ。その柔らかい首筋に牙を立てたら、とろけるように甘い血肉が口の中を覆うだろう。ああ、噛みつきたい。そして餓えを満たしたい』

『さあ、犯せ、襲え、食いつくせ。本能の赴くままに、野生を解放しろ』

『汝の本性は虎なり。そして人は虎の獲物なり。我らの性欲を食欲を破壊欲を満たすだけの弱き物なり』

絶え間のない野生からの欲求と、それを押さえつけようとする理性との板挟みで、気が狂いそうになる中、陸は何故自分の心の奥で眠っていた野生が首をもたげたのか理解できた。

飢えである。

虎人は、普通の人間より多くの食物を摂取する。常識はずれの肉体を維持するのに必要なもあるが、一方で食欲を過剰に満たすことによって『虎』としての貪欲な欲求を大人しくさせていたのもあ

る。

陸は、一刻でも早く化け猫を探し出したい一心で、朝から何も飲まず食わずで動いていた。その負担が、ここにきて理性を鈍らし押さえつけられていた野生が首をもたげたのだ。

「本当に大丈夫です？ やっぱり救急車呼びましょうか」

まるで、苦痛から耐えているように視線を固定したまま脂汗を流して動かない陸の姿に、ただ事でない気配を察したちか子は、電話をかけるために席から立ち上がるが、

「余計なことはするな！」

陸から出た強い拒否の言葉に吃驚して、動きを止めてしまう。驚いた表情で陸を見つめたちか子だったが、そのまま背を向けて何処かへ去っていつてしまった。

小さくなっていくちか子の後ろ姿を眺め、陸は自責の念に捕らわれる

（くそつ、もつと違う言い方があるじゃないか。あんなに優しくしてくれた子に向かって怒鳴るなんて。あゝ、俺の馬鹿、最低だゝ）
俯いて自分自身を罵倒するが、それを嘲笑うかのように野生からの欲求は強くなる一方だ。水でも、ご飯粒でもいいから口に入れないと、このままでは『虎』になって建物内の人間を食い殺してしまう、化け猫事件の比ではない大事件を起こしてしまう。

そんな極限状態に置かれた陸の目の前に、清涼飲料水の缶が飛び込んできた。無我夢中で缶を手で掴むと、プルトップを開けて中身を一気に飲み干す。冷たい液体が胃の中へ流れ込むと同時に、煩かった野生の咆哮が消え大人しくなっていくのを感じ取ることが出来た。

当座の飢えを凌いで平常心を取り戻した陸に声かけられる。

「よかった、飲んでもらえて。水分を取れば多少は落ち着くんじゃないかと思っただけ、具合はどう？」

「きみは……。うん、かなり良くなったよ。あの、さっきは怒鳴ったりしてごめん」

そこに立っていたのは、ちか子だった。

「いいよ。気分が悪くて静かにしてたいのに、余計なお節介をかけようとした私も悪いし。それより、もう一本いる？」

ちか子が更に缶を差し出す。恐らく自分が飲む分として買ってきた物だろう。流石に、それは頂けないと断ろうとした陸だが、何時また自分の中の野生が目覚ますか分からないので、有り難く受け取ることにした。

「そう言えば、私達自己紹介まだだったよね。私の名前は、和田ちか子。中学三年生よ」

怒鳴られたことを全く気にしていない、明るい笑顔で自己紹介をする。

「……俺は藤堂陸、十四歳。よろしく」

つられて陸も笑顔が零れる。それは何の飾り気もない素顔の笑みだった。

「あ、やつと、本当に笑ってくれた」

「そ、そうかな。言われると照れるなあ」

微かに頬を赤らめて陸は頭を掻くが、リラックスしたのか今度は腹が痛くなり始めた。そして、一連の騒動で忘れていた、自分がこの図書館へ訪れた目的を思い出す。

「ごめん、便所ってどこかな。腹痛くなってきた……」

女の子に便所の場所を聞くなど、恥辱の極みである。それでも、親切丁寧に教えてくれたちか子に礼を言い、陸は情けない気持ちで一杯になりながらも、急いでトイレへ駆け込んでいった。

数分後。用を済ませてスッキリした顔でトイレから出てきた陸は、図書館のある一各区に目がいった。

そこは郷土史や昔話など、この町に由来のある出来事を取り上げた本を集めたコーナーで、その内の何冊かが、表紙を表にして棚に飾られている。

陸が興味を持ったのは町の昔話を集めた本で、小学生向けらしく

イラストがふんだんに盛り込まれており、内容も分かりやすく簡潔に纏められていた。

その本を手にとった理由は、表紙に書いてある文字を読んだからだ。

「猫合戦……」

この町で、今起きている化け猫事件に関係があるのだろうか。気になって中身を読もうとしたとき、ちか子が陸の側にやってきた。

「どうしたの、藤堂君。これ昔話の本よね。こういうのに興味があるんだ」

「あ、うん。まあね」

曖昧な返事をする陸だが、それとは反対にちか子は熱のこもった言葉を返してくる。

「私も古典とか昔話とか大好きなの。小さい頃よくお祖母ちゃんに読んでもらったんだ。今は、図書館から借りている源氏物語を読んでいる途中なの。昨日、やっと中巻まで読み終えて、今日は下巻を借りてくの」

陸が自分と同じ趣向を持っているのが余程嬉しかったのだろうか、ちか子は一方的に話し続けている。

一方の陸は、少々面食らっていたが、源氏物語の名前を聞いて、思わず相手には気づかれない軽い苦笑いを浮かべてしまう。

「俺の持っている得物も源氏物語と関係があるんだよな」

小さな声で呟く。

虎人達が得物として使う武器は、全て山月村で作られる。

山月の刀匠達が腕を振るい作り上げた武器は、人間が作った品と比べて遙かに丈夫で、滅多に刃こぼれしない強度を誇っている。そんな刀匠達の中でも、名匠と称される達人が鍛えた銘入りの業物を手に入れるのが、虎人達のステータスであるのだが、陸達三人の持つ得物が当にそれであった。

銘入りの武具には刀匠の銘以外に、その作品自体にも銘が入る。

鍛えた刀匠によって名付け方に様々な特徴があり、三人の得物は同じ刀匠の作だが、全て源氏物語の巻の名前から取られていた。

陸の持つ刃渡り二尺の打刀が『若紫』、それより長い二尺三寸ある大信の刀は『夕顔』、そして前出した二振りの中間に位置する長さの刀、『夢浮橋』が千里の得物である。

優美な男女の恋物語を描いた源氏物語の名を、戦の道具である刀に付けるとは、何たる皮肉であろうか。

陸の苦笑いには、そんな意味があった。

ぐぐぎゅ。

いきなり腹から空腹を知らせる音が響いて、陸は気恥ずかしさに顔を真っ赤にした。

ちか子もその音で我に帰る。

「御免なさい、お腹空かせてるのも知らないで、私ばかり一方的に喋り倒しちゃって。嬉しくなって、つい」

「別にいいよ、どうせ食べ物買うお金もないし。でも、昔話とか本当に好きなんだね」

「うん。実はね、私の昔話好きってのは藤堂君が持つてる本にちょっと関係してるんだ。この本に『猫合戦』て話載ってるんだけど、話の中に出てくる登場人物が、私のご先祖様らしいの。これってちょっととした自慢、凄いでしょ」

少し誇らしげにちか子は本を指さして、表紙に載っている『猫合戦』の文字をなぞる。そして、感心しながら頷く陸の姿を見て、嬉しそうな表情を作った。だが、すぐに、すまなそうな表情に変わる。「私、これから自分の勉強に戻らないといけないの。ノートとか出しっぱなしだから、もうそろそろ行かないと。藤堂君はまだ暫くここにいるの?」

「え! あ、うん。多分……」

「それじゃ、また会えるかもね。あ、それと……」

ちか子は財布から五百円玉を取り出すと、陸の掌に乗せて手を握

らせた。

「これで何か買って食べてね」

「いや、それは悪いよ。さっきジュースも買ったのに」

陸は慌てて返そうとする。中学生の五百円はその年齢で貰えるお小遣いから換算すると、社会人の同じ金額に比べて、遙かに価値が高い。そんな価値のあるお金を、貰うわけにはいかない。しかも出会って、それ程時間も経ってない初対面の人間から。

しかし、ちか子は意に介した様子もなく、差し出された掌を優しく返した。

「言っただでしょう、困ったときはお互い様だつて。もし藤堂君の気が済まないなら、また会った時に返してくれればいいよ。じゃあ、行くね」

ニツコリ微笑むと、ちか子は名残惜しそうに小さく手を振って閲覧室へ続く階段を昇っていった。

残された陸は、うわずった溜息をつくと、本を持って先程座っていたソファアーへ向かって行った。渡された硬貨から、まだ微かに残っている彼女の温もりが伝わってくる。

他人からあからさまに好意を寄せられるという体験は、陸にとって初めてだった。大体、奇異の目で見られ、馬鹿にされるのが殆どだ。

『また会えるかもね』

別れ際に言われたちか子の言葉が、頭の中で何度もリフレインする。夢心地気分のままソファアーの前へたどり着くと、ゆっくり腰を下ろしページを開いて『猫合戦』の話を探し始めた。

臯月中旬　土曜日　午後　『時には昔の話を』

篝火に照らされ暗闇が朱色に染まり、お堂の前では数人の影が見て取れる。

その中に愛おしいあの人の姿もあつた。
そして見たことがない人物もいる。

なぜ、坊主がここにいいのか。嫌な予感がしたが、今は目の前にいる奴を相手にしなければならぬ。

「どうした、又佐。ここまで来て恐れをなしたか。それもしようがない、元々お前と儂では力の差がありすぎる。どうだ、大人しく身を引けば見逃してやつてもよいぞ」

「力の差？　それがどうしたと言うのだ。我の心は、とうに決まっている。貴様みたいに貪欲な輩の下へ、我の愛しき人を渡すわけにはいかん」

「は、愛しき人か。化け物が人に劣情を抱くとは、見下げた奴よ。所詮、人は儂らの餌。家畜に情が移ったか」

「横恋慕して、かすめ取ろうとする貴様の言うことか。どうせ、他者が持つている物が欲しくなる悪い癖が出たのであるう、小源太！　奴を倒せば、晴れてあの人を嫁に迎えられる。彼女の父親がそう約束してくれたのだ。だから、何としてもこの勝負勝たねばならぬ。牙を剥き、爪を立て向かっていく。」

その後のことは憶えていない。いや、思い出したくない。

カラスの鋭い鳴き声で、又佐は目を覚ました。

窓から入る日差しは、午後特有の濃い黄色の色彩を帯びており、部屋の中を照らしている。自分は、どれだけ寝ていたのだらう。思い出してみたが餌を平らげて床に入ったまでは記憶にあるものの、後はサッパリ憶えていない。

今、又佐がいる部屋はガランとして他に誰もいない。ただ、壁に

掛けられた時計の秒針が、規則正しい音を鳴らしているだけだった。自分を助けてくれた部屋の主、ちか子は出かけて不在であり、少し開いている扉の隙間からは何も聞こえない。おそらく、この家には誰もいないのであろう。又佐はそう判断した。

（しかし、よく似ていた）

恩人であるちか子の顔を思い出す度に、又佐は脳裏に浮かぶ愛しき人の面影を重ねていた。

「よう、久しいな又佐。随分派手にやってくれてたみたいだが、その様子だとツケを払われたか。けけ、ざまあねえな」

想いに浸っていた又佐は、突然声をかけられてド肝を抜かれた。自分以外に誰もいないと思いこんでいたので、不意打ちをかけられた気分である。

扉の隙間が開き、悪態を付きながら声の主が姿を現す。出てきたのは、今の又佐より一回りほど体の大きい黒猫だった。

「小源太、貴様何故ココに、いや、生きてイタの力」

「はあ？ 儂を誰だと思っている。お前と違って、とうの昔にあの忌々しい穴蔵から抜け出しておったわ。それより、お前こそ何故ここにいる？ それともここが何処だか分かってやって来たのか」

「？ それ八どういウ意味ダ」

小源太と呼んだ黒猫の問いかけに、又佐は怪訝そうな表情を浮かべる。

「何だ、知っててこの家に来たわけではないのか。まあいい。それより最後に会ったのは、確かお堂の前で決闘をした時か。ったく、見事にあの女の口車に乗せられ、とんだ間抜けだったよな、儂らも」
小源太は自嘲気味な笑い声を上げるが、又佐は何も言わずに押し黙っている。

努めて冷静な又佐の姿が、気取ったふうに見えたのか、小源太は機嫌を悪くしてフンと鼻を鳴らすものの、すぐさま意地の悪い笑みを浮かべる。

「そつだ、お前にいいことを教えてやろう。儂とお前の一件だがな、

一部始終、この町の昔話として今も残っているそうだと。つまり、僕たちが見事にやられる様子を、面白可笑しく粉飾して物笑いの種にしていたわけだ。どうだ傑作だろ、ぎゃははははは」

又佐は黙ったままだったが、目は驚愕で見開かれており、信じられないという顔をしていた。

今度は満足した笑顔で小源太は又佐を見やると、軽く跳躍しベツトの上へ登る。布団に着地すると同時に、くぐもった足音が聞こえる。

「これから僕が有り難く講釈してやる。お前は、そこで大人しく聴いてな」

今、この場の主導権を握っているのは、小源太である。その状況は又佐にとって不愉快極まりないものだったが、逆らっても無駄だと思い、静かに小源太の講釈に耳を傾けることにした。

（それに人間共の昔語りがどれほど真実を伝えているか気にもなるしな）

優越感に酔った小源太が、語り始める。

それは昔のお話。

その頃、図書館にいた陸も、物語の出だしの部分を小さな声に出して読んでいた。

「むかしむかし」

『猫合戦』

むかしむかし 村はずれの山の中に小源太と又佐という二匹の化け猫が住んでいたそうなの。

白い毛皮の又佐は狡賢く、黒い毛皮の小源太は凶暴な化け猫で、いつも二匹で麓に現れては、悪さばかりして、村人を大層困らせておった。

『白い毛皮ではなく白地に斑なのだが、まあいい。あの頃は、小源太の言いなりになって動いていたな。面白半分に田畑を荒らしたり、家畜を食い殺したり、通りがかった旅人を襲ったこともあった。小源太に顎で使われてたのは癪だったが、それでも人間が慌てふためく様は見えていて面白かったし、事を起こした直後に猫の姿に化けて村へ行けば、我らのことで話が持ちきりで、優越感に浸れて快感だった』

さて、この村の庄屋にお悠という名の一人娘がおった。この娘、知恵がよくまわり、手習いごとにも上手にこなし、おまけに器量も良いとあって、周囲の村にも評判が伝わるほどであった。

無論、父親も娘を目の中に入れても痛くない程可愛がっており、常日頃から婿を迎えるなら天下一の者をと、強く決めておったそう
な。

『猫に化けて村を歩いていると、よくあの人の噂が耳に入った。興味半分で庄屋の屋敷へ見に行ったが、確かにあの人は美しかった。今思えば、最初に会った瞬間、我はあの人の虜になったかもしれない。それから我は、足繁くあの人の下へ通った。あの人は本を読むのが好きで、よく年老いた祖母に読んで聞かせていたな。それに絵や和歌も嗜んでいた。あんな田舎の村へ置いておくには、勿体ない人だったよ』

ある時、娘の噂を聞きつけた小源太と又佐が庄屋の屋敷に現れ、お悠を自分の嫁にくれなしかと庄屋に申し出てきた。

又佐が言うに

「もし娘を我の嫁にもらえれば、我はこの家の守り神となって、子々孫々まで栄えることを約束してやろう」

と迫り、一方の小源太は

「もし娘を儂の嫁にしなければ、儂は怨霊となって、この家を末代

まで呪い崇つてやるぞ」

と脅しをかけてきおった。

困り果てた庄屋は、

「大事な一人娘のなので、すぐにどちらを婿に決めることはできません。どうか今暫くお待ち下さい」

と一旦引き取ってもらうように申し出た。すると二匹は、次の日の夜に返事を聞きに来ると言い残し去っていった。

『は、その前にあの人の婚礼話が抜けておろう。全く、人間共は都合の良い方へ話を変えておる。それにしても、まさか小源太までが、あの人に興味を示すとは思わなかったな。物欲の強い小源太のこと故に何時か気づくと思っていたが、我があの人を手に入れようと決心した同じ日に、奴もあの人へ手を出そうとしていたとはな。もし、それがなければ、あれ程事を性急には運ばなかったぞ』

その夜、化け猫どもの申し出に、どうしたらよいか思い悩んでいた庄屋の屋敷へ、旅の僧侶が訪ねて来た。

「この村で化け猫が悪さをしでかしていると聞き、京の都からやって来たのですが、どうやらお困りの御様子。宜しければお話を聞かせ下さい」

渡りに船とばかりに、庄屋は今まで起きた全てのことを包み隠さず話したそうな。

話を聞いて僧侶は頷くと、

「あい、全て分かり申した。ここは拙僧に良い策があります。まずは娘さんをこちらに」

そう言ってお悠を呼んだ。

呼ばれてきたお悠に、僧侶は耳打ちをすると万事ぬかりなくやるようにと言い含めた。

次の日の夜、約束通り姿を現した小源太と又佐は、娘の婿をどちらにするのか庄屋に問い詰めおった。

すると庄屋は、

「常日頃から、娘には天下一の婿と願っておりまして。見ればお二方とも天下に名だたる強者。そこで、お二方に勝負をしてもらい、勝った方を娘の婿に迎え入れたいと思っております」

と申し出た。

するとお悠も、

「私も強いお方を、婿様としてお迎えしとございます」と頭を下げる。

その気になった小源太と又佐は、お互い承知したと頷いた。

「では、娘の婿殿を決める大切な勝負事。故に神様の前で執り行いと思います。どうぞこちらへ」

庄屋に連れられて村の外れにある神社に行くと、お堂の前に先程の僧侶が立っておった。

「拙僧は、この勝負の検分役を頼まれた者。二匹とも、神と御仏が見ておらっしゃる、正々堂々と勝負するがよい。では、猫合戦、はじめい」

僧侶の合図と共に、小源太と又佐は、お互い凄まじい雄叫びをあげて向かっていった。

『あの糞坊主の入れ知恵があつたとは言え、我と小源太は上手く乗せられたわけだ。我は、あの人の言葉を疑う気持ちは全くなかった。だから、我よりも遙かに力の強い小源太に戦いを挑んだのだ。この勝負に勝てば、晴れてあの人と結ばれる。あの時の我は、その事で頭が一杯だったから、何故、見知らぬ僧侶が立ち会い人としてお堂の前で待っていたのか、端から疑問に思わなかった。全て我らを陥れる罠だったのだ』

小源太と又佐はお互い退くことなく、五分と五分の勝負を繰り広げておった。

時には噛みつきあい、時には離れて間合いを取り、全く勝負が着

く気配はなかった。数刻の時が過ぎ夜が明け始め東の空が明るくなつた頃、とうとう二匹は決着を着けるべくお互いの体を激しくぶつけ合った。

ドシン、と岩を打ち据えるような音が響くと、二匹は倒れて小さな猫になつてしもうた。

「今じゃ、皆の衆掛かつてくだされ」

僧侶の合図で、今まで藪の中に潜み待ちかまえていた村人がどつと押し寄せると、あらかじめ掘っておいた穴に共倒れとなつた二匹を投げ込み、土を被して埋めてしまった。その上に僧侶は、大きな石を置くと皆にこう言つた。

「これからは化け猫共が村を祟らぬよう、この上に祠を建て祀るがよいぞ。さすれば二度と化け猫共が、この村に悪さをする事もなくかるうて」

『我が、あそこまで小源太とやり合えたのも、偏にあの人への想いがあつたからこそ。だが、その想いを逆手に取られたとは、皮肉なことよ。むこうは共倒れと勘違いしておつたが、我はまだ生きていた。だが、体を動かさうにも尻尾すら動かず、あの人に裏切られた憎しみで心が張り裂けそうだったのを、よく憶えている。あの腐れ坊主、ご丁寧にも我が外へ出られぬように、結界を張っていきよつた。身動きできぬ我に出来ることは、地の精気を喰らつて生きながらえ、少しずつ力を溜めるだけだった。しかし、未だにあの人への思慕は消えぬ。不思議なものだ。憎くて憎くて仕方がなかつたはずなのに。今思うと小源太との血戦時、あの人はずっと我だけを見ていた気がする。真夜中から日が昇るまでの長い間、あの方は身動きもせず、ただずっと我と小源太の勝負を見ていた。あの食い入るような眼差し。未だ忘れることが出来ぬ』

「その後、村人から大変感謝された僧侶は都へ戻つてゆき、お悠は良い婿殿を迎えて幸せに暮らしましたとき。とつてんぱらりのぷう」

陸は『猫合戦』の最後の部分を読み終えると、本を閉じて考え始めた。

（この話に出てくる又佐って、もしかしくても昨日倒しそこなつたあの化け猫のことだよな。だったら、もう一匹の小源太はどうしているんだろう。まだ埋まっているのかな、それともそのまま死んじゃったとか。もしかして、又佐みたいに町の中に潜んでいるかも）しかし、小源太の存在を証明する手がかりは、見つかっていない。背伸びをしてソファの背もたれに体を預けると、図書館の壁に掛かっている時計が目に入る。見れば、かなりいい時間だ。

「やべっ、このままだと夕方になっちゃうよ」

慌てて脇に置いてあった自分の得物『若紫』を手に取ると、立ち上がって図書館の出入り口へ小走りに向かつていく。本を元の場所へ戻して、自動ドアの前へ立った時、陸はちか子の姿を思い出した。（このドアを抜けたらもう二度とあの子には会えないんだ）

優しくしてくれたちか子の面影が脳裏にチラつき、後ろ髪を引かれる。しかし、陸は使命に燃える男だ。それに今は何より、化け猫又佐を発見するのが先決。だが陸の心は揺れる。

（話しに出てるって言うってた、あの子のご先祖って誰だったんだろう。猫を封じ込めた、お坊さんかな。それとも……）

そこで、はっと気づいた。

昨日、昼飯を食った中華料理屋の店主が話していた『先祖が庄屋で代々金持ちの和田さん』。あの昔話に出ていた庄屋とその娘お悠が、彼女の先祖だったのだ。

妙な話だが、陸とちか子は『化け猫』という単語で繋がっていたのだ。

図書館の中に彼女はまだいるだろう。しかし、行かなければならない。何度も何度も来た道を振り返りながら、陸は自分が成すべき事を成すために、任務へ戻っていった。

一方、和田邸のちか子の部屋では、講釈を終えて満足した小源太と複雑な表情の又佐が、お互い向かい合っていた。

「この村、いや今は町か。まあともかく、信仰心の薄い住人ばかりで助かったぜ。お陰で儂たちは、此処にいられるのだからなあ。それでも弱くなつた結界から抜け出すのは、骨が折れたぜ。出たはいが、力を殆ど使い果たし、ボロボロになつちまつたしよあ」

「それデこの家に拾われタと」

その言葉に小源太は目を釣り上げて驚きの表情を作る。

「ご明察。よく分かつたな」

「我を助けテクレた娘が言つておつタ。『余り物だけどうぞ』トな」

別段面白くもなさそうに、又佐は答えた。

「だから、コノ家にはもう一匹猫ガイると推測したのダ。まさ力貴様だとは思わナカつたが」

「それだけじゃないんだがなあ」

先程に続き、意味ありげな言葉をかける小源太の態度が癪に触つたのか、又佐は箱の中からベットの土上へ一足で飛び移ると、目の前にいる黒猫に詰め寄つた。

「小源太！ 貴様ハ、先程から奥歯二物が挟んだ言い回しが多いゾ。一体、何を隠しているル」

「別に隠しぢゃいねえさ」

ならば話して貰おう、と息巻く又佐に、まずは落ち着けと小源太が宥める。

「何から話そうか。そうそう最初に聞きたがつたのは、お前が意識してこの家へやって来たのではないかと、儂が勘ぐつたことだな」

それは、又佐が問い詰めようとして、軽くかわされた話題だった。「この家はなあ、儂らを謀つたあの女の末裔どもが、住んでおるのだよ。昔、お前が足繁く通つた庄屋の家、それがここだ。そして、お前を助けた娘、ちか子と言うが、そいつもあの女の子孫さ。ま、大方、気づいぢゃいると思うが」

全て合点がいった。

又佐は、何故自分が無意識にこの家へやって来たのか、何故自分を助けくれた娘が、愛しきあの人と瓜二つなのか、理解できた。

「儂がこの家へやって来たのは、本当に偶然だった。暫くは、この家の連中が憎き庄屋の子孫だとは、思いもよらなかったさ」

「どうやって知った」

又佐の問いかけに、小源太は一瞬黒い眉間に皺をよせて、しかも面で言い放った。

「階段を降りた先に茶の間がある。その床の間に飾ってある掛け軸を見ればいい。お前なら、一発で分かるはずだ。この家が、あの忌々しい女と関係があるってな」

更に今度は、嫌な笑みを浮かべる。

「だから儂は決めた。この家の人間を全て呪い、全て殺し尽くすと」長い間、暗く冷たい土の中へ閉じこめられた恨みと憎しみが噴出したのか、小源太の双眸が金色に輝き、本来持つ凶暴な性が丸出しとなる。

一歩前に出て又佐に近づくと、黒い毛を逆立てて睨み据えた。

「又佐、協力しろとは言わんが邪魔はするなよ。お前が好いた女の家系とは言え、あの女が此処に居るわけではない。だから、義理立てする必要もあるまい。賢いお前なら、儂の言っている意味が分かるなあ」

あからさまに恫喝しているが、悔しいかな、それに反抗する理由も力も又佐にはなかった。

意気消沈し、大人しくなった又佐を後目に、小源太はベットから飛び降りると、足音も立てずドアへ歩いていく。

「……いい頃合いだな。儂は今からちいと用がある。ぐふふ、今日は満月だ。綺麗な月を見ながら喰らう血と肉は格別に美味かろう」下卑た笑いを残し去っていこうとする黒猫を、又佐は慌てて呼び止めた。

「待て、もう一つアツたはずだ」

「ああ、それが……」

面倒くさそうに振り向くと、小源太の体が歪み形を変えてゆく。見る見る人間大の大きさに膨らむと、そこには見知らぬ人間が立っていた。

それを見て又佐は凍りついた。

「貴様、変化が出来るマデ力を回復させたか」

「まあ、そう言うことだ。分かっただろう、現時点での儂とお前の決定的な力の差が。では、儂は行くぞ」

遙か頭上から発する声は、先程の気味悪いだみ声から、上品で澄んだものへ変わっていた。

人型を採った小源太は、そのまま部屋を出ていくと、階下へ降りていく。暫くして玄関の扉が開き、閉まる音が、誰もいない屋内に響いた。

一羽の大きなカラスが、電信柱止まっている。

「八太、そこにおるのだろう」

電信柱の下から呼ばれて、カラスは一段低い隣のブロック塀へ降り立つ。

「これはこれは御大将、何かご用でも」

甲高い声で人の言葉を話すこのカラスは、勿論、普通のカラスではない。齢五十を越えた立派な化けガラスだ。人語を解すカラスが普通な訳がない。

「お前、窓の外から儂と又佐の会話を、一部始終聞いておっただろう」

どこか皮肉めいた響きで、声の主は八太へ問いたです。

「いや、その、悪気があったわけじゃないんですよ。ただ何を話しているのか、ちよいと気になったもんで。すみません謝ります、この通り」

卑屈に何度も頭を下げる化けガラスに、声の主はうんざりしたのか、掌を八太の面前にかざして止めるようにジェスチャーで示す。

「それなら話は早い。お前はこれから、又佐の奴を見張っている。脅しはかけたが、気が変わって何時こちらに牙を立ててくるか分からんからなあ。もし、何かあったら構わず殺せ、いいな」

「はい、分かりました。御大将」

勢い良く返事をする、八太は羽を広げて飛び立とうとしたが、急に何かを思いだして動きを止めた。

「御大将に一つ御忠告を。どうも朝っぱらから見知らぬ連中が、周辺を嗅ぎまわってるみたいで。一応、用心して下さい」

「それなら心配はいらん。そいつらは、又佐を追って来た連中だ。捨てておけ」

「まあ、御大将が、そう言われるのなら。それでは、私や行きますね」

飛んでいくカラスの後ろ姿を見送ると、影は町中へ向けて歩いて行った。

寢床にうずくまり、暫し呆然としていた又佐であったが、小源太との会話の中で出てきた掛け軸が気になり、見に行くことにした。

寢床から抜け出し、一階へ向かう。階段を降りる度に傷が疼くが、痛みはそれ程感じられず、昨晚に比べ体力が回復しているのを実感した。

綺麗に磨かれた廊下を音もなく歩いていくと、開いた襖から床の間と掛け軸らしきものが、遠目から見て取れる。

又佐は辺りを警戒しながら茶の間へ入って、掛け軸の前で立ち止まった。

いや、止まらずを得なかったのだ。

「こ、これはまさか……」

時が経ち、掠れてはいたが、そこには白地に石地の斑をつけた猫の絵が見事に描かれている。そして描かれている猫は、正しく又佐であった。斑の模様、位置が全く同じだったからだ。

掛け軸の中の猫は、穏やかな顔で又佐を座視していた。

「……文字が書いてアル。何と読むの力」
絵のすぐ上には、達筆な文字で書が書かれている。文字の区切り方から和歌であると判断できるが、読みとるのは、掛け軸の紙自体が茶色く変色しているの、かなり困難な作業だった。しかし、又佐は、持てる知識をフル動員して解読していく。

中天に かかる月みて 偲ぶのは
光の君の 後ろ姿か

歌を読み終えて、又佐は泣いていた。

涙は流れなかったが、心は感動と至福の涙で溢れていた。

この歌は、間違いなく又佐を詠んだ歌である。

「あの人は憶えてくれていたのだ。我と月ヲ見た日のことを、我を光の君ト呼んでくれたことも。書ト絵にしたため、想い出を残してくれタ。あア、今の我にこれ以上ノ幸福を求めることは出来ヌ」

又佐は決心した。

身をもつて、あの人の末裔を小源太の魔の手から救うことを。それに、ちか子には直接助けてくれた恩もある。

しかし、現状では小源太を止める力は、又佐にはなかった。力の回復を待ってからでは遅い。それに、あの口振りから、今日中にも家中の誰かを牙に掛けるのは間違いない。

又佐は、感慨深げにもう一度掛け軸を見やると、きびすを返し外へ出ていった。

景色は夕暮れの装いに変わっており、昼中より僅かに冷たくなった外気が、又佐の体を覆う。

おそらく小源太は、この瞬間も着々と自らの計画を実行に移しているだろう。早くしなければ時間がない。空飛ぶ燕のごとく道を駆け抜けながら又佐は考え、思い至った。

今の自分に出来る、最善の手だては何か。

皋月中旬 土曜日 夕刻 『取り引き 駆け引き』

日が西に傾き赤みを帯び始め、子供達は家路へと急ぐ。商店街では、夕飯の献立に頭を悩ませながら、主婦が買い物に勤しんでいる。そんな日常の風景の中、どこか憔悴しきった二人組が、言葉少なに歩いていた。

「……見つからねえな、猫」

「……」

「化け猫の臭いすりやねえってのは、どうだよ」

「……」

「おい、何か言えってんだ」

「……」

何を言っても反応しない千里の態度に爆発寸前だったが、思えば彼がずっと黙ったままなのは、かなり不機嫌な証拠なので、無駄な衝突を避けて大信はグツと怒りをこらえた。

面白くなさそうに辺りを見渡していると、いきなり大信は立ち止まって、獲物を狙う肉食獣の如く、ある一点へジツと目を凝らしていた。

そんな彼の態度を、不思議そうに千里は窺う。

「どうした、急に立ち止まって」

しかし、千里の言葉は大信の耳には届かなかったらしい。ただひたすら遠くを凝視している。そして一言、

「背の君だ！」

と普段より1オクターブ高い声を上げ、全力疾走で駆けていった。訳の分からない大信の行動に呆気にとられたのか、千里はただ果然と裏通りへ消えていく後ろ姿を、見送るしかなかった。

ちか子は、図書館で出会った蜂蜜色の瞳を持った少年の事を思い返ししながら、家路へと急いでいた。通りを抜け、歩きながら彼の笑

顔を思い出す。

ちか子が図書館を後にする頃には、姿を消していたあの少年。また、どこかで会えればいいかと、仄かな想いに期待を寄せていた彼女が、猛然とこちらへ突っ込んでくる人影に気が付かなかったのは、致し方ないだろう。

そして、気づいたときには両手をガツチリ握られていた。

「いやあ、こんな所で会おうとは奇遇だなあ。もしかしたら、運命の神様が、俺達を引き合わせてくれたのかも」

癖のある黒髪を揺らし、ガクランを身に纏った少年が、瞳と前歯を輝かせとっておきの笑顔で話しかけてきた。

一方のちか子は、自分の身に何が起きたのか全く理解出来ず、ただただ、突然の事態に目を白黒させているだけだった。

「ちよ、ちよっと、何をするんですか。離してくださいさあ」

無理矢理手を解こうとするが、見た目以上に強い力で握られているらしく、全然ビクともしない。

そんなちか子の態度も全くお構いなしで、少年は興奮した目つきで喋り続ける。

「可愛いなあ。名前は何て言うの。俺の名前は有田大信、ピッチピチの十四歳だぜえ。ねえ、今から駅前の喫茶店で、お茶でも飲んでいかない？」

絶好調で話し倒す大信。ちよっと照れくさそうにはにかんでいた陸とは、まるつきり正反対だ。

そんな大信相手に、ちか子はすぐにでも手を解いて逃げ出したい気持ちで一杯だったが、

「それとき、俺と交尾しない」

脈絡もなく出てきたその言葉に、頭の中は真っ白になって動きが止まってしまう。

（交尾、交尾、交尾って何だっけ。ああ、春先になると猫がよくやってたわよね。確か雄が雌の上へ乗って……）

言葉が意味するところを理解した途端、顔から火がでて体の力が

抜けそうになった。思い切って声を上げようにも、緊張でなかなか声が出ない。

（誰か助けて）

内心の悲痛な叫びが届いたのか、幸運にもちか子に救いの手が差し伸べられた。

「何やってんだ、このセクハラ小僧！」

大信の背後からスーツを着た青年が現れ、振り上げた踵を容赦なくその頭上へたたき落とした。

見事に決まった踵落としてセクハラ小僧はもんどり打ってアスファルトの上へ倒れる。革靴を履いた踵をまともに喰らえばいくら頑丈な虎人とは言え、かなり痛いに違いない。しかも踵落としをくれた相手は、同胞である。もし大信が普通の人間だったら即葬儀所送りであろう。

「朱鷺野さん、どうしてここに」

息を切らしてようやく追いついた千里に、朱鷺野は地面に這い蹲っている馬鹿を踏みつけながら答えた。

「ようやく喫茶店での打ち合わせが終わって、たまたまここを通りがかったら、この色ボケ小僧がセクハラ紛いの行為をやってやがった。おい、千里。こういう馬鹿には、首に縄を付けて見張っておけ。我らの恥だ！」

何度も何度も足下を踏みつけていた朱鷺野だったが、ちか子の存在を思い出して、すぐに営業スマイルで優しく声をかける。

「すみません、お嬢さん。不快な思いをさせてしまつて。この馬鹿には、後で十分言い聞かせておきますから。お怪我とか大丈夫ですか」

どんな女性でも百発百中で落とせる爽やかな笑顔。

千里は心の中でナイスフォローと指を立てる。だが、余計なつつこみが横から入った。

「けっ、生えぎわ気にして前髪おろしてるおっさんが、何カッコつけてやる」

再び鈍い音がして大信は沈黙した。

見れば朱鷺野の右足が彼の後頭部へ踏みつけられ、顔が地面にめり込んでいる。

（鼻の骨が折れたかもしれないな。でもすぐ治るからまあいいか）
取りあえず眼前で繰り広げられた暴力的どつき漫才は見えない振りをし、千里も頭を下げて同僚の不始末を謝る。

「どうもすみません。こいつ馬鹿なんで」

身も蓋もない言葉だった。

放心状態だったちか子もようやく立ち直り、彼らの謝罪を素直に受け入れた。

「いえ、もういいです。それでは私、先を急いでますんで」

そう言い残すと、軽く会釈をし、足早にこの場所を後にした。

可憐な花が去り、人気のない裏通りは静かになった。夕暮れの風が道ばたの雑草を静かに揺らしている。

「さて、その様子だと化け猫は、まだ見つかっていないみたいだな」

右手に抱えていた風呂敷包みを持ち直すと、数刻間を置いて朱鷺野が口を開いた。端正な顔が夕日に照らされて眩しそうに目を細めているが、その表情が却って千里に無言のプレッシャーを与える。

「その、自分でもどうして良いのか分からなくて。おそらく屋内に隠れているとは推測できるんですが……」

小さな町だとは言え、今日中に全ての家屋を調べるのはこの人数では無理だ。せめて臭いが残っていれば何とかなっただかもしれないが、屋内に身を潜ませている以上、臭いを辿るのは難しい。

八方塞がりですんでしまう千里。遠くから聞こえる町の喧噪がバツクミュージックとなって辺りに響いている。

だが、そんな緊張した雰囲気をぶち壊す、妙な鼻息が聞こえてきた。

いつの間にやら復活した大信が地面にあぐらをかき、恍惚の表情で自分の掌の臭いを嗅いでいたのだ。両手を鼻に被せて嗅いでいる姿はかなり変態くさい。

「ああ、いいなあ。これが女の子の匂い。花の香りみたいに仄かに甘くて、心臓がバクバクいっちゃうね」

「人が真剣な話をしている最中に、何をやってるのかな、お前は」
朱鷺野が大信の背中を足蹴にするが、本人は全く動じる様子はない。それどころか、更に鼻息を荒くして手に残った移り香を嗅ぎ分けていく。

あまりの馬鹿さ加減に、冷たい視線を送る朱鷺野と千里。

だが、急に大信の顔つきが真剣味を帯びた表情へ変化したのに気づき、声をかけた。

「……どうした大信」

「あの子の匂いの中に陸の匂いが混じっている」

予想外の返答だった。

「陸の匂い？ それじゃあの子は何処かで陸と接したってことか」

千里が驚いて尋ねるが、

「そんなのはどうでもいい」

と切って捨て、大信は更に厳しい顔をする。

「もっと重要なのはこれからだ。もう一つ嗅ぎ憶えのある臭いが、化け猫野郎の臭いがしやがる。手に臭いが残つてるところから、おそらく触ったり抱いたりしたんだろ。化け猫はあの子の家に居る可能性が高いぜ」

ようやく見つけた手がかり。だが、鍵となるちか子は既に姿を消してしまった後だ。

「どうします。三人別れて彼女の後を追いますか。それとも『飛燕符』を使って空から捜しますか」

やっと化け猫を追いつめられる、嬉しさに息巻いて指示を仰ぐ千里。

だが、そんな彼を朱鷺野は制する。

「いや、その必要はなさそうだ」

そう呟いた彼の目線の先には、一匹の猫が歩いていた。

「ようやく見つけたぞ、ガキ共」

それは又佐であつた。

「んだあ、てめえは。逃げ切れないと観念して出てきたんかあ」

「下っ端は黙つてい口。我はその男に用がある」

追い詰められた者の焦りもなく、悠然と自分たちの前へ姿を現した又佐に、大信はがなり立てるが、猫はそのまま無視して朱鷺野の前に出る。

（化け猫でも上下関係は把握できるもんだな）

朱鷺野は胸中で感心していた。

「落ち着け馬鹿。どうやら大人しく狩られに來たわけじゃなさそうだな。何の用件だ」

「貴様ら二依頼を申し込ム」

化け猫からの依頼。余りにも予想外の発言に三人の時間は止まつてしまった。そして、

「ふつざけんじゃねえぞ。このクソ猫」！

一番最初に大信が行動を開始する。

すぐさま片膝を付き、竹刀袋から自分の得物である『夕顔』を取り出すと、鯉口を切つて刀身を抜こうとする。

「待て、大信。取りあえず話だけは聞こう。受けるか受けないかはその後で決める」

だが、朱鷺野に制止されて手を止める。納得できない大信は、口を開いて文句を言おうとしたが、朱鷺野の鋭い眼光に気圧され、洪々刀を鞘に収めて地べたに腰を降ろした。

「それにしても、俺達が依頼を受けて動いているとよく分かったな」

「そこナ下っ端小僧ガ、我とやり合つていた時に『依頼だから』ト吠えておつタ」

それを聞き納得して朱鷺野は頷いた。

「では、依頼内容を話して貰おうか。又佐殿」

促されて又佐は語り出す。自分の過去の話、昨日逃げ出した後ちか子に助けられた経緯、そして小源太とのやり取りを。

「信じられないな」

「信じなくてもよい。だが全て事実だ」

不信任感を露わにした感想を述べる千里に対し、又佐は気にせず言い放つ。確かに昨日敵だった者の言い分を、素直に聞けるはずはない。

「けどよう、本当だとしたら、えれえ騒ぎになる。また事件が一つ増えるぞ」

「奴は喰らうだけではナク、家の者から少しずつ精気を吸い取って力を蓄えているはずだ。昨日の我より遙かに強いゾ。それだけは忘れるナ」

和田家の人間が最近病気がちなのは、小源太の仕業であつた。気づかぬうちに小源太に精気を吸い取られ、体調を崩していたのだ。

「で、報酬は何を払うつもりだ。化け猫の分際で金を持っているとは思えないしな。払う物がなければ依頼を受けることは出来ない」

朱鷺野の言い分はもつともである。報酬を払ってこそ契約は成り立つ。無償で働くほど、彼らはボランティア精神を持ち合わせてはいない。

彼らは契約によって行動する。契約さえ成立してしまえば赤子も平気で殺すし、町一つ壊滅もさせる。それが虎人達の冷酷な不文律である。日本へ渡って九百年近く、見知らぬ土地で生き残るために築き上げた掟、自らを律する鎖であつた。

「報酬は私の命で払おう。十分代価二値すると思うガ」

又佐は、何の抵抗もなく己の命を取引として提示した。

「なるほど。こちらが受けたもう一つの依頼は、お前を狩ることだからな。まあ、釣り合いはとれるか。よし、その依頼引き受けた」

「いいんですか、朱鷺野さん」

千里が抗議の声を上げるも、朱鷺野は聞く耳を持たない様子だ。

「どちらにしろ、もう一匹の化け猫を放置してくわけにもいかんだろう。マックイーンさんには後から俺が言っておく」

「話は纏まった？ んじゃ、とっと小源太猫さんのいる場所へ案内しろよ」

新しい相手と戦う機会が増えて嬉しいのか、軽くステップを踏んで大信は立ち上がった。

しかし、又佐は目を伏せて困ったふうに呟く。

「それが、何処へ行ったのか皆目見当がつかぬ」

それを聞いて、大信の頭がカクンと下がる。勢いを削がれ、拍子抜けしたみたいだ。

「どうします？」

無表情ながらも困った声で千里は尋ねた。

「取りあえず陸を呼び戻そう。千里、『飛燕符』を使え」

言われて、千里は懐から符を取り出し、天に掲げる。そして、気を溜めて発動の言葉を唱えようとした時、薄暗くなり始めた空に、燕の形をした影が自分たちの頭上を回っているのが見えた。

（あれは『飛燕符』で作った鳥形……）

嫌な予感がして心臓が大きく鳴り響く。

「朱鷺野さん、あれを見て下さい」

言われて一同は千里の指さす方向を見上げる。

すると、三人を確認した鳥形は、もう一度大きく旋回して風上の方角へ飛んでいった。

「あれは多分、陸が放った『飛燕符』の鳥形。一体何処へ行くつもりだ」

ここには千里、大信、朱鷺野と三人揃っている。そして、誰も符を使っていない。となると、今空を飛んでいる鳥形を放ったのは、ここにいない陸ということになる。

「あの方角ハ！」

同じく鳥形を眺めていた又佐は血相を変えて飛び出すと、鉄砲玉の様なスピードで後を追いかけていった。

突然の行動に大信が慌てて叫ぶ。

「てめえ、何処に行きやがる」

「私の推測が正しければ、あの鳥は小源太のいる場所へ導いてくれるはずだ。急げ」

それを聞いて、三人もすぐに走り出す。

「大信……」

「どうした、千里」

呼ばれて大信が顔を向けると、千里の表情は強張っていた。

「あれは恐らく助けを呼ぶ合図だ。陸が危ない」

又佐よりも強い小源太相手に、陸が何処まで持つか分からない。

「手遅れにならない方がいいが」

冷たい汗が千里の背中を伝っていく。

「わくってるよ。人がいない場所へ出たら、一気にスピードを上げる。早いところ行かないと、マズいだろ」

お互い顔を見合わせると大きく頷いた。大切な親友をみすみす失うわけにはいかない。二人の思いは一致していた。

だが、先を急ぐことに夢中になっていた一同は気づかなかった。

彼らの後を追うように飛んでいる大きなカラスの影を。

朱鷺野達三人が又佐と顔を合わせていた頃から、時間は幾分遡る。単独行動で行っていた陸の化け猫探索は、全く成果を上げていなかった。

太陽は西に傾き焦燥感を募らせるばかりだったが、焦る気持ちとは裏腹に、時は刻一刻と過ぎていく。

「どうしよう。みんなと合流しようかな」

打つ手無しの状況。でも、三人よれば何とかなるだろうと思ったが、すぐに思い直した。

「駄目だ。自分の失敗は自分で償う。ここで諦めちゃ男が廃る」

それに大信から何と言われるか。辛口風味の大信のことだ、ここぞとばかりに罵詈雑言を浴びせてくるだろう。

それと陸は気になっていた。昔話に出ていたもう一匹の化け猫、小源太の存在を。もし又佐と同じくこの町に出ていたら、それこそ一大事である。

「せめて封じられた場所が分かれば、ちょっと確かめに行くんだけどなあ」

もう一度よく昔話を思い出してみる。決闘の場所となったお堂、封じた化け猫を祀った祠、単語は出てくるものの、それが何処にあるって、どんな形をしていたのか本に説明はなかった。

「お堂に祠、お堂に祠……。あれ？」

呪文の如く単語を繰り返していると、陸の脳裏にピンと閃いた。午前中に立ち寄った事件現場近くの古びたお堂。その隣に放置されていた残骸は、祠の形を取っていたはずだ。

（もしかしたらあそこかも）

確かめに行きたい衝動に駆られたが、まだ任務の途中である。しかし、思い悩んでこのまま探索を続けるより、ちょっとだけ時間を割いて疑問を解決した方が後顧の憂いもなくなるし、その後の探索

にも集中できる。

そう都合良く解釈して、一路お堂のある方角へ針路を取った。茜色の空が大地を大きく包み込んでいる。その中を陸は駆け抜けていった。

目的地は周囲を雑木林で囲まれており、木々の隙間からオレンジ色の西日が射し込んでいた。木漏れ日に照らされたお堂は、赤銅色に映し出される種の神々しさを醸し出している。

境内の広場に入った陸が天を仰ぐと、夜の帳へ向かう紺碧の空が目に入る。敷地内は相変わらず閑散としていて、人どころか猫の子一匹いなかった。時折、木々の隙間から夕暮れ時の風が吹き抜けて、枝葉を揺らす。

陸は、迷わずお堂横の残骸目指して突き進んだ。そこには午前中に見た時と何ら変わりなく、木片の残骸が散らばっている。一つ一つ注意深く手に取って観察するが、やはり壊された祠の断片にはか見えない。化け猫達が封印された場所の可能性が高かった。

「壊れたか壊されたか分からないけど、祠がなくなつて封印する力が弱くなつたんだ。そして、結界を破つて土の中から這い出てきた」残骸横の地面には土を掘った跡が残っており、おそらく化け猫は、そこから地上へ出てきたのだろう。今度は祠の残骸を慎重に退かす。すると下から先程と同じような地面の窪みが発見された。風雨に晒され幾分浅くなっているが、間違いなく穴が掘られた跡であった。

「……最悪だ」

結局、化け猫は二匹とも野に放たれていたのだ。

最も外れて欲しかった予想が見事に当たってしまい、陸は完全に困惑していた。

（どうする、朱鷺野さんに、この事態を報告するか）

今自分に出来ることは何か、頭を抱え散々思い悩んでいると、遠くから足音と話し声が聞こえてきた。声の大きさから、どうやらこちらに向かって歩いて来るみたいだ。

慌てて陸はお堂の裏手へ回り込んで姿を隠した。

どんな物好きな人物が、こんな寂れた場所へやって来たのか。少しだけ顔を覗かせて確認すると、品の良い老婆と見覚えのある少女の二人連れが現れた。

少女はちか子であった。

（あつ、図書館で会った子だ）

偶然の巡り合わせに感動して飛び出そうとするが、何故か体が動こうとしない。不思議に思った陸の脳裏にもう一つ疑問が浮かんだ。（どうしても、隠れる必要もないのにどうしてもして身を隠してしまったんだろう。別に、やましい事なんてしてないのに）

ただ、体が勝手に反応してしまったのだ。

（わからない。でも、何かヤバイ）

怖気が全身を襲い、気つけば体中鳥肌が立っていた。

そして、直後、自分が恐怖に囚われた意味を陸は知ることになる。

大信の魔の手から逃れたちか子は、家に帰る途中で偶然祖母と出会った。聞けばサスケを捜している最中だと言う。

「怪我をされていてねえ、捕まえようとしたんだけど逃げちゃったんだよ。ちか子も一緒に捜しておくれ」

普段なかなか家には戻らないサスケだが、家で飼っている以上可愛いペット、家族である。

喜んで承諾すると、祖母と共にサスケ捜索に乗り出した。

「ねえ、お祖母ちゃん。本当にこっちへ行ったの」

少し不安になって祖母に聞いてみる。

連れられて来た場所は、普段滅多に寄らないお堂の境内である。そこには古びたお堂があるだけで、周りを雑木林に囲まれて、昼中でも薄暗い。ちか子だけではなく他の人も殆ど立ち入らない場所である。

「それに隣の林の中って、確か殺人事件のあった所だよな」

さすがに日も暮れ始めているので、そんな場所には長く居たくは

ない。

「ここはね、猫の集会場なんだよ。だから、サスケが寄っていくのさ。大丈夫、居ないと分かったらすぐに移動するよ。私もあまりこんな所に長居はしたくないからねえ。それじゃあ悪いけど、ちか子はお堂の方を捜しといておくれ。私は雑木林を見てくるから」

祖母に促されて、仕方なくちか子はお堂へ足を向ける。そして、二、三歩歩いた辺りで何故か突然背筋に悪寒が走った。背後にただならぬ気配を感じて振り向こうとしたその時、お堂から叫び声がかかる。

「危ない、逃げて！」

促されるままにその場から飛びずさると、さっきまでちか子がいた空間に、毛むくじやらの腕から生えた大きな爪が、風切り音を立てて振り下ろされていた。

慌てて振り返るとそこには祖母が立っていた。

だが、その姿はあからさまに違っていた。目を金色に輝かせ、口は耳元まで裂けており、両腕は黒い毛にびっしりと覆われ、鋭い爪が夕日を弾いて鈍く光っている。

どう見ても祖母ではない、違う何かがそこに立っていた。

「どうしたんだい、ちか子」

発せられた声も、低いだみ声に変わっている。

「何これ。お祖母ちゃん？ 嘘でしょう、何かの冗談だね」

未だ現状を把握できていないちか子は、驚愕の表情で祖母だった者に声をかける。

（これは冗談なんだ。自分を驚かせる為に組んだ演出なんだ。暫くすれば誰かが木の陰からビデオカメラを手にして出てくるんだ。お祖母ちゃんも特殊メイクで変装してるんだ。そうに決まってる！）信じられない光景を前にして、ちか子の思考は最早冷静な判断を導くことが出来なかった。

「何を怯えてるんだい。怖がらなくてもいいよ。……すぐに本物の婆の所へ送ってやるからさあ。あの世によお」

口調も変わると、台詞を言い終わらぬうちにちか子目がけて飛びかかってきた。

しかし、寸手のところでまたもや助け船が入る。一陣の風が吹き、硬直して動けないちか子を何者かが抱きかかえて、危機一髪救い出したのだ。

「くそつ、邪魔しくさつて。さつき声を上げたのもお前だろう」
ちか子を助けたのは陸だった。

最初に少女が襲われそうになった瞬間、陸はかろうじて声を出すだけで精一杯だった。だが、すぐに思考を巡らせ、行動に移した。（人間の形をしているが、あれがもう一匹の化け猫、小源太だな）そして、小源太が自分より遙かに強いのも分かった。一人で戦えば確実に殺られると本能的に理解したのだ。だから、この場から生き延びる為に咄嗟に身を隠し、無意識の内に体が動きを止めたのである。本来ならば、本能が出した答えに従ってここま身を隠しているのが最善であった。

しかし、現状はそうも言ってられない。優しくしてくれた少女が、目の前で危険にさらされているのだ。

「昨晚の二の舞はご免だ」

鞘に収まったままの『若紫』を右手に握り、陸はなけなしの勇気を振り絞ってお堂の裏から駆け出すと、ギリギリのところではか子を助け出したのだった。

「大丈夫かい、和田さん」

「藤堂君、お祖母ちゃんが、お祖母ちゃんが」

「はあ？ このガキ、まだ儂を婆だと信じてるのかい」

小源太は馬鹿にした口ぶりで、鼻をフンと鳴らした。

「婆はな、儂が美味しく頂いてやったぜ。まあ、歳だけに筋張っていて食いにくかったがな」

「食べた、食べたって……」

「それに比べてあのガキは本当に美味かった。洋子とか言ってたっけ。」

肉も骨も柔らかくて、血の一滴まで堪能できてよお、二度と食えなねえな、あれ程の一品は」

続けざまに発せられる小源太の衝撃的な言葉に、ちか子はたちまち顔面蒼白となる。

「洋子ちゃんまで……嘘でしょう。だってポスターの写真を真剣に眺めてたじゃない。洋子ちゃんのこと心配してたんでしょ」

どうやら役場や駅のホームに張ってあったポスターのことを言ってるらしい。

「ああ、あれはなあ」

やらしい笑いを浮かべると、小源太は意地悪そうに吐き捨てた。

「思い出してたんだよお、あのガキの味を、食感をなあ。ぎゃはははは」

「この野郎、黙れえええ！」

あまりにも卑下な物言いに怒りを駆られて、陸は刀を抜いて飛びかかった。

だが、小源太は刀の斬撃を難なく爪で弾き返すと、後ろへ飛びずさり間合いを取った。

「和田さん、逃げて！」

「……駄目、体が竦んで動けない……」

陸は小さく舌打ちをする。

今、お堂を背にして庇う形でちか子の前に立っている。もし自分たちの立ち位置が出入り口に通じる参道方面を背に向けていたら、ちか子を連れてそのまま戦場を離脱する選択肢を選んだが、現状では厳しい。それに、あちら側もそう簡単には逃がしてくれないだろう。

（ともかく考えられる限りの最善を尽くすしかない）

「和田さん、暫くの間だけど我慢しててね」

ちか子を不安がらせない為に、陸は出来るだけの笑顔を見せると懐から符を取り出す。

「陰陽用いて方盾を成さん。発！」

掛け声と共に符を飛ばす。符は薄い光を放ち、ちか子の前で人間の四角い壁となって消えていった。この見えない壁がある限り、小源太は容易に彼女へ手出し出来ないであろう。

「ほう、ガキのくせに変わった術を使う。お前、ただモンじゃねえな。おもしれえ」

最高の玩具を手に入れたと言わんばかりの喜々とした表情で、小源太は陸に向かって突進してくる。もはや老婆の姿ではない。体長二メートルの巨大な黒猫、まごうことなき化け猫である。

その姿を見て、ちか子は呟いた。

「黒猫、もしかしてサスケ？」

「そうだよ、儂はサスケだよ。本当の名は小源太だがな」

前足を振り上げ、化け猫は陸の脳天目がけて爪を振り下ろすが、横にかわされ空を切る。

陸も負けずに小源太の横っ腹へ斬り掛かるも、これまた身を振ってかわされる。

陸と小源太の間で、軽い応酬が二、三度続く。

「駄目だ、和田さん。奴の言葉に耳を傾けるな」

陸が制止するが、彼女は聞く耳を持たない。

「何で、サスケは洋子ちゃんに助けてもらってたんでしょう」

「ああ、確かに封印から抜け出した直後、弱っていた儂を助けてくれたなあ。だから、それに免じて最初は婆だけを喰らって、とっと出ていくつもりだった。だが、お前がいけなかった」

ギロリと金色の眼を向ける。

「私が、何で？」

覚えのない返答に、ちか子は困惑の表情を浮かべる。

「お前は床の間に飾ってある掛け軸の前でこう言っただろう。私達のご先祖様が描いたんだって、って。あの掛け軸の猫はなあ、儂の子分の又佐なんだよ。そして絵を描いたのは、儂らを陥れた憎つき庄屋の娘、お悠」

小源太の目は憎悪の光で輝いていた。

「だからさ。そして決めたのだ、復讐してやると。あの女の家系であるお前ら一族を根絶やしにしてやるとな。手始めにあのガキを喰ってやった。お前が出ていってすぐ、後ろからガブリとな。骨も血も残さず平らげてやったわ」

歪んだ笑い声が閑散とした境内に響く。

一方のちか子は、祖母と幼い従姉妹が殺された切っ掛けが自分にあると知ってショックを受け、その場にへたり込んでいた。あまりの衝撃に涙すら流れない。ただ、顔を手で押さえて嗚咽するのみだった。

その有様を見て小源太は満足そうに喉を鳴らす。だが、余裕の表情も一瞬で消え失せる。

背後から突き刺すような鋭い感覚、殺気に襲われたからだ。

張り詰めた気配を感じて小源太は頭を向けると、怒りの形相で刀を中段に構える陸の姿があった。手に持つ刃からは紫色の炎が、ゆらゆら立ち上っている。

実際には本物の炎ではない。刀を通じて放たれた陸の気が形取っているのである。『若紫』は扱う者の気力が最高潮に達すると、所有者の気を紫に色づけて刀身に纏う性質を持っている。それが紫の炎に見えるのだ。

そして今、陸の気は最高潮に達っていた。

「お前は絶対に許さない！」

叫ぶやいなや、陸の姿が五つに別れ同時に動く。数多の影が小源太に向かつて刃を振り、次々斬り掛かっていった。

「この野郎、分身使いやがるのか！ ならば纏めてぶった斬ってやるわ」

襲いかかる五人の陸を片っ端から爪で引き裂くが、全く手応えがない。爪に当たったのは全て分身であった。相手の目まぐるしい動きに、小源太はたちまち翻弄されてしまう。

分身相手に動きを封じられた化け猫に、本物の陸が背後へ回り絶好のタイミングで己の持つ剣技を連続で叩き込んだ。

「それでも食らえええ！」

両足を広げ、刀を後ろに構えて上体を左半分捻り、勢いをつけて体ごと斜め下から斬り上げる『弦月』。

そのまま振りかぶって飛び跳ねると、バック宙した遠心力を利用して刀を振り下ろす『風巻』。

最後は自分が最も得意としている技、刀を下から上へ払い、刀身に帯びた気を刃にして放つ『太刀風』で締める。

一つ一つの動きが風を起こし、砂埃を高く舞い上がらせる。脇腹を刎り、背骨を断ち、首を削ぎ落とす。全て稽古通り、完璧に決まったと確信できた。

普通ならば即死であろう。そう、普通なら……。

だが陸は肝心なことを忘れていた。相手にしているのは普通ではない、不可思議と不条理を体現した化け物であることを。

「終わったよ」

ちか子へ振り向いて笑顔を見せるが、彼女は未だ警戒を解いていない。

「危ない！」

叫び声が耳に届いた瞬間、陸は地面へ叩きつけられていた。

胸を強かに打って息が止まったが、身の危険を感じてすぐさま下半身を振り上げると同時に両手を地面に付けて勢いよく飛び起きる。足から着地し目の前を確認すると、体のあちこちに負った傷から血を流しながらも、臨戦態勢を整えている小源太が不敵に笑っていた。

まさかの事態に陸は愕然となる。

「小僧、さっきのはなかなか効いたぜ。だが、儂を仕留めるには、まだ精進が足りなかったな」

「そんな、全部完璧に決まったはずなのに。何で生きてるんだよ！」
絶望の闇が彼の心を襲う。しかし、まだ諦めてはいない。

（自分の剣技が効かないのなら……）

懐から符を取りだして声高に叫ぶ。

「陰陽用いて飛燕を成さん。発！」

何やら不思議な術を使つてくると警戒し、小源太は咄嗟に身構えるが、陸が投げた符は黒い鳥の形に変化すると、そのまま上空向かって飛んでいき、どこかへ消えてしまった。

「んだあ、驚かしやがって。もう、ネタ切れか。んじゃ、こっちから行くぜ」

楽しそうに舌なめずりしながら、小源太は二歩三步と近づいてくる。

陸は内ポケットに手をやり、落ち着いて残りの符を確認する。

（みんなが来るまで何とかもたせるしかない。後には退けないんだ。）

覚悟を決めて再び剣を構える。

陸の心に恐怖はない。あるのは不退転の決意のみ。

鳥形を追いかけて市街地を抜け出すと、周りに人の姿がないのを確かめて、朱鷺野達一行は自らに課したりミッターを解除した。野に放たれた獣の如く、高速で疾走する三人。

「あんにやろう、大怪我を負っているくせに、えらいスピードで突っ走ってくなあ」

自分たちの前に行く又佐の後ろ姿を眺めながら、大信は化け物を持つ常識外れの回復力に舌を巻いた。

「そうだ、全てに置いて常道を逸している。それが化け物というものだ。俺達もそうだろう」

最後にやや皮肉っぽい言葉で締めて朱鷺野が答える。

黄昏の田園風景は深い色相に彩られ、昼間とは違う趣を呈している。東の空には大きな月が真珠色の優しい光を放っていた。今日は満月である。

初めに異変を感じいたのは千里だった。

上空を飛んでいる鳥が、先程から自分達をずっと追いかけているような気がしたが、偶然だろうと考えていた。しかし、広がる田園の中程へ達したとき、鳥がこちらへ急降下するのを見て、ただ事で

はないと判断した。

「危ない、避ける！」

狙いは又佐だった。

すぐさま千里の声に反応し、間一髪で斜め前にジャンプして事なきを得た。上空から甲高い声が聞こえる。

「もうちよつとで仕留められたものを。よくも八太様のお仕事を邪魔してくれたなあ」

八太と名乗ったその鳥は大きく翼を羽ばたかせると、体を巨大化させた。

元から普通のものより一回り大きなカラスであつたが、化物の本性を現せた今は更に大きく、翼を広げた長さは二メートル近くもある。両目は禍々しく輝いていた。

「御大将のご命令だ。これ以上先には進ませないぜ。覚悟しな」

キンキン声で口上を述べる。

典型的なやられ役の台詞を発して小物感が拭えないが、二匹の化け猫以外にも人外の者がいたことに一同は驚きの色を隠せなかった。「おい、又公。今のお前じゃ足手まといだ。場所が分かつてるならとつとと先に行け。このカー助は俺達でくい止める。ただし、依頼主である以上、逃げたり殺されたりすんなよ。契約がおじゃんになつちまうからな」

「見くびるなヨ、小僧。誇り高き我が、そのような契約違反をするわけがなかるウ。でハ、お言葉に甘えて先に行くゾ」

先を急がせる大信に答え、又佐は地を蹴って再び駆け出していた。

「逃がすか」

行かせまいと、追い掛ける素振りを示した八太に短い鉄の棒が襲いかかる。

「おらあ、カー助。てめえは俺達がお相手してやんよ」

鉄の棒は大信が投げつけた棒手裏剣だった。

符術が使えない彼はその不利をフオローするために、様々な武具

の扱いを習得していた。中でも手裏剣投げは得意としており、常に五、六本携帯している。他にも服をまさぐれば様々な武器が出てくるだろう。

「にやろつ、俺様自慢の格好いい翼が傷ついたじゃねえか」

かわし損ねて八太の黒い翼には手裏剣が突き刺さっているが、さほど痛がっている様子もない。それよりも自慢の翼を傷つけられた怒りで頭に血が昇り、耳障りなわめき声を発しながら大信目がけて突っ込んでいった。又佐のことなどすっかり忘れている様子だ。

迎え撃つ側の大信も刀を抜き応戦する。

八太は一旦上昇すると、狙いを定めて急降下を開始する。黒く鋭い嘴が大信の頭上を狙う、がギリギリで避けられる。

大信も身を翻すと、目の前に見える黒い体の方向へ踏み込んで刀を持った腕を突き出す。煌めく剣尖が八太を襲うが、上昇してかわされ、逆に突き出た腕を足の爪で剔られ、傷を負ってしまう。

「ちっ！」

大信は痛みで顔を顰めながらも反撃の機会を窺う。しかし、怪我を見舞ってくれた本人は上空から余裕で見下ろしている。

「大信、どいてろ」

千里が背後から飛び出し自らの得物『夢浮橋』を鞘から抜き出した。

表れた刀身が月の光を反射して輝くと、白い輝きが伸びて空にいる八太へ躍りかかっていた。端から見れば刀身が伸びたというよりは千里の腕が伸びて見えただろう。

だが、刀は狙いを外して僅かに大ガラスの黒い羽を数枚散らしただけに終わった。

その技は昨日大信が町長室で披露した『伸腕』である。

「実戦ではまだまだか。未熟……」

「けひやひや、ばゝか。出直してきな」

相手の小馬鹿にした態度と発言が癪に触り、大信は怒鳴り声を上げた。

「てめえ、こら卑怯だぞ。下りてこい」

（そりゃ、無理な話だ）

千里は思ったが口には出さない。それよりも普段地上で生活している者にとつて空飛ぶ相手は非常に厄介だった。一応、符や剣技での対抗策は授業で教わっているものの、習うと実践するのでは勝手が違う。それに符はなるべく無駄遣いせず、強敵である小源太との対峙まで取っておきたい思惑が千里にはあった。

その時、攻め倦ねている二人に今まで沈黙を守っていた朱鷺野が口を開く。

「おい、お前らも先に行け。こいつは俺一人で十分だ」

先程から手に持っていた風呂敷包みを開くと、中から鎖が付いた長い棒状の物体が顔を出した。棒の先には緩やかに弧を描いた刃が、夕闇の微かな光に照らされて鋭い光を放っている。鎖鎌である。

映画やテレビの時代劇などで時折見かける鎖鎌だが、それらに比べると今朱鷺野が出した物は鎌も柄も鎖も幾分大きかった。柄の長さは、大人の二の腕ぐらいまであるうか。

「大鎖鎌、『弧月と蛇』。村に置いてきたんじゃないんですか」
「マックイーンさんに無理を言つて届けて貰った。今回は指導に徹するつもりで持つてこなかったが、昨日の一件でそうも言つてられなくなつてな。それより、早く行け」

朱鷺野に促されて、千里と大信は又佐が消えていった方向へ走っていく。

「くそつ、俺を無視して話を進めるんじゃないやねえよ」

二人を足止めしようと翼をはためかし降下する八太。しかし固まりが八太の横腹にめり込み鈍い音を立てた。痛みあまり化けガラスは、意味不明のわめき声を上げ地上に落ちる。

「おいおい、お前の相手は俺だつて言つたろ。よそ見してないでこちを向きな」

左手に持った鎖が風切り音を立てて大きな円を描いている。固まりの正体は鎖の先に付いた分銅だった。降下した八太の脇を目がけ

て間髪入れず放ったのだ。

「それと、陸に会ったら伝えておけ。今日は満月だ、『詩』を詠つても良いと」

小さくなっていく後ろ姿に、朱鷺野は大声で伝える。承知したように二人がこちらを振り向いたのを遠目で確認すると、今度は八太に声を掛ける。

「それでは始めようか。俺も急ぐんでな。速攻で終わらずぞ」

「何を！ 地べたで這いずり回っている人間がいい気になって。ムカつくんだよ」

再び大きく舞い上がると、八太は大信へ行つた同じ攻撃を今度は朱鷺野に仕掛けていった。しかも降下する速度は前より上げている。「まったく、馬鹿の一つ覚えが」

朱鷺野も八太目がけて鎖を投げた。しかし狙いを外して分銅は大きく横へ逸れてしまう。

「けひやひや、何処狙つてやがる。このド下手があ」

耳障りな甲高い声を上げてそのまま突っ込んでいくが、八太は気づいていなかった。

逸れた鎖は大きく弧を描き、勢いを付けた分銅が背後から八太へ襲いかかってきたのだ。その動きはまるで獲物を追う蛇の姿を連想させる。

狙いを付けた鉄の塊が化けガラスを貫く。

またもや分銅を体に受けてしまい、八太の突撃は止まってしまふ。だが、背中に衝撃を喰らったものの何とか痛みを堪えると、八太は翼を翻し向かう先を上空へ切り替えて、朱鷺野との間に距離を置いた。上から見下ろす朱鷺野の姿は、人形みたいに小さく見える。

（これだけ上空にいれば鎖も届かないし、空飛ぶ手段を持たない人間は何も出来まい）

八太は高を括っていた。心に多少余裕が出た大ガラスは、自分と相性の悪い朱鷺野を無視することに決めた。そして先に行つた連中を追つか、小源太の命令を無視してバックれるか思案に暮れ始める。

だがしかし……。

「面倒くさいが、奴をあのままいい気にさせてくのも気に入らないな。これで決めるか」

ぶつくさ文句を呟きながら、朱鷺野は懷に手を入れる。出てきたのは煙草、ではなく符であつた。

「陰陽用いて翼を成さん。発！」

気を込めて符を発動させると、自分の体へ張り付けた。

「さて、そろそろライブも終わりにしようぜ。観客が馬鹿ガラスだけじゃ、つまんねえ」

低く身をかがめ両足に力を込めると、上空に目標を定めて勢いよく飛び跳ねる。虎人が持つ驚異的な筋力に加え『黒翼符』の効果により空を駆け上がり、あっという間に八太がいる高さまで達する。

突如姿を現した朱鷺野に八太は啞然とするしかなかった。しかも、

「……なんだよ、これは！」

八太は周りを囲まれていた、五人ほどの朱鷺野によって。

「……いくぜ」

五人は一斉に鎌を振り下ろす。鎌から発せられた見えない空気の刃が、疾風を起こし八太目がけて飛んできた。

「うがぁー！　こんなん喰らっちゃったら死んじまうってえの！」

身の危険を感じた八太は咄嗟に地上へ向かつて下降するが、それは朱鷺野の思う壺だつた。

あらかじめ行動を予想していたように放たれた鎖に、八太は首を絡み取られ、思いつき引き上げられてしまふ。首を絞められて大ガラスは、思わず呻き声を上げた。

分身が消え一人になった朱鷺野が着地すると、同時に八太も体から地面へ激突する。口からは内容物を吐き出し、土にまみれた体を痙攣させてこれ以上動ける状態ではなかった。

「い、命だけは助けて。ただ命じられて動いていただけなんだ」
辛うじて喋れるらしい。

だが、八太の命乞いは朱鷺野に何の感銘を与えなかった。冷めた

目で近づくと、黒い片翼を革靴を履いた足で踏みつける。骨が折れる鈍い音がして、再び八太が呻き声を上げた。

「仮に立場が逆になったとして、はたしてお前は俺の命乞いを聞いてやるか？ 聞かないだろう。まあ、そういうことだ」

不愛想に死刑宣告を言い終えると、容赦なく鎌を振り下ろす。

化けガラスの命はここに終焉を迎えた。

皋月中旬 土曜日 夜 『我は虎 満月に詠うもの』

満身創痍。今の陸には、その言葉がぴったりだった。

繰り出す剣技も放つ符術も小源太には殆ど通じず、代わりに鋭い爪や牙を受けて体中傷だらけである。辛うじて虎人の治療能力を越える傷を負わなかったのは幸いだったが、鋭い痛みが、体を絶え間なく蝕んでいる。体力の消耗も著しく、息は上がり、気力も失せ始めていた。先程まで刀身に帯びていた紫色の炎も、今は消えている。「ケツ、しぶといガキだな。いい加減、くたばりな」

小源太は勢いをつけて突進すると、陸に体当たりをブチ咬ました。何とか両足で踏ん張り衝撃を耐えようとするも、体力のない今の陸には化け猫の巨体を受け止められず、そのままはね飛ばされて、激しい破壊音と共に背中からお堂の扉へ打ち付けられてしまう。もはや立ち上がる気配もなく、陸は壊れた扉にもたれかかったまま項垂れていた。蜂蜜色の頭髮が、埃に汚れて煤けている。

「藤堂君！」

ちか子の悲痛な叫びも陸の耳には届いていない。

「残念だな、お前を守る白馬に乗った王子様は、もう動けねえよ。さあ、今度はお前の番だ。美味しく頂いてやるぜ」

一步、二歩、恐怖で身動きが出来ないちか子の下へ近づいていく小源太。

しかし、参道から駆けてくる小さな影が、一人と一匹の間へ割り込んできた。

「又佐、やっぱり裏切りやがったか。くそっ、八太の奴しくじりやがって」

「裏切るも何も、我は貴様ノ軍門に下った憶えはない」

小源太の行く手を遮り、ちか子の前に立っていたのは又佐だった。その体の模様に見覚えのあったちか子は、自分を守るように身構えている後ろ姿へ声をかけた。

「あなたは、もしかして昨日拾ってきた猫？」

冷静に考えれば、猫が人間の言葉を喋る現象は普通では絶対にあり得ないことであり、もつと驚き慌てふためいていいはずなのだが、超常のものを立て続けに目撃した今のちか子には、ごく当たり前のことのようにしか感じられなかった。

「そうダ。理由あつて貴方をお守りいたス」

そう言つて、又佐は丹田に力を込めると、体を膨張させて小源太と変わらぬ大きさにまで巨大化した。

「聞こえる力、小僧。もう少ししたら貴様の仲間が助けに来ル。それまで何とか小源太の輩ヲ食い止めヨ。我だけでは到底持たヌ。早く立ち上がレ」

助けが来る。陸は又佐からの呼びかけを意識の遠いところで聞いていた。

（そうか俺が飛ばした『飛燕符』にみんなは気づいてくれたんだ。だったら、それまで踏ん張らなきゃ）

陸の瞳に光が宿る。

手を伸ばし、扉がなくなつたお堂の入り口の縁を掴んで体を持ち上げると、刀を杖代わりにして姿勢を正した。そして埃を払う間もなく小源太に向かって駆け出す。

「まだ懲りずに来るか。あのまま眠っておれば楽だったものを」

小源太も身を翻すと、地を蹴つて低い軌道で跳躍し、己が持つ鋭い牙で陸を迎撃する。

お互い正面からぶつかり、小源太の牙が陸の身体を捉えると思われた瞬間、少年の体が一瞬ぶれた。

「なに！」

残像により、攻撃のタイミングを完全に狂わされた小源太は、動きを鈍らせてしまった。

その隙を逃さず、陸はすれ違いざま黒い巨体を薙ぎ払う。続けて又佐が背後から飛びかかり、喉元に食いついて小源太を仰向けに転がすと、相手の息の根を止めにかかる。

斬られた背中から鮮血が飛び散り、巨大な黒猫は痛みと怒りで、
気の狂ったような激しい咆哮を上げた。

「うがああああ、お前ら、お前らああああ〜！」

空いている後ろ足で、のし掛かっている又佐を力任せに蹴り上げて
吹き飛ばすと、すぐに立ち上がって、体勢を正そうとしていた又
佐の顔面へ右前足を叩きつける。

昨日の戦闘で受けた怪我により、端から体力のなかった又佐はその
場に崩れてしまう。

「……決めた。お前ら全員食い殺す！」

憎悪と狂気に満ちた目で小源太は宣言した。

「こ、小僧。まだいける力」

「……何とか」

肩で息をしながら陸は又佐に答える。そして、今更ながらに気づ
いた。

「何であんたが俺の味方してるんだよ。大体、あんたは俺達の獲物
なんだろう」

「今、我はお前達の依頼主となっておる。詳しいことは後から貴様
の仲間に聞け。それより、あと少しだけ持たせヨ。残念だが我は立
ち上がれヌ」

顔だけを何とか持ち上げて陸を見つめる又佐。

「分かった……」

その瞳に真意を感じた少年は、蜂蜜色の髪を振りかざし小源太に
立ち向かう。しかし、気概で何とかなるほど相手は甘くなかった。

「小僧、まずはお前からだああああ」

左前足を大きく振り下ろすと、陸の手から得物を弾き飛ばしてし
まう。弾かれた刀はキンと堅い音を立てて放たれると、高く放物線
を描いて地面へ突き刺さった。

「しまった！」

そう叫んだ時には、既に遅かった。

弾き飛ばされた衝撃で右腕が開き、肩口が無防備となる。そこへ

間髪入れず小源太の大きな顎が食らいついた。骨が碎ける音がして右肩が熱くなる。

その時、遠くから自分の名を呼ぶ声が陸には聞こえたが、誰が来たのか確認することができなかった。目が霞んで意識が遠くなりかける。

ようやく大信と千里が目的の場所へたどり着いた時、二人の眼前では、信じられない惨劇が繰り広げられていた。

「陸！」

化け猫の牙が陸の右肩に食い込み、大量の血が流れ出てる。食いつかれた親友の表情は虚ろで、精気のない目で天を仰いでるだけである。最悪だった。

「てめえ、陸を放しやがれええええ」

怒りに駆られて、大信は刀を構え突っ込んで行くが、対する小源太は、焦る様子もなく冷静に後る蹴りのカウンターを邪魔者の腹に喰らわせる。

冷静さを欠いた大信は咄嗟に対応できず、まともに蹴りを受けて、数メートル後方へ跳ばされてしまった。

「千里、てめえも早く陸を助ける」

土まみれになった体を起こして大信が叫ぶが、

「いや、このままでは化け猫から解放させても、陸は助からない」
努めて冷静に千里は返し、そして現状を分析し始めた。

（傷の深さ、出血の量、どれを取っても致命的だ。おそらく肩の骨は碎けているだろう。人間よりも遙かに頑強な虎人とは言え、このままでは最悪な結末を迎えてしまう……）

端から見れば、瀕死の状況にある友人を助け出そうとしない冷血漢に取られてしまう千里の言動だが、彼も必死だった。動揺と激情に支配されそうになりながらも、心を落ち着かせ、頭をフル回転させる。

（どうすればいい、どうすれば……）

最善の方法を模索していた千里は、去り際に言われた朱鷺野の言葉を思い出し、空を見上げた。

（今日は満月。だが、果たして上手くいくか）

それでも賭けてみるしかない。千里はありったけの大声で陸に伝えた。

「陸、聞こえるか。『詩』を詠え。今日は満月だ、だから野生が暴走することもない。『虎』になるんだ」

『詩』を詠って『虎』になる。

それが思いつく最善の選択だった。陸の中に潜む『虎』の力に賭けてみるのだ。

朦朧とした意識の中、様々な声が陸の耳へ届いてくる。

『駄目ダ、あのままでは助からヌ』

『不吉なこと言うんじゃねえ。三味線にすんぞ』

（みんなの声が聞こえる。ああ、俺もうすぐ死ぬんだ）

『早く『詩』を詠うんだ』

（『詩』を詠う？ だってあの子がいるじゃないか。昼間みたいに なったら危ないよ）

『うめえ〜。このガキの肉は最高に美味い。力が漲ってくる』

（このまま化け猫に食われるのか、何も出来ないままで。……嫌だ、何も出来ないままなんて嫌だ）

『藤堂君、藤堂君！ 藤堂君まで食べられちゃうなんて嫌だよお』

（あの子を守ってあげなきゃ。優しいあの子の涙を止めてあげなきゃ）

虚ろ気な陸の目に濃紺の空が映った。日が沈んだ黄昏の空に白い満月が浮かんでいる。

満月の光は、心の奥底に眠る野生を静かに導いてくれると聞いていた。

理性の名の下、『虎』をこの身に呼び覚ます『詩』を陸は詠い始

める。

「我は天に仰ぎ月を探す者

我は地に伏し爪痕を残す者

黄昏に起きあがり血を求め

暁に涙し贖罪を求める

その名を唱えよ 我は虎なり 我は虎なり 我は虎なり！」

『虎』の本性により過去数多の悲劇を繰り返してきた彼らの先祖は、滅多に獣化しないよう強力な暗示を掛け、『虎』の本性を理性で押さえつけていたのだ。そして安全な満月の夜のみ暗示を解く鍵である『詩』を詠って『虎』になるのを許されている。

小源太は陸の呟きをさほど気にしてはいなかった。観念して念仏でも唱えている程度にしか思ってた。だが、声が止まると同時にある変化が起き始めているに気づく。

古より伝わる『詩』が陸に掛けられた暗示を解き、その身を変化させていることに。

肩が大きく盛り上がり首が太くなる。それだけではない。腕も体も太くなり、毛が覆い始める。牙を剥きだし、手の爪は長く鋭くなり、双眸は琥珀色の光を輝かせていた。

大きな両手が肩に噛みついていて小源太の顎に触れると、口の中に爪を掛けて、もの凄い力でこじ開け難なく引き剥がす。そして、顎を掴んだまま、地面に小源太の頭を叩きつけた。

ゴッ、と鈍い音がして化け猫の頭部が大地にめり込む。

「がふううう！」

血と涎をまき散らしながら小源太がのたうち回る。

見上げると、そこには白い毛皮を纏った虎の姿があった。形は人間だが縞模様の毛皮が体中を覆い、顔はまさしく虎のそれである。

月の光を受けて、白い毛が銀色に縁取って輝きを放っていた。

「きれい……」

ちか子は正直な感想を漏らす。

月に照らし出された陸の姿は神々しくあり、畏怖も恐怖も全く感じさせない。白い毛皮はシベリアのホワイトタイガーを連想させたが、野獣の獰猛さは微塵もない。

「がああああ」

陸は大きく咆吼すると、未だ地面に這いつくばったままの小源太の体を、渾身の力で蹴り上げ大きく宙に浮かべる。そのまま浮いた顎の下に右の拳をめり込ませた。

小源太の口から牙が飛び散る。蹴られた右胸の部分が、外から見ても肋骨が折れているのが分かるくらい窪んでいた。

ここに来て強者と弱者の関係は完全に入れ替わっていた。今や陸がこの戦場の支配者である。

裂かれた服から、白い毛に覆われた肩が顔を出しており、壊れたはずの右肩は『虎』の驚異的な治癒能力で完治していた。

千里はこの能力に賭けたのだ。

「何とか死地から脱したな。大信、陸をフォローするぞ」

「言われなくても分かっただろ。てめえこそ出遅れんじゃねえぞ」

陸が小源太への攻撃を再び開始すると、大信と千里も駆け出してそれに同調する。

化け猫の頭を両手で挟み黒い巨体を大きく振り回し、何度か回転させて手を離れた。

投げ飛ばされた小源太は、背中から勢い良く雑木林の幹にぶつかって呻き声を漏らす。

「こ、この野郎……」

すぐに立ち上がるも目が回って足下がおぼつかない。

そこへ間髪入れず陸が近寄って、先程のお返しとばかりに首根っこへ鋭い牙を突き立てた。これには流石の化け猫小源太もたまらなかった。

「がぶげふごふ、いてえゝ、やめろ放せゝ」

血の泡を吹きだして叫き散らす黒猫の希望通り、陸はすぐに放してやった。

ただし噛みついたままで。

毛皮が引き千切れ、肉が破り裂かれて、鮮血がほとばしる。小源太が地面に伏し苦しみ悶える姿を見て、『虎』は血に染まった口の端をニヤリとつり上げた。

「陸、遊ぶな。時間もないからとつとと終わらせよう」

千里が肩を叩いて陸の得物『若紫』を手渡す。

彼は知っていた。いくら姿形が美しく、神々しい雰囲気、野獣の獰猛さを感じられずとも、『虎』の本性が残酷で強欲であることを。だから、親友が破壊の衝動に魅入られる前に、事を終わらせるつもりでいた。

千里の言葉に頷いて、刀を逆手に持った陸は、一步一步小源太へ近づいていく。

対して、今の小源太に先程までの尊大さはなく、こちらへ歩いてくる白虎に死の気配を感じ、恐怖と絶望に捕らわれていた。

「ひぎゃあ、寄るな寄るな寄るな」

逃げ道を捜そうにも、千里と大信が既に周りを囲んでおり、逃亡の余地はない。残る選択肢は二つ、このまま倒されるか、一縷の望みに賭けて戦いを挑むか。

「儂は小源太だぞ。化け猫小源太だぞ。こんなガキ共にやられてたまるかつ」

自らの意地と誇り、そして何より生き抜く為の活路を見いだそうと、腹を括って目の前に立ちふさがる『虎』へ襲いかかる。

しかし、相手はそれを許してはくれなかった。

「かはっ」

嘲笑にも似た唸り声を上げると、陸は刀を持っている腕を振り上げて、眼前まで迫ってきた小源太の眉間へ刃を突き刺した。加えて右からは千里が、左からは大信が、それぞれ己の愛刀を巨大な黒猫

の横っ腹へ突き立てる。三本の刀が同時に小源太の体を貫いた。力任せにねじ込まれた刀に頭骨を破壊され、小源太は襲いかかる体勢のまま絶命した。断末魔の声すら上げる間もなく。

獣化を解いて元の姿に戻ると、陸は安堵の溜息をついて、その場に座り込んだ。

「やっと終わった」

そこに大信が寄ってきて、頭を思いつきり拳骨で殴る。

「痛つたいなあ、何すんだよ」

思いもよらぬ攻撃に不満をたれる陸。

「うつせえ、この馬鹿が。あんなの相手に無事で済んだのは奇跡だぞ。ったく、こういうときは無理せず退けてんだ。大馬鹿野郎！」

喋る度に声を荒げていき、最後には涙混じりになって大信は陸の体を抱きしめる。

「今日が満月じゃなかったら死んでたんだぞ……」

「……ごめん」

退けぬ理由があつたにせよ、普段は滅多に見せない大信の涙に、

陸は素直に謝った。

「しかし、昨日役場前で見かけた婆さんが化け猫だったなんてよお。鼻さえ詰まってなけりゃ、正体に気づいたかもしれないに。くそっ！」

自らの不甲斐なさをしきりに悔しがる大信。

もし、あの時、町長のコロンに鼻をやられていなければ、臭いで小源太の存在をいち早く感知できたかもしれない。そんな悔しい思いで一杯だった。

少し離れたところから、千里は二人のやり取りを優しい瞳で見守っていた。しかし、表情を厳しいものへ変えると、又佐がいる方向へ顔を向けた。

「さて、あなたの依頼はこれで完了した。後はこちらへ報酬を払うだけだが……」

「報酬つて」

どういう経緯で獲物であるはずの又佐が自分達の依頼主となったのか、それを聞かされていない陸にとって、依頼の報酬が何であるのか気になるころだった。

「この猫が頼んだんだよ。自分の命と引き替えにあの化け猫を倒して、後ろにいるお嬢さんを助けて欲しいと」

千里の指先には、あの化け猫、小源太の死体があった。

動かなくなった黒猫の体は徐々に干涸らびて、乾燥した組織が粉となって風に舞っている。死によって力を失った化け物の身体は、このまま塵となって消え去るのみである。

突然、自分のことを言われて、驚いた様子でちか子は又佐に問いかけた。

「本当なの」

「ああ、本当だ」

「んじゃ、悪いけど支払って貰いましょうかね」

刀の峰を肩に担いで、大信は又佐の前に出る。だが、ちか子が遮るように又佐の前へ飛び出すと、両手を広げて立ちふさがった。

「お願い。この子を殺さないで。この子は体を張って私を助けてくれたんだよ。それを殺すだなんて酷すぎる」

「あのさ、こいつには俺も助けられたんだ。殺すなんてしないで、再度封印って形にもっていけないかな」

陸も申し訳なさそうに頭を掻いて又佐の弁明に乗り出す。

途端に大信の目が鋭くなり、憤怒の表情で地面を蹴って大きな音を立てる。激しい音と動作に、陸の体がビクンと震えた。

「ばっきゃるい、何考えてやがんだ。俺達の元の依頼はこの猫を退治する事だぞ。それを情が移りやがって。大体、こいつは既に三人食い殺してんだ。忘れんじゃねえぞ！」

「それに契約が成立した以上、代価は払って貰わなければ困る。俺達の行動はあくまで契約の上で行われているんだから。ボランティアで動いているわけじゃない」

千里の言葉は『学校』で何度も聞いた。理解もしている。しかし、今の陸にはどうしても納得できなかった。

ちか子が縋りつくように懇願する。

「この子は私を守ってくれたんです。確かに化け猫だけど、いい化け猫なんです。だから」

だが、途中で言葉を止めてしまった。いきなり、背後にいた又佐が声を上げて笑い始めたからだ。

「……イイ、いい化け猫と八片腹痛くて、つい笑ってしまったワ」
陸達三人が刀を構えて臨戦態勢を整えようとしたが、一步遅かった。

又佐は左前足でちか子を抱え込むと、人質に取った格好で他の三人を恫喝する。

「貴様ら一步でも動くなヨ。さもなくばこの娘の命はないと思工。

しかし、人間とは本当に愚かな生き物だナ。こちらが優しい態度で接すれば、すぐに情が湧いて甘くなル。ほんに滑稽ヨ」

「てめえ、最初からこのつもりだったな。汚ねえぞ、クソ猫」

「何とでも言うがよい。我が真に愛したあの人を除けば、人間など所詮は家畜同然。利用する以外に何もない。それを勝手に都合良く解釈してくれテ、『いい化け猫』とは。これが笑わずにいられようカ」

人質を取られているのでは、迂闊に手出しは出来ない。三人がやるうと思えば、すぐにでも又佐を倒すことは出来る。だが、こちらが動いた途端、ちか子の喉笛へ食らいつき彼女を道連れにするだろう。

「さて、我はここから退散させてもらおうとしよう」

誰もがこのまま見逃すしかないと思った。その時、
「がふううう！」

又佐が奇妙な悲鳴を上げて後ろへ倒れた。

その機を逃さず千里が駆けだして、無事ちか子を保護する。

一般人のちか子には分からなかったが、他の三人はしかと見た。

唸りを上げて鎖が飛来し、先に付いた分銅が又佐の顔面に撃ち当たったのを。

「全く、猫もお前らも手間かけさせやがって」

いつの間に現れたのか、朱鷺野が陸の背後でぶつぶつ文句を言つて鎖を振り回していた。化けガラスの八太との一戦を終え、つい今し方やってきたのだ。

「やい、陸。あいつに止めを刺せ」

「え、俺がですか。だって……でき」

「出来ないとは言わせない」

前置きもなく発された朱鷺野の言葉には、有無を言わせない迫力があつた。

しかし陸は倒れている又佐を見つめたまま戸惑っている。共闘して親近感が湧いたのか、先程、ちか子を盾にして逃げようとした相手でも、何故か剣を振るう気にはなれなかった。

見かねた大信が代わりに止めを刺そうと前に出るが、千里に肩を掴まれて止められた。

「これは、あいつがやらなければいけないんだ。昨日の失態に責任を取ってもらうのもあるが、それ以上に今より強くなる為にも、情をかなぐり捨てて戦場に立つ覚悟を示さなければならぬ。ここは陸に任せるしかないんだ」

そうしている内にも、倒れていた又佐が血塗れの頭を上げ動き出した。足下をふらつかせながらも、出口へ繋がる参道目がけて走りだそうとしてる。

そして、参道の方角には陸がいた。昨晚、又佐が囲みを突破した時と同じシチュエーションだ。

「陸、行け！ 昨日の二の轍を踏みたいのか」

朱鷺野が叫ぶ。

顔面に致命傷を受け、瀕死の状態である又佐が、逃げ切れるはずがないのは分かっている。放っておいてもやがて息絶えてしまうだろう。それでも、昨日相手をみすみす逃してしまった陸には、もう

見逃すことはできない。止めを刺すしか選択肢はなかった。

「くそおおおおお！」

刀を振り上げ、又佐へ向かって走り出す。

斬り下ろす瞬間、又佐と眼が合った。その金色に輝く眼は死の覚悟を決めた眼だった。

袈裟斬りが決まり、化け猫の太い首に『若紫』の刃が滑り込む。

紅の鮮血が飛んで、どうと倒れた。

「これでイイ、虎の子ヨ。これでイイのダ」

「あんた、俺に止めを刺させる為に、わざと演技を」

「勘違いされて八困ル。言っただろウ、あの人以外の人間は利用する以外ないト。だから実践したまデヨ。だが、あの人のない世界は何と空しいものよノウ。我はもう生きるのに飽きタ」

又佐は頭を横に向け、涙を流し口元を押さえているちか子へ目をやった。

「あの人に似た美しい娘ヨ。最後に貴方と会えて本当に良かった。貴方に助けられて、復讐で冷えきった我が心が氷解したのダ。礼をイウ」

「何で、何で簡単に死を選ぶの。罪を犯しても生きて償えばいいじゃない」

「それは生者の欺瞞というものダ。罪人の償いなどで殺された者の魂は浮かばれヌ。死によつてのみ贖罪は成されるノダ」

口から血が溢れ、一旦言葉が途切れる。死を間近に感じ、又佐は天を仰いだ。

夜の帳が下りた漆黒の空を、満月の光が藍色に照らし出していた。風が静かに木々を揺らしている。

「ああ、何と美しい月ダ。あの人と見た光景を思いだす。お悠殿、我は今参ります」

前足を天に上げ、月を掴むが如く手を開くと、もう一度口から血を吐き出し、又佐は命の灯火を消した。力をなくした前足が、ガクンと地面に落ちる。

少女が声を上げて泣いた。まるで又佐を送る鎮魂歌のように。

「ちっ、勝手に生きて、勝手に死にやがって。本当に身勝手な奴だ」
それは誰の呟きであつたのだろうか。

斯くして、それぞれの胸中にやり切れぬ想いを残し、化け猫退治は予定より一日オーバーして任務完了となつた。

早朝のプラットホームは日曜日ということもあって、乗客もおらず閑散としていた。時折、雀がホームに降り立ち、コンクリートの地面をつついては鳴き声を上げている。

そんな朝の静寂を打ち破って、大きな話し声が辺りに響き渡り、驚いた雀が慌てて飛び去っていった。

「くそつ、買ひすぎた。持っていくのが邪魔くさくてイカン。おい、陸、半分持ってくれ」

「何言つてんだよ。俺だって両手に荷物抱えてるんだ。朱鷺野さんに持ってもらえば」

大騒ぎしながら陸と大信が、ホームへ続く階段を上ってくる。

二人の両手には大きな白いビニール袋が掛かっており、中にはコンビニで買ってきた弁当やおにぎり、パンにサンドウィッチと食べ物が一杯詰まっていた。これらは全て彼らの朝食である。予定が詰まっている為、早々に次の現場へ赴かねばならず、ゆっくり朝御飯を食べる暇もない。したがって電車の中で食事を取るのである。

「自分で食べる分は自分で持つて行け。それが常識だ」

先程の会話を聞いていたのが、朱鷺野は素っ気なく通り過ぎて先にホームへ上がる。千里も無言でその後続く。無論、彼らの両手にもビニール袋はあった。

「うわ、機嫌悪そう」

陸が感想を漏らす、それも無理はない。なぜなら四人分の朝食代を出した結果、朱鷺野の財布の中身はスッカラカンになってしまったからだ。現時点での朱鷺野の命題は、どこでお金を引き下ろすかだった。

電車が来るまで、まだ少し時間に余裕があった。一同がホームの椅子に腰掛けると人影がこちらへ近づいて来た。

「君は……」

ちか子だった。

昨晩は眠れなかったらしく何処か疲れた表情だったが、身だしなみはキチンと揃えており、清楚な雰囲気を保っていた。昨日とは違う、アイボリーのブラウスに青色の巻きスカートという出で立ちである。

「昨日お礼を言うのを忘れていたから、どうしても言いたくて。皆さん、どうもありがとうございます」

ちか子は深く頭を下げた。

「いえ、どういたしまして。俺達は当然のことをやっただけですよ。綺麗なお嬢さん」

張り切ってちか子へ近づく大信に、これ以上馬鹿な発言をさせない為、千里が咄嗟に学生服の襟元を掴んで引っ張っていき、朱鷺野へ身柄を引き渡した。

「お前もこいつの扱い方が板に付いてきたじゃないか」

「まあ、長いつき合いですから」

「こらあ、俺は猫じゃねえんだぞ。首持って引っ張るな」

三人が一所へ固まってしまったので、陸とちか子の二人が残された形になってしまった。

「あの、何て言ったらいいのか分からないけど、元気出してね」

少々困惑しながらも陸は声をかける。ちか子の祖母と従姉妹は、化け猫などという一般人から見れば不条理な存在によって殺されてしまった。

事件終了後、ちか子は両親に今回の顛末を話して聞かせたが、当然の事ながら信じてはもらえなかった。しかし、朱鷺野やウォレス、それにこの町の町長が自宅にやってきて事情を話し、証拠として化け猫の亡骸を見せた。更に茶の間の床下から祖母の物と思われる骨が発見され、ようやく事態を飲み込んでただ愕然としていた。

行方不明になった洋子や食い殺された女性達的事件自体は解決されたものの、表向きはそのまま時効を迎えるまで放置されたままになるだろう。余計な混乱を招くと予想される以上、化物の存在は決

して表に出してはならないのだ。

「うん、ありがとう。藤堂君には最後まで助けてもらってばかりいるね」

自分を案じてくれた少年の優しさが心に浸みて、自然と涙が溢れてしまう。

片や、これまで女の子に目の前で泣かれてしまうという経験などなかった陸は、慌てふためいて戸惑うばかりだったが、意を決してちか子の両肩に手を置くと、元気な声で励ました。

「今は辛いかもしれないけど、必ず良いことがやってくるから、それまでは前を向いて歩いていこう。悲劇のヒロイン役に自分を仕立てちゃ絶対駄目だよ。そしたら自分は不幸だって思いに捕らわれて前に進めなくなっちゃうから。俺も昔そうだったんだ。でも今は違う。無理でも笑いながら前へ進んできた。そりゃ、時には泣いたこともあったけどさ」

一昨日、バスルームで涙を流したことを思い出して、少し頬を赤くする。

「泣いて泣いて泣くのがすんだなら、後は笑っていこうよ。本当の笑顔じゃなくてもいい。笑い続ければ必ず本当の笑顔になるよ。うん、俺が保証する」

媚びへつらう自分の笑顔が何より嫌いな少年。それでも笑い続けたのは、嘘でも笑っていればいつか心の底から笑顔が作れると信じていたからだ。

「……藤堂君」

涙を流しながらも笑みを浮かべると、ちか子は肩に置かれた陸の手を取って自分の頬に当てる。

柔らかい感触が手の平から伝わってきて、陸の頭から蒸気が出てしまう。顔も耳も見える真っ赤になる。

「あ、そうだ。昨日借りたお金、返すね」

照れ隠しをするように、陸はポケットの中から五百円玉を取り出すとちか子に渡した。

「これで約束通り。やっぱ、はじめは着けないとね」

「別に返して貰わなくても良かったのに」

ちか子の声には不安と寂さが混じっていた。お金を返されたことで、陸との繋がりが断たれた気がしたからだ。

「あのさあ、お取り込みの途中わりいんだけど、もうそろそろ電車が来るぜ」

面白くなさそうな顔で、大信が二人の間へ割り込んできた。おそらく頭の中では、後からどうやって陸をからかってやろうかと色々思案しているに違いない。

ホームに設置してある時計の針は、電車の到着が間近である時間を指していた。スピーカーからアナウンスが告げられ、遠くから電車が線路の上を走ってくる音が聞こえる。

「さて、お前ら行くぞ。忘れ物はないな」

電車が到着し中へ乗り込むと、一同はホーム側のボックス席を陣取る。そして、皆を見送るために窓の側へ寄ってきたちか子に、それぞれ別れの挨拶をする。

「それではお元気で」

「んじやな」

「後は調査員に任せてますから、何かあったら彼に相談して下さい。それと全てが終わったら……」

朱鷺野は言いかけて途中で止め、そして後の言葉を言うように隣へ目配せをした。

陸は承知して頷くと、寂しそうな顔を少女に向けて告げる。

「全てが終わったら、どうか俺達のこととは全部忘れて下さい」

「何で、どうして……」

折角、出会えた縁を断ち切るような少年の言葉に、ちか子は悲痛な声を上げた。

陸もそんな彼女の姿を見るのが辛いのか、沈痛な面持ちをするが、それでも話を続けていく。

「俺達は所詮人の皮を被った『虎』。又佐や小源太と同じ、表向き

は存在してはならない化け物。だから光の中では生きられない。和田さんみたいに表で生きていく普通の人間が、いつまでも俺達みたいなのに関わっていたら闇に飲まれて元の生活に戻れなくなっちゃう。だから俺達の事は早く忘れて」

親しくなった相手を忘れるというのも酷な話だが、それは普通の人間が化け物の魔力に魅入られて身を滅ぼさないようにする、彼らなりの優しさなのかもしれない。

定刻通りに発車のベルが鳴り、電車がゆっくりと動き出す。

ちか子も走る電車に合わせて駆け出すと大声で叫んだ。

「陸くんがそう言うなら私、あなた達の事忘れるように努力するよ。でもね、あなたの言った言葉は絶対忘れない。ずっと笑顔で歩いていくからね」

電車を追ってホームの端まで走って見送った。そして電車の影が小さくなつて視界から消えていくまで、ずっと目を凝らし見つめている。

ちか子は思う。

昨日一日だけの関わりとは言え、彼らを忘れる事はなかなか出来ないであろう。しかし忘れなければいけない、それが約束なのだから。

「でも、この硬貨にあなたの暖かさが残っている内は、憶えていてもいいよね。陸君」

陸から手渡された五百円玉をギュツと握りしめると、ホームへ吹く五月の清風がちか子の黒髪を優しくなびかせていった。

早速、にやけ顔の大信が攻撃を開始する。

「陸くん、ねえ」

「うっさいなあ、別にいいじゃん」

からかい口調の大信に突っかかっていこうとした陸の腕を、千里が突然引っ張った。

「陸、外を見る」

急に言われて窓から外を眺めると、遠くに見知った人間がこちらを向いて立っていた。線路脇のフェンスから見えるその顔は、

「父さん！」

陸の父、ウォレス・マックイーンだった。

父の姿を発見し思わず窓を開け顔を出した陸に向けて、ウォレスは大声で何かを叫んだ。電車の駆動音にかき消されて声は聞こえなかったが、開いた口の形で何と言っているのか分かった。

『が・ん・ば・れ』

頑張れ。父からの激励の言葉だ。

感動に胸が熱くなり瞳を涙で滲ませながら、陸は流れる景色と共に去っていくウォレスの姿を目に焼き付けていた。

「あれえ、陸くん。いつの間にお父さんと仲良くなったのかなあ」
席に戻った途端、またもや大信にからかわれて、陸は顔を真っ赤にし反論する。

「仲良くなんてしてねえよ。大体、俺はまだ許してないっての」
そんな彼の態度を見て、朱鷺野はやれやれと首をすくめる。

（この調子だと陸とウォレスさんと本当に和解する日はまだまだ遠そうだ。最低、十代を過ぎるまでは続くだろうな）

そして彼が成人したとき、どのような答えを出すのであろう。父と和解するのか、そのまま反目し続けるのか。おそらく、これから経験が大きく作用するのは間違いない。

「それより、腹減っちゃってさあ。飯にしようぜ、飯に」

喜び勇んでビニール袋から弁当を取り出す大信。

その背中に何が隠してあるのを見つけた千里は気になって尋ねてみた。

「大信、背中に何を挟んでいるんだ」

尋ねられて一瞬体を硬直させたが、別に何も答えて大信はスルースる。

だが、従兄弟の不自然な態度を見逃すほど、朱鷺野は甘くなかった。

「何を隠している、見せろ」

上着の下へ手をやると、問答無用で隠している物を引っ張り出した。出てきた物は、お姉さんの写真が沢山載っている本だった。

「うわ、何時こんなモン買ったんだよ」

「もしかして……」

思春期の男の子が、心ときめかすエッチな本である。

「没収」

「ああん、俺の本」

「元はと言えば俺が出した金だろう。それをこんなモン買いやがって。この馬鹿、エロガキ。金返せ」

間抜けな騒動に呆れて二の句も継げない陸は苦笑いを浮かべると、これ以上付き合ってられないといった顔をして窓の外を眺めた。

ガラス越しに見える空は青く美しくどこまでも遠い。

死んだ又佐の魂魄は天に昇り愛しい人の下へ行けたのだろうか。

それとも罪のない人々を殺した罰を受けて地獄へ落ちたのだろうか。

それは青空に浮かぶ半透明の月だけが知っている。

陸にはそんな気がしてなかった。

(了)

エピソード 梶月中旬 日曜日 早朝 『風立ちぬ』（後書き）

これにて完結となります。

年数が経った作品なので、投稿するにあたって、文章を色々チェックしましたが、余りにも拙い文章表現や話の内容に、散々身もだえしてしまいました。

こんな不格好な話を最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

感想、批評等ありましたら、受け付けしておりますので、是非お送って下さい。

では、機会がありましたら、次の物語でお会いいたしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9946/>

我は虎、満月に詠うもの

2010年10月8日14時40分発行